
A Aカップはへこたれないッ！

古荒 瓜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AAカップはへこたれないッ！

【Nコード】

N9828P

【作者名】

古荒 瓜

【あらすじ】

高校生の小島ると親友の葉村千春は、一人の男の子を間に挟んでしっちゃんかめっちゃんかのどたばたを……。以前ここにupしていたものの再upです。後味すっきりの青春物語！……に、したつもりです。

○ 何があっても味方なのに。

そこには三人の少女がいた。赤いスカートのセーラー服の少女と、学校の体操服らしい、えんじ色のジャージを着た少女。そして少し離れたところには派手な色彩のパジャマを着た少女。

ジャージの少女がセーラー服の少女の胸倉をつかんでいた。

「何があっても味方なのに！」

ジャージの少女が叫んだ。

セーラー服の少女はこぶしを握り締めてジャージの少女を睨みつける。握ったこぶしを振り上げ、ジャージの少女の顔面に打ちおろした。

鈍い音が響く。一瞬意識が飛んだのか、ジャージの少女は直立体勢のまま後方へ倒れ、背中を地面にうちつけた。

ジャージの少女は立ち上がるうとするが、膝^{ひざ}がぐくぐくと震えてうまくいかない。大量の鼻血がぽたぽたと落ちて地面に染みをつける。唇も大きく裂け、そこからも血が溢れだしていた。

「おい！」

横からパジャマの少女が叫んだ。

セーラー服の少女につかみかかる。

セーラー服の少女はまたもこぶしを振り上げる。

こぶしはパジャマの少女の頬をかすめた。

パジャマの少女は渾身の力を込めて体当たりをする。セーラー服の少女はその衝撃に耐えきれず、大きく跳ね飛ばされて地面に叩きつけられた。砂混じりの土は少女の右頬を容赦なくすりおろす。

セーラー服の少女は顔の右半分を血まみれにしつつも、ゆっくりと立ち上がった。目の前のパジャマの少女を興奮した目でぎらぎらとねめつける。

だれもが、泣いていた。

セーラー服の少女の頬を伝い落ちる涙は、血を吸って真紅のしずくとなり、地面を濡らす。

雨が、降り始めた。

一 あたしは恋人だと思ってますよ

「せんばあい、今日はきつかったですねえ」

ぐったり、といった感じで千春がつぶやいた。

「そうね。今日はなんでこんなにお客が多かったのかな」

私は制服のエプロンを洗濯機に放り込んで答える。

「近くでなにかイベントあったみたいですよ。その客がそのままうちになだれこんできたらしいです」

ここはファミリーレストランのバックヤードだ。食材の倉庫になっていて、缶詰やらソースやらの食材がスチールラックやダンボール箱に山積みされているが、ソファとテーブルも置いてあり、従業員の休憩室も兼ねている。

私はここでアルバイトをしている。週に三、四日、時給七五〇円。月に三万円くらいにはなるから高校二年生の私にとってはいい稼ぎになる。

私、高校二年生の小島^{こじま}るるは、携帯代とケーキ代を手に入れるために、高校の後輩である葉村^{はむら}千春と一緒にここで働いているのだ。

「千春、そろそろ着替えたらず」

「なんか疲れましたあ。着替える元気もないです」

「だらしないわね。お客の前だとあんなにびしっとしてるのに」

千春は座っていたソファの上でずるずる横になる。鶏^{にわとり}のイラスト入りのエプロン、ピンクと白を基調にしたかわいらしい制服、スカートはかなり短い。とはいえこれは千春が自分で勝手に折り込んで短くしてあるだけだったりする。

うちは市内に三件ある小さなレストランチェーンで、この制服はオーナーの趣味らしい。オーナーはいい年したおっさんであんなに好きじゃないけれど、制服を選ぶセンスはいいと思う。

「ねえせんばあい、あした給料日ですよ。しかも日曜日！ やあつと貧乏生活から脱出だあゝゝ買い物行けるゝゝ」

千春は顔をソファにぐりぐりおしつけて呟いた。あーあー、髪の毛がぐしゃぐしゃになっている。せつかく腰までのばした、さらさらできれいなストレートヘアがもったいない。

「んー……」

千春は目を閉じてぐったりとする。その姿はまるで猫のよう。お肌はつるつるのすべすべだ。ああなんか腹立つ、でもかわいいなあ。若いっていいなあ。年齢はひとつしか変わらないんだけどね。「ほら、起きなさい、倒れるのはいいけど着替えてからにしなよ」「疲れて起きあがれませえん、せんぱい、起こして〜」

「いいから、ほら、早く！」

私は千春の手をとり、無理矢理に立たせて更衣室の中にひっぱりこんだ。

今日は大事な日なのだ。

私たちと一緒にバイトしている憧れの同級生、星くんが、「夜も遅いし、今日はお前らを家まで送ってやるよ」などと言い出して、道順からするとまずは千春の家、次は私の家なわけで、つまりつまり、星くんと二人きりになれるのだ。

このチャンスを逃すわけにはいかない。

よ、よし、早く着替えよう。口臭予防スプレーは今日買ったばかりよね。ナイスだ私。

あれ、今日の下着はきれいなやつだったかな。いや、ばか、そういう期待するな、体で男を釣るような女だと思われたらどうするの、そういう言動は慎まないと！

よし、まずは、まずは、どうしよう。

あたふたと、レストランの制服から学校の制服に着替える。いまだきセーラー服。でも赤いスカーフが大きくてかわいい。デザインもオリジナリティがあっってお気に入りだ。

スカートはいつもより大きくおりこんで短く。スカート、テカってないよね？ 無駄毛は、昨日、剃った。こんなこともあるうか

とバイトの前にはきつちり体のお手入れよ！ 鏡で顔のチェック。
まあそこそこの人並みの顔立ち。髪はカットしたばかりのセミロング。今日、少し明るく染めた。

もつと美人に生まれていたらなあとは思っけれど、人生ってのは
いまある武器だけで勝負しなきゃいけないもんなんだから、これば
っかりが仕方がない。

あ、唇が少し乾いているな、リップクリーム。美容室に行ったば
かりの髪は大丈夫、乱れてないわよね。うん、よ、よし。出陣。

「せんぱい、なんか、いつもより気合が入ってますね……」

「そ、そう？ そうでもないけど」

私はちよつと汗ばんだ手で更衣室のドアを開けた。

人通りのない道。街灯^{がいう}が私たちを照らしている。こんなに広い道
なのに、今日は自動車もほとんど走っていない。秋の冷たくなりか
けた風が、私たちをやさしく包む。

星くんは車道側を歩いて、私はその右側、そのさらに右側に千春。
学ランの男子高校生が一人とセーラー服の女子高校生が二人。歩道
に映る影が、ちょうど背の高さの順に並んでいる。

千春はいつものようにテレビとか雑誌とか漫画とかのくだらない
話を一人でえんえんとしゃべっている。助かった。二人だけだった
ら何を話していいのかわからないから。

ちらりと星くんの横顔を見る。うわ、やばい、本当にこういうと
きって心臓がどきどきするんだ。街灯のほのかな光に浮かぶ星くん
の顔はいつもより二割くらいかつこよく見える。学ランの裾^{すそ}からワ
イシャツがちらりと覗いている。明らかにズボンからはみ出た感
じ、だらしない。でも、こんなだらしないさも可愛らしく思える。い
とおしい。

「小島と葉村ってさー、中学生の頃からずっと一緒だよな」
そう尋ねる星^{たす}くんに、千春が答える。

「え、はい、中学生どころじゃないですよ。小学生のころからも

うずつと一緒に」

「そうなのか、おれ、小島や葉村とは小学校は別々だったもんな、小島とは中二の時に知り合ったんだっけ？」

うん。あの頃から、星くんっていいなって、すこし、思ってたのよ。まあそんなこと言えるわけないので、普通に返答。

「う、うん。そう。星くんとは中学の委員会です初めて会ったのよね。千春とはまさか高校まで一緒になるなんて。ね、千春」

「えーあたしがせんぱいを追いかけて同じ高校を志願したんですよ。つれないなあ。星先輩も一緒の高校ですよね」

「ああ、うん。おれの学力にあったところで一番近いところを選んだけなんだけどな」

「あ、星くんもそうなの？ 私もそうだよ。やっぱり近いところがいいよね」

私はそう言ったが、実はうそだ。私たちが通っている亀ヶ崎高校は、本当は私にとってはかなりの難関だったのだ。教師には無理だからやめとけ、と反対されたが、それをおしきって、中学三年生の一年間、ほとんどすべての時間を勉強に費やして、やっとのことで受かったのだ。合格発表の日、不覚にも泣いてしまった。また星くんと三年間一緒に学校に通えると思って。

「葉村はなんでこのバイト始めたんだ？」

「なんでって、女の子はいろいろ自分を磨く^{みが}ためにお金が必要なんですよ。ね、せんぱあい」

「あんた、給料のほとんどを甘いものに費やしてるじゃないの。自分を太らすためにバイトしているみたいなものよ」

「それはひどいですよお。だいたい、あたしがスイーツ食べに行くときはいつもせんぱいも一緒にやらないですか。あたしが太るならせんぱいだって同じように体重が増えてるはずですよ！」

「分銅^{ぶんどう}みたいな体のくせに」

「ほんとにひどい。輝くダイヤモンドみたいなあたしの体、さつき更衣室でせんぱいも見ただしょお。ぼん、きゅ、ぼん」

「ぼん、ぼん、ぼん、じゃないの、あんたは。こないだだってあんたとケーキ食べたけど、あんた三つも食べてたじゃないの。見てるこっちがあんたの脂肪を心配したわよ」

「せんぱいこそ、さつき見ましたけど、きゅ、きゅ、きゅ、じゃないですか。もっと食べないとだめですよ。揉むと大きくなるとかいいですけど、せんぱいには揉む膨らみふくがそもそも」

グーだ。迷うことなくグー。顔はまずい、ボディーだ、ボディー。私の渾身こんしんのレバーブローを喰らって千春はぐふつとうめき声をあげる。

「ほらほら、おまえら、男の前でそういう話をするもんじゃないぞ。あと女子が暴力ふるうな。っていうかさ、おまえらさ、ほんとに仲いいのか？ ちょっと不安になってきた」

星くんは笑いを含んだ声でそう言った。

「いやだな、あたしとせんぱいは仲がいいとかじゃないですよ、超険悪。こないだ、るるせんぱいがあたしんちに泊まりにきたときも、殴り合いの喧嘩けんかしたんですよ」

「殴り合いなんかしてないでしょ。ずっと私にくつついてきてさ。一晩中暑苦しくてたまらなかったわよ。泊まりに行くといつもそうよね」

「うん、わかった、おまえらが仲いいのはわかったよ、お前らってそういうお泊まり会とかよくしてるのか？」

星くんがそう聞くと、千春が答えた。

「お泊まり会っていうよりも、私の家、せんぱいの別荘けんかみたいになつてますよ。せんぱいが家族と喧嘩けんかするといつも家出して転がり込んでくるんです。昔からしょっちゅうですよ」

「あんただって私の家にたまに逃げてくるじゃない」

「だって妹、怖いんですもん。せんぱいだって知ってるでしょ」

「はっは、親友ほがなんだな、おまえら」

星くんは朗らかに笑いながらそう言った。

千春がにこにこ笑いながら答える。

「親友じゃなくて、奴隷と女王様ですよねえ。あたし、いつもせんばいの欲望のはけ口にされてるし、も、もう、あんなの、いやあ」
私の膝蹴りが千春の腹にタイミングよく突きささる。千春はぐはあ、と大げさに声を出した。

「ピ、ピーターアーツ……」

「だれよそれ」

「せんばいは二十一世紀最後の暴君だ」

「二十一世紀になってまだ十年よ、最後の暴君ってどれだけ平和なのよ二十一世紀」

「はっは、そりゃ暴君はいない方がいいよなあ。平和が一番だ」

星くんは屈託のない笑い声をあげた。なんだが、千春のおかげで私もいつもの調子だ。ロマンチックさはないけれど。

「まあ、千春は友達とか後輩とかよりもっとこう、私にとっては姉妹みたいなものかな」

「せんばあい……。あたしは恋人だと思ってますよ？」

「ばーか」

「へへへ」

千春はにこやかに笑って私の右手に腕をからめてきた。

うん、まあなんだかんだいっても親友以上の関係だと思っている。さすがに恋人ではないけれどね。

恋人にするなら……。私はまた星くんの顔を見てしまう。星くんはじゃれあう私たちを見ながら笑っている。あーもしもしも星くんと付き合えたりなんかして、星くんと千春がいたら私ほかになんにもいないなあ。そんな想像をしてついつい口元がほころんでしまった。

私たちは大通りから住宅街の小道にはいる。

星くんが私に聞いた。

「小島はなんでバイト始めたんだ？」

そりゃあなたがいたから！ とは言わない。もちろん言わない。

言いたいけど！

「ちよつと、ほしいものが……えーと、そ、そう、化粧品とか！
で、ちよつと千春がバイトしてるって聞いたからさ、そこで働こう
って思つたの」

「ふーん。小島つてあんまり化粧とかしなさそうだけだな」

「ほ、星くんは？」

「おれも同じだな、ほしいものがあるんだ。バイク。オートバイ。
女にはわからないかもしれないけどさ、バイクは男のロマンだ」

星くんの運転するバイクの後部座席にまたがり、星くんにしつかりと抱きついてる自分の姿を一瞬で想像したのは言うまでもない。

「かつこいいね、バイクなんて！」

目をきらきらさせて、思いっきり感情こめて楽しそうに言つてみた。買つたら私を乗せろー乗せろーと念じて。夕日をバックに、星くんのたくましい背中にしがみつки、私たち二人は風となつて走るのだ。うわ、いい。そういうシチュエーション、うっとりする。

そうこうしているうちに、公園が見えてきた。その隣が千春の家だ。よし、やつと千春がいなくなる、肩慣らし終了だ。でも、どうしよう。よく考えたら、学校では星くんとクラスも違うし、放課後はいつも千春と一緒にだし、高校生になつてからこうして星くんと二人きりになれるなんて初めてじゃないの？ チャンスよ、小島るる！ 私が一人で興奮していると、星くんが公園の前で、突然、立ち止まつた。

「ほんとに、小島と葉村つていつでも一緒でさ。いつもチャンスを狙つてたんだけど、なかなかなくてさ。でも、二人、本当に仲がいいみたいだから、この際、いいかなつて」

星くんはうつむいて足元を見ながら、なんか小さい声でぶつぶつ言い始めた。

ん？ いいから千春を家に押しこんだら、今度は私を家まで送つてほしいんだけど。

「ほんとほさ、」

ん？ んん？ 星くん、なんか顔が赤くない？ 暗くてよくわからないけどさ。声もなんかうわずっている感じがする。

「おれも、小島と同じなんだ。バイトしようと思ったけど、どこでもよかった。したら、ちょうど葉村があそこでバイトしてるのを知ってたさ」

ん？ んんん？

「ほら、葉村ってさ、いつも小島と一緒にいたから、バイト先なら葉村と二人で話せるかもって思ってたさ」

私のせいで千春とあまり話せなかったって言いたいわけ？ 顔から血の気が引く。さっきまではのかに熱く感じていたほっぺたが一瞬にしてさっと冷たくなる。まじで？

「はは、そしたら今度はまた小島もバイトはじめて」星くんは苦笑する。「もう小島いるところでもいいやって思ってたさ」

やめてやめて。私がいるところでもいいってどういうこと。いの方がいいってことですか？ そういう言葉、全世界の誰に言われるよりも、星くんから言われるのが一番つらいんですけど。

あれ、もしかしたら、この展開って？

「えーと、なんですかあ？ ちょっとわからないんですけどお」

口調はいつもどおりだが、千春の顔も少し緊張している。

この空気は、まさか。

「葉村。おれ、葉村のこと好きなんだ。中学の頃、小島と遊んでいるのをいつも見てた。バイト始めて話すようになって、もっと好きになった。よかったら、おれと、付き合って、いや、最初は友達からでもいい。二人で、どこかに遊びにいったりしてさ、で、よかったら。小島いないとこで、じゃ、ない、ごめん、じゃなくて、二人きりで映画とかさ」

声もでない。バイクでツーリングデートの妄想が秒速五〇メートルで吹き飛ぶ。自分の体が自分のものじゃないみたい。え？ あたしは星くんにとって、いない方がいい存在だった、ってこと？ 邪

魔者？ 私、邪魔者？ えーと、いままで何百回、いや、何千回も妄想、いや想像してきた星くんとデートや初めてのキスや初めてのなんやらかんやらの場面が一瞬にして私の脳内でぐるぐるんまわる。あ、これって走馬灯か。私、死ぬのか。さようなら、お父さん、お母さん。それにかわいい弟よ。

二歩、三歩、四歩。私は思わず後ずさった。星くんは今ではまっすぐ千春を見つめている。千春は逆に下を向いて靴で地面をこりこり擦っている。これは二人の世界になったということか。星くんの世界にとって、私はいない子だったのか。

背中に電柱が、ごつんと、ぶつかる。痛いけど、痛くない。

「ええと、あの、あたしなんかを好きになっても、あたしそんないい女じゃないですし」

「すごくかわいい女子だと思う。きれいだし、女っぽいところもあるし」

「だってあたし、がさつだし、魅力ないと」

「いや、がさつでもなんでもないよ、すごく色気もあるし、ってごめん。そうじゃなくて、とにかく、いつもおれ、葉村のこと見てたんだ。好きなんだ」

ゴォン！

生まれて初めて電柱をグーで殴った。いやパーでも殴ったことないけど。しかも二人には電柱を殴る変な女子高生の姿は見えていないらしい。

なんだこれ、なんだこれ。

なんで私の目の前でこんな告白タイムが始まっているの？ といつか、星くんは、ぜんぜん、私なんか視界に入ってなくて、ずっと千春だけを見てたってか。

私はずっと星くんのことばかり考えていたのに。

色気があるのがいいのか。星くん、お前もすけべ男なのか。私が星くんを相手にすけべな妄想をアレコレしてるその時、星くんは千春を相手にあれこれ妄想してた？ あれ。これって、私、すっげえ

かわいそうな女じゃない？

二人とも私の存在などないかのごとく、自分たちだけの世界を創っているように見えた。

沈黙が流れる。

どのくらい、時間がたっただろう。もうとにかく、逃げ出したいだれか、助けて。

千春が、震える声でぼつりと言った。

「ごめんなさい。星先輩とはずっとずっと友達っていうか、そういう関係でいたいです」

また沈黙。千春が言葉を継ぐ。

「星先輩のことはいろいろ尊敬とかしてますけど、私、ほかに、本気で好きな人がいるんです。ごめんなさい」

千春に好きな人なんていたっけ？ いやでも私も星くんのことなんて千春に話したことないし、もしかしたら本当にいるのかもしれない。いや、問題はそこではない。問題は私がどうやってこの現実と折り合いをつけるかよ。

「は、はは。うん。悪かった。ごめんな。でも、また明日から、バイト先で普通に話してくれるか？」

「ん……はい……うん、友達で……」

「わかった。これから、友達で、よ、よ、よろしくな」

星くんの声が震えている。少し泣いているようにも聞こえる。やめて！ そんな、私じゃない女が星くんのことをこんな風に泣かすなんて。見たくない。なにこの残酷ショー？ だれも幸せになっていないんですけど。

また、少し沈黙の時間が流れた。そうして、
「ん」

星くんはうめき声みたいな、なんだか分からない声を発して、
「じゃ、また、バイト先で」

そう言つと、まわれ右、速足で去って行く。

星くんの後ろ姿がずんずんと遠くなっていくのを見ながら、ふと気づいた。え？ 行っちゃった？ ちょっと、私を家まで送るっていうのはどうになりましたでしょうか？ 実際送ってくれるって言われても今さら対応に困るけど、それにしても。

猛烈に腹が立ってきた。よりにもよって私の目の前でほかの女に告白した上、振られて涙目で私をおいて帰っちゃった星くんにもそうだけど、それだけじゃなくて千春にも、それに、みじめな私自身にも。

千春と目が合う。くそ、確かに千春はかわいいわよ。髪はさらさらだし、お肌ぴかぴかで顔は端正で小柄だけとでるところでてるし、しかし、しかしこいつ、私の、私の星くんを、いや私のじゃないけど、今後ずっと私にはならないけど、それはどうでもいいけど、どうしてもよくない、と、とにかく、星くんを、ふ、振った。星くんを、あろうことが星くんを振りやがったこいつ。

街灯の下にたたずむ美少女と、電柱に抱きついていて無様な私。私、今きつと泣いているんじゃないだろうか。この感情、どうしてくれよう。脳みそがどこかに吸い取られた感じ。

で、今日はこのまま星くんと一緒に歩くはずだった道を一人きりでとぼとぼ歩いて、家に帰ったら布団にくるまって泣くわけか。そんなの、私、耐えられる？

いや、無理。

不可能。

インポッシブル。

今この精神状態で夜の街を一人で歩いて帰るなんて、家にたどり着く前に悔しさと悲しさとみじめさで、心臓発作起こして死ぬかもひとつ、大きく深呼吸。

申し訳なさそうに私を見つめている千春の目を、しっかり見つめ返して、ぐいぐいと足を前に運ぶ。

千春の前にしっかり立って、私は言った。自分でもおどろくほどか細い涙声。

「今日、あんたんちに泊めて」

二 所詮A AカップはDカップに勝てないのか

「あら、るるちゃん、いらっしやい。今日は泊まっていくの？」

葉村家の玄関から千春の部屋に行くには、廊下の先の階段を登らなければならぬ。その手前にキッチンがあつて、洗い物をしていた千春のお母さんに声をかけられた。

「はい。今日も、ちよつとお邪魔します」

「あらうれしい。ごはん、もう食べた？」

「あ、はい、食べてきました」

本当は食べてないけど、食欲なんかあるわけないのでこう答えておく。

小さいころから千春の家に泊まるなんていつものことだったから、千春のお母さんも慣れたものだ。

「じゃあ、明日の朝ごはんは食べていつてね。ちゃんとするるちゃんの分も作っておくから」

「ありがとうございます……」

明日の朝だつてたぶん、食欲なんかないと思うけど。

千春の後についていつて、部屋に入る。ベッドと机だけの殺風景な部屋。床はフローリングでカーペットも敷いてない。

私はベッドの上に置いてある大きめのクッションを二つ、勝手にとると床に並べて放り投げ、その上にうつぶせに倒れこむ。千春はクッションがなくなつて広くなつたベッドの上に飛び込むようにやはりうつぶせに倒れこんだ。

そのままなんとなく時間が過ぎ去る。時計の針の音だけが部屋に響いている。

「……うー」

自然と、うめき声がでてしまった。

「む……」

まるで返事をするかのように、千春もうめき声。

またしばらくの沈黙。

ついさっきまで脳みそが蒸発するんじゃないかというくらい、頭の中がぐらぐらと煮えていたのが、今は嘘のように真っ白。なにも考えられない。クツシヨンの匂いを嗅いで、あーいつもの千春の部屋だなーと思うくらい。この匂いを嗅ぐと安心してしまふ自分は憎い。

「……せんばあい、怒ってます？」

どのくらいの時間がたったのだろうか、千春の方から沈黙を破り、話しかけてきた。

「なんで私が怒るのよ」

「だって、せんばい、ばればれだもん。知ってたもん。星先輩がるせんばいのお気に入りだって」

「あーそうでしょうよ。私はあんたに隠し事なんかできないもんね。どうせ私の考えてることなんてあんたにはみんなわかってるんでしょうよ」

「そういう言い方しないでくださいよお、もっと言うと、星先輩があたしのことを気に入ってくれてるっぽいなってことも、なんとなくわかってたんですけどお」

私はクツシヨンに抱きついたままちよつと口調を荒げてみる。

「なんで何も言わなかったのよ」

「せんばいの方こそ。そういう話になったらちゃんと二人で話し合っつて、いろいろ作戦立てようっと思っってたんですよ。まさか、今日、いきなり言っつてくるとは……るるせんばいもいたのに、不意うちでした。不覚でした」

「あんたの本当に好きな男ってだれよ」

「あんなの、口から出まかせですよ」

「ほかにいないならつきあっちゃえば良かったのに」

あんなにいい男。もったいない。

「本当に星先輩のことまじで好きだったならそうしたかもしれませんけどお、そうじゃないんですもん。そしたら、OKしたら、るる

せんぱい怒るでしょ、ほらあ、そしたらOKなんてできないですよ」

ああああ、ああ。なに、この決定的な敗北感。悔しい。ほんとに悔しい。なに？ 私は負けたのか。女として、負けたのか。千春に、世界で一番のかけがいのない親友に。どこだ。どこが悪かったんだ。顔か。いや、好みはあっても顔ならどっこいどっこいだと思う、ほんの少し、負けているくらい。い、いや、やっぱり千春の方がかわいいか？ 肌のきれいさは、悔しいけれど千春のが上か。最近私、おでこのまんなかに、にきびできちゃったし。でもでもそんなに決定的なもんじゃないはず。

スタイルか。千春より私の方が、数値上、若干細いはずだけど、こいつの少しだけむっちり感のある体の方が良かったのか。

性格？ うーん、星くんには確かに私、男っぽいキャラとして認識されていたみたいだけど、それか。一応普段から気をつけていたのに。でも千春の顔を見るとついついはたきたくなくなるからなあ。暴力的な女だと思われたのだろうか。

まさかとは思うけどね、まさかとは思うけどさ、む、胸か。胸なのか。男ってそんなものなのか。揉みたいのか。まさか、星くんも揉みたいのか、胸を。あんな脂肪の塊じゃないか、脂肪だよ、脂肪。言い方変えれば脂肪、だ。あぶら。胸のあぶらの量で女としての力量が決まってしまうというのか。

「^{ダブルエー}所詮AAカップはDカップに勝てないのか」

つい、口に出してしまった。しくじった。自分で言っておいてなんだが、あまりの屈辱感に頭がクラクラして部屋が揺れて見える。「……せんぱあい。さっきは、せんぱいの胸、揉むところがないって言っちゃいましたけど、もしかしたら、撫^なでてもらうだけでも、大きくなるかもしれ」

最後まで言わせるほど私も大人しくはない。猛獣のような速さで立ち上がると、全体重をかけてうつぶせに寝ている千春の背中に向けてダイビングアタック。

「いえっ」

千春は肺から空気を無理やり押し込まれた時特有の変な声をあげてじたばたする。

「だってえ！ 胸のサイズはあたしのせいじゃないもん！ 自分のだつてままならないのにせんぱいが残念無念なおっぱいなのはあたしのせいじゃないよお！」

「毒だ！ 毒を吐く蛇がここにいる！ この口か！ 毒を吐く口はこれか！」

両手のこぶしで千春のほっぺたを後ろからぐりぐりやってやる。

「はたしには毒ありまふええん」

「だいたいなによ、A Aだなんて星くんにはばれてないはずよ。いつもブラにはパッド入ってるし！ 実際には、実際にはどうだとしても、事実よりは大きく見せてたはずなのに！」

「しりまふえんよお、そんな偽装工作する性格が悪いんですよ」

「な、なに、それ、ひどい。自分をきれいにみせるための、美しい努力じゃないの」

千春は体勢を変えると私に抱きつき、ぐるんと回転して器用に私を下に組み伏せる。

「だからあ、揉んで、いや違った撫でてもらえばいいんですよ」

「だ、だからそこまで行かなかったからこうして怒っているの！」

「じゃあこれから毎日あたしがせんぱいの胸を撫でてあげますから大きくなったらチャレンジすればいいですよ」

そう言つて私のセーラー服の中に無理矢理右手をいれる。さすが柔道経験者、私はあつという間に体の自由を奪われ、されるがままだ。

「へへ。ほんととちょっとせんぱいのおっぱい、さわってみたかったんだあ」

「ちよつと、まじで？ 変態蛇女、やめなさいって！」

「うわあ、せんぱいのからだ、あつたかあい」

「あんたちよつとまじで危ないわよ！」

「じゃあ、失礼します」

千春の手がもぞもぞと私の服の中へと侵入してくる。しかし、その先は胸ではなく、背中に。

「ええ！？ まさかブラ外す気？ 直接？」

「おにぎりもおっぱいも、人の手で直接握ってこそ、いい味がでるんですよ。あ、ごめんなさい、せんぱいのおっぱいは撫でるんですわ」

全力で抵抗を試みるが、あろうことか、いつの間にか私の左手に千春の左手がからまっている。これって関節技じゃないの？ 動く痛みが走るので、これはもう、動きようがない。

右手は千春の足でしっかりと押さえられ、左手は関節技。千春は私に背中をむけるような格好で、脇で私のあごのあたりをおさえる。ぴくりとも動けないとはこのことだ。おそろべし、柔道。

情け容赦なく、侵入者の手は私の難攻不落を誇った城に攻撃をかけてくる。

目をつむって覚悟完了。っていうか、まさかこんなかたちで私の『はじめて』が奪われるとは、ああ、ロマンチックな夢や妄想を楽しんでいた昨日までの私にごめんなさい。

ブラのホックが器用に外される。慣れてるな、こいつ。限界までよせてあげていたので、ブラ外されて仰向けだと、もうぺったんだわよ。くそ、涙が出てくる。

そして千春の手が私の穢れ無きやわ肌……。

「……くあ」

思わず間拔けな声が出た。ついに、生まれて始めて他人に生乳揉まれてしまった。いや、文字通り、撫でられた。それも、小学生の頃から仲良しだった親友に。しかも、手つきが、かなり、エロいような気がする。ここでなんらかの反応をしたら本気で負け人生が始まるというか、千春との関係が逆転しかねないので、歯をくいしばって我慢。いや、我慢しなければならぬような感覚はなにもなかったです。ほんとに。信じてください。

「あれ？」

千春が声をあげる。『あれ？』ってなんだ、問題でもあったか。

千春はゆっくりと右手を私の体から放し、関節技をはずして拘束こうそくを解いた。ほっと一息つく。ああ、体が自由になるのって、こんなに幸せなことだったんだ。ひとつ、学ばせてもらったわよ、この変態毒蛇女。

千春は、放心している私にまたがるような態勢になり、その手で私の頭をやさしく撫でた。その目はまさにわが子を愛でる母親のまなざし。

「本当に、残念無念なんです……」

ごつつん！

私の頭突きが千春の鼻面に決まった音。ジャストミート。普段から腹筋鍛えていて良かった。

「いった……！」

「この、」

千春がひるんだすきに私は上半身をおこし、襲いかかる。

「本気の本気で怒ったわよ！」

「もう、あたしだって怒ったんですからね、今のはこの半年で一番痛かった！」

千春も迎撃態勢。二人とも制服も髪も顔もぐちゃぐちゃだ。

今日に限っては私も全力だ。なんか高揚してきた。この目の前の変態毒蛇百合女を、二度と逆らえないくらい叩きのめしてやる。

私たちは、お互いにつかみかかり、ベッドの上ではちばちとビンタの応酬。

「そんなあぶらのかたまり胸にひつついてるからっていい気になってるんじゃないの！？」

「ほんととせんぱいだってほしいくせに！　撫でるだけじゃ足りなかったら今度は舐めてあげますよお！」

女子高生の喧嘩としてははしたないことこの上ないが、私たちは小学生の頃からこういうやり方で戦ってきたのだ。

その時だった。バン！ と大きな音をたててドアが開いた。

静かな、ハスキーで凄みのある声が部屋に響く。

「てめーら、たまには女らしく、かわいらしい口げんかはできねえのか。いつもいつも取っ組み合いしやがって。今年で何回目だ。もう高校生なんだろう？」

入口に凜として立つ、金髪ベリーショートの釣り目の少女。その目つきはするどく、怪しげな光さえ放っているかのように思える。直線を描く眉毛が気迫を感じさせる。でも着ているパジャマは国民的アイドル、猫型ロボットの図柄だ。

「風呂、あいたぞ。まずは客人からだ、るから入ってこい。着替えは私のを使つていい。いつもの棚にあるから勝手にとつて着ろ。

タオルもな。おい千春、柔道やりたいならそのうつとおしい髪切つて明日からまた道場に来い。もう負けねえからかわいがつてやるよ」

「はー、美雪ちゃん、見るたびに男っぷりが上がってるわね……。素敵だわ」

喧嘩も忘れ、私は思わず呟いてた。千春は突然の侵入者に声を荒げる。

「美雪、お姉ちゃんの部屋にはノックしてからつていつも言ってるでしょお！ 不法侵入でしょ！ 許さないよ！」

「ほう。やるか。いいぜ、久しぶりに私も千春と勝負してみたかったところだ」

美雪ちゃんは笑つて、しなやかな動きで私たちの前に歩み寄ると、千春の顔を覗き込んだ。パジャマの上からでも、美雪ちゃんが素晴らしく鍛え抜かれた美しい筋肉を持っていることがわかる。美雪ちゃんに勝てる女子高校生は、日本広しといえども何人もいなさそうだ。

すっかり毒気を抜かれた千春は、あきらめた表情で、こう言った。
「……せんぱい、お風呂、おさきにどうぞ……」

ひとまず、休戦。

三 そんなカタカナ表記の言葉じゃなかった気がする

千春ちはるの妹の美雪みゆきちゃんは、姉とは違って、とてもさばさばした性格である。

話すときも女性らしい言葉は使わない。甘えたしゃべり方をする千春とは正反対だ。

実は、おもしろいことに、千春と美雪ちゃんの姉妹は、双子でもないのに学年が一緒なのだ。千春は四月生まれ、美雪ちゃんは三月生まれ。珍しいけどたまにいらしい。うーん、千春のお母さん、頑張ったんだなあ。名前の付け方が安易な気もするけど、そこはまあ気にするまい。

二人は幼いころから柔道をしていたそうだが（小学生のころは千春のが強かったらしい）、千春は中学二年でドロップアウト。美雪ちゃんは県でもトップクラスの選手になった。

美雪ちゃんは今では柔道の特待生として、私たちとは別の高校に通っている。授業料の高い私立だが、なんと全額免除らしい。親孝行だ。

そして今、その美雪ちゃんはベッドの上であぐらをかいて私たちを睨みつけている。私と千春は床にクッションを敷き、その上で二人並んで正座。美雪ちゃんは険けわしい表情だけれども、着ているパジャマが未来からやってきた猫型ロボットである。さらに言うなら私に着ているのも美雪ちゃんに借りたパジャマで、そこにはタライでできたカラクリ人形がにこやかな笑顔でプリントされている。どうも緊張感に欠ける気がしないでもない。ちなみに千春は中学時代の学校指定のジャージを着ている。地味なえんじ色で趣味はあまり良くない。

ベッドのそばの床の上にはお茶の五〇〇ミリ入りペットボトルが3本とポッキーの箱がいくつか、それにポテトチップスふたふくろが二袋。千

春のお母さんからの差し入れだが、美雪ちゃんの険悪な表情を見るに、手をつけていい雰囲気ではなさそうだった。

「さて、千春のドライヤーが長かったせいでこんな時間になってしまったわけだが」

時計の針は十二時をとくにまわっている。それをちらりと横目で見て、美雪ちゃんは静かに言った。

「なによお、美雪だってそんな金髪にしちゃって。スポーツ少女が、そんなの、いいの？」

自慢の髪の毛を遠回しにけなされた気がしたのか、千春はふくれっ面になる。

「心配はいらない。柔道に青春をささげているといっても、私も女の子だ。他の子と違って遊ぶ時間がない分、このくらいのおしゃれは許されているんだ」

「ふーん、そうなの。最近は柔道も禁欲一辺倒じゃなくなってきたるんだね」

私が時代の流れというものに感心していると、

「ほんと駄目なんですよお。美雪、いつも髪の毛のことでおこられてるんです」

美雪ちゃんは千春の言葉を無視して、わざとらしく咳払いをして言う。

「最近はお前ら、ちょっと目に余るぞ。ケンカするにしても顔は叩くなよ。千春もるるも、見られた顔じゃないぞ。二人してぶさいくになつて、お前ら小学生か、それとも正真正銘の馬鹿なのか。なにが原因だ。最初に手を出したのはどっちだ」

「それはあ、最初にせんぱいが手をだしてきたんだよ。ごちーんつて、鼻に、頭突きされた」

美雪ちゃんは私の方を向いて、

「そうなのか。それは本当か」

と、厳しい顔で問い詰める。私はあわてて言う。

「いや、そもそもその前に、私を無理やり押さえこんで、わ、私の、

む、胸を、あれしてきたのは千春の方でしょ！」

思い出すだけで腹が立つ。

「はあ？　なんだ、そりゃ」

さすがの美雪ちゃんも訝^{いぶか}しげな表情だ。

「私はせんぱいの胸が大きくなればいいなあって思っ、協力しただけですよ」

千春はまるでいいことをしてやった、とでもいつかのよう得意満面な笑み。だれかこいつに胸が小さくなる魔法をかけてやってくれ。

「つまり、こういうことか。るるは、胸が小さい」

美雪ちゃんの、あまりの直接的な表現に、びくと体がはねた。

そんな端的^{たんてき}に言わないでほしい。美雪ちゃんも、見たところ、B…いやCは、あるかな。持てる者は持たざる者に対していつでも残酷だ。

「それで千春が冗談半分でその胸を揉んだということだな」

「撫でたのお。あと、ちよっと、つまんだ」

カッとなって思わず手が出そうになるが、美雪ちゃんの前なので我慢する。後で覚えている。

美雪ちゃんが心底、あきれた顔で言う。

「そもそもなんでそんな話になったんだ」

「それはあ、ちよっと深い事情があって」

「その深い事情とはなんだ、聞かせろ」

「えーと、せんぱいがあ、バイト先の星先輩が好きで、」

こんなこと、私から説明できるわけもなく、千春がことの顛末^{てんまつ}を語るのを、恥ずかしさと悔しさで顔を真っ赤にして聞く。あー情けない一日だなあ、今日は。

千春が、あっちこっち脱線しつつも、今日の出来事を話し始めると、美雪ちゃんはベッドからおり、私たちと輪をつくるように座った。目を輝かせて千春の話を聞きながら、ポツキーをばりばりと食

べている。その口元には抑えきれない笑みがひろがっていた。

「そ、それで？ 千春、お前はなんて言ったんだ」

「えーと、ごめんなさいって。他に本気で好きな人がいますって」

「な、なに、そんな男、いたのか？」

「いないわよお、ただ断るための口実」

「で、その男は」

「逃げちゃった。でも明日またバイト先で顔あわせるけど」

「そうかそうか、じゃあまだこの話は続く可能性があるんだな、ふふ」

「美雪ちゃん？」

私は冷たい声で言った。

「もしかして、楽しんでる？」

「いや、そんなことはない、心配してるんだ」

口ではそう言っても顔はほころび、にやにやを我慢しきれないという感じ。正直な性格だ、嘘をつけない性分なんだよね、この子。
「すごい、三角関係っていいよな、実際に聞くとほんとにおもしろい」

「……美雪ちゃん」

思わずドスのきいた声になった。

「い、いや、ごめん」

「あーあ、私、星くんと同じ高校入るためにあーんなに勉強して、バイト先までおしかけて、それでこの結果かあ」

なんだか涙が出てくる。

「るるは、その、星とかいう男に、告白とかはしたのか」

「してないわよ。ただそばにいられば、良かっただけ」

「そうなんですかあ？ほんとに？」

間髪いれずに千春がつっこむ。

「う、そ、そりゃ、できれば、付き合ったり、なんか、そういうことになればいいなーとかは思ってたけど、なかなか、そういうチャンスがなかったというか」

「話を聞いていると、チャンスがあるなしの問題ではなさそうだが、なかったのはチャンスではなく、脈だろう」

美雪ちゃんもぐさりと言うね。毒舌は遺伝か。血なのか。

「それでえ、せんぱい、どうします?」

「んー、明日も、夕方からバイト、あるのよねえ」

「そうですよ、あたしも顔、あわせづらいですよ」

千春は困った顔で言う。そのくらいのデリカシーはあるらしい。

美雪ちゃんはチョコ菓子の袋を開けた。今開けたので三袋目だ。

一人でよく食べるなあ。チョコ菓子を口にくわえると、美雪ちゃんは千春の方を向いて、

「千春、お前はその男のこと、正直なところどう思っているんだ」

「あたし? うーん、まあ顔は普通だし、そりゃ悪くない男だとは思うけど、線が細いし、なんか服装とかだらしなくて、あのタイプは駄目だなあ。女の子だったらせんぱいみたいに細い子がいいけどさ」

女も選択肢に入っているのか、お前は。

「るるは、どうなんだ、これくらいであきらめるのか」

「だって、星くん、私のことは眼中になかったみたいだし、これ以上どうこうしても、情けないだけだし、あんまりみじめなことはしたくない」

「それでいいのか? 本当にそれでいいのか? 情けないとかみじめだとかそういうことを全部ひっくるめたのが、」

なにその素敵な笑顔。

「恋というものではないのか?」

楽しみやがっているな、この女。

「そうだよお、せんぱい、あきらめちゃだめですよ。今日のあれは、星先輩の一時の気の迷いだったんですよお。そもそもバイト始めるまであたし、星先輩と話したこともなかったんだし」

と、千春は余裕の表情だ。さすが星くんを振った女。

「そうだ、この馬鹿の外面に騙されたただだ、るるの方が人間的に

も女性としてもよほど上だぞ。自信をもて」

「なによそれ美雪、私が人間的に悪いみたいじゃない」

「妹として言わせてもらうが、お前は変態だし、人格も幼稚だし、なにより変態だ。オブラートに包んで言いなおすならば、イカレた変質者だ」

妹にまで変態だと思われるのか、千春つて、やっぱり本物なんだなあ。

「るる。おまえは、私にとっても十年來のつきあいの友達だ。ぜひ、私にも協力させてくれ。るるには幸せになってもらいたいのだ」

「そうよお、せんぱい、あきらめちゃだめです、応援するからあ」

「んー、まだ、チャンスあると思う？」

私がおそろおそろ、そう聞くと、

「チャンスも脈もないとさっき教えてやったではないか」

美雪ちゃんがあくわえていたポツキーを奪いとる。わざとぽりぽりと音をたてて食べてやった。さっきからなんであんなにばかり食べているのよ。スポーツ選手ならプロテインでも飲んでなさい。どろどろの変な味のやつ。

千春はポテトチップスの袋に手を突っ込みながら言う。

「星先輩とるるせんぱいってえ、たしか中二で知り合ったんだから、もう三年以上はたっているんですよねえ。それで、るるせんぱいなりにがんばって涙ぐましいアプローチしてきたのはなんとなく見てわかってたんですけど」

そついう言い方しないでほしい。情けなくて悲しくなる。と、いうか、わかっていたなら協力してくれればよかったのに。女の友情って、こんなものだったのか。

「それがこのような結果になるとは、つまり、るる、お前の外見だとか内面のなんとかだけじゃ星という男の、『いい女センサー』にひっかからなかったわけだ」

なにそれ。そんなものが男に装備されているなんて、今初めて知った。

「いかんせん、私も女だからな、男の気持ちなんて到底想像もつかないよ。でも、幸い道場では小学生から六〇代までのいろいろなタイプの男性と師弟関係^{しでいかんけい}を結ばせてもらっている。で、そういった下^げ卑^ひな話もよくするんだ。つまり、その、なんというか、エッチな話とかもいろいろする」

するのか。セクハラ道場なのか。

「そこで得た知識によるとだな、男というものはどうも、私たちの想像をはるかに超えるほどすけべなものらしい。とくに高校生男子など、一日の九割以上はそういうことを考えて過ごしているらしいぞ」

「ということは星先輩、あたしでいろいろ想像してたってことかー。なんだかなあ」

くそ、星くん、私ならいくらでもオカズに使っていいのに。いや、うそ、やつぱりやだ。

しかしなんだか、二人とも頬^{ほお}を染めているが、何を言いたいのだ。まさか。

「誘惑してヤルことヤツてしまえば、純情なですけべな男子高校生のことだ、お前の体から離れられなくなるはずだ」

「あほか！」

ばしんと渾身^{こんしん}の力をこめて美雪ちゃんの頭をひっぱたく。しかしさすが柔道家、まったく意にも介さない。

「いい！ いいよ、いい。さすが美雪ね！」

千春も感嘆の言葉を叫び、姉妹二人で握手とかしている。いいわけあるか！ おい、親友とその妹。私に体をつかってナニをさせるつもりだ。

「知っているか。私たちの母親は一八歳で千春を産んだ。私の父親に無理やりせまってそういう行為に及んだらしい」

そうなのか。というかそれで一年たたないうちに二人目を産んだわけで、凄すぎないか、葉村家の夫婦は。

「私の父親などは今でもはやまった、などと言っているが、母に言

わければ計画的な行動だったらしい。大成功だったと言っていた」
「やっぱり血か！ 呪われた血のすけべ一族だ、お前ら！」

もう一度美雪ちゃんの頭をはたいて、ついでに千春の頭にもげんこつくらわせておく。

千春は頭をさすりながら、

「痛いですよ、いいじゃないですか、このままだと星先輩がバイトやめちゃったりしたら、もう一生、縁がなくなりますよお」

「それはいやだ」

私は即答。

「でしょお？ だったら、強引でもいいからなんとか行動に移さない」と

「あのねえ、でも私はエッチがしたいわけじゃないの」エッチとか口に出したらなんか顔が赤くなった。私も純情なもんだ。「星くんに、愛されたいの。体じゃなくて心をね」

「……うっわー愛されたいとか良くそういう恥ずかしいセリフを……」

「……うむ、心を愛されたいとか私には一生言えないな。恥ずかしいすぎる」

「ヤッちゃえとか言う方がよっぽど恥ずかしいわよ！」

呪われた変態姉妹たちの頭をぽかぽかとたたいてやる。

美雪ちゃんが私の攻撃を器用にガードしながら言った。

「いいじゃないか、入口が性欲だとしても、出口で愛に変われば文句はないだろう？ ヤラないで後悔するよりヤッて後悔する方がいいと、昔から言うではないか」

「そんな力タカナ表記の言葉じゃなかった気がする」

「いいからあ、せんぱい、あたしたちにまかせてくださいよお。最後はハッピーエンドに導いてあげますから！ 痛いのは最初だけですぐに気持ち良くなりますって」

そう言ったのは私の親友であるはずの姉の方だ。ほんとに親友か。美雪ちゃんはさらにたたみかけるように、

「まあまあ、るる、聞いてくれ。いまお前に必要なのは暴力ではない、愛だ。セックスだ」

「あほか、死ね、変態毒蛇姉妹」

「いいからいいから聞いてくれてば。どうせ倒れるのならば前のめりに倒れよう。大丈夫、私たちがしっかりサポートするから。味方だ」

「……なにを、どうすればいいの」

美雪ちゃんはやりと笑って言った。

「こんなのはどうだ？」

結局、私たちは、空が白み始める時間まで、ぐだぐだと話し続けた。気がついたら千春のせまいシングルベッドの上で、三人がぎゅうぎゅうになつて抱き合いながら眠り込んでいた。

星くんと、いやらしいことをする夢を見た。

くそ、負けるもんか。

四　ちゃんと大きく見えるように胸をはっててください

「ねえ、さすがにちよつと、来るの早すぎたんじゃない？」

時計を見ると、午後三時を少しまわったところ。

「今日も六時からなんだしさあ、三時間もはやいよ」

「なに言ってるんですかあ。あたしはケーキ食べに行こうっていったのに、早く早くってここにひっぱってきたのはせんぱいじゃないですかあ」

開きっぱなしで机においてあるファッション雑誌を見ながら千春が無然とした口調で言う。
ふぜん

今日の私たちは六時からのバイトだ。

星くんは五時からのシフトだから、時間通りに行くと会うことができない。

ので、私たちは早めにバイトに行こう、ということ、バイト先であるこのファミレスにやってきたのだが、さすがに早すぎたか。当然、星くんはまだ来ていない。

私たちはバックヤードのソファに座り、やることもないので雑誌を眺めながらぼけつとしていた。このバックヤードにはスツールと二人掛けのソファ、三人掛けのソファがひとつずつおいてある。私たちが座っているのは三人掛けのソファの方。

秋も深まり、風も冷たくなる季節、暖房をいれるほどではないが、バックヤードも少し寒い。冬になれば店長がストーブをいれてくれるらしいが、さすがにまだそこまで気温は下がっていない。私たちはなぜかここに常備してある毛布を肩までかけて寒さを凌いでいた。しの一枚を二人で使うとなかなか温い。ぬく噂によると店長は忙しいとき、この毛布にくるまって店で一夜を過ごすこともあるらしい。それと思うと、なんだか微妙な気もするが、寒さには変えられない。

ドアの向こうの厨房から店長が注文確認する乱暴な声が聞こえてくる。さすがに日曜日、こんな中途半端な時間でもお客がいるんだ。

店長も休む時間もなくて大変だ。そうはいつでも店が儲かってくれないと私たちの給料もでないわけで、いいことだろう。

それにしても、寒い。となりにいる千春にくっついて、暖をとることにする。千春は、ふふん、と笑って、首を私の肩に預けてきた。まあ、許そう、暖かいから。

うう、寒い寒い。千春の体温があったかい。

「おー今日ははえーな、おめーら」

厨房からバックヤードに店長が入ってきた。手にはまかないの Pasta の皿と缶コーヒ―。着ているのは星くんと同じウェイターの制服。……同じ制服なのに、着る人が違うところも印象が変わるのはなぜだろう。初々しさのある星くんとは大違いだ。むしろ粗野、という言葉がぴったり合う。私たちにしてみれば頼れる兄貴分、一番身近にいる家族以外の大人の男、という感じなのだが、二十代中盤だという店長は「おれはまだ子供だから」というのが口癖だ。

店長は皿と缶コーヒ―をテーブルの上に置くと、スツールに腰掛ける。くたくたに疲れているのが見ただけでわかる。

「あー腹へったー。疲れたー。最近はお客さんいっぱいくるなー。

冬のボーナス、出ればいいんだが不況は不況だからなあ」

そう言って、店長はペペロンチーノをフォークで器用にくるくるまき始める。

「お客がまだ結構いるみたいですけど、大丈夫ですか？」

私が店長にそう聞くと、

「あ？ ああ、石川さんいしかわにまかせておけば問題ねーよ。っていうかおれもメシ食って休まないと死ぬ。食ったら５時まで寝るから、その場所と毛布、よこせよ」

石川さんはこの店の十年選手、店長がバイトとして入った時にはすでにパートをしていたという、食材の在庫チェックから発注、果ては売上の管理までなんでもできるスーパーパートさんだ。店長ですら頭があがらず、この店で石川さんに嫌われると生きていけない

という影の女王なのだ。

「んーでも店長が入ってれば厨房石川さんが入れるし、かなり楽になれると思うんですけどお。この間、料理がくるのが遅いつてクレームあつたじゃないですかあ」

千春がそう言つと、店長はペペロンチーノを次々に口に運びながら、

「おめーらこんなに素敵な店長さまに対していたわる心というものがねーのか。疲労で死んじまうぞ。おれの人生はこれから花開くつてのに、おめーらおれに死ねというのか」

千春はにこにこ笑つて答える。

「えー店長が死んだら私生きていけなーい」

「おお、その気持ちはわかるぜ、ま、おれが死んだら後を追うくらいおれに惚れてる女は一〇〇人はいるんだが、そいつらを説得するのも楽じゃねえ。ほんとのところ、人間、だれかが一人死んだくれーで生きていけなくなるなんてことはねーんだけどな」

女性と付き合うどころか、家に帰る暇もないくせに良く言うもんだわ。店長は毎日開店準備から夜十二時の閉店後作業まで働いているのだ。そういえば、店長の浮いた話は聞いたことない。私たちバイトの間では『店長ゲイ説』がまことしやかにささやかれている。

「いま、ホール、石川さんとだれがはいつてるんですか？ 一人じやきつそうなんですが」

私がそう聞くと、

「ああ、こないだ入った新人がいるよ」

「新人？ いくら石川さんだつて新人と二人じゃさすがに無理じゃないですか？」

「新人たつて、出戻りだよ。去年までここで働いてたんだ。言つとくけど、おめーらより使えるからな、ちゃきちゃき働かないとクビにしちまうぜ」

あつという間にパスタを平らげると、店長は缶コーヒーのブルタブをあけてすすった。

「しつつかし、おめーらしいつも仲いいな。いつでもくつついてるし、あぶねえ関係じゃねーだろうな」

「そうなんですよお。あたしたち、実はもう、一線を越えた関係なんです。あたし、もう、せんぱいの禁断の果実を食べちゃった。ねーせんぱあい」

「なに言ってるのよ、本気にする人いたらどうすんの」

私はそうたしなめるが、店長はにやにや笑う。

「ほう、そうなのか、ま、女同士の方が感じるツボがわかるから、具合がいいらしいな。で、どっちが攻めで、どっちが受けなんだ？」
そういう話題を振ると案外乗ってくるんだからこの店長。千春もいい加減にしてほしい。

「どっちかっていうと私が攻めなんですう。昨日も、私、せんぱいのあそこを撫でてあげましたよねえ」

私の肩に頭をのつけたまま甘ったるい声で千春がそう言う。あながち嘘でもないというのが腹立たしい。っていうか、あそこって。

「ぶったたいてやろうかと思ったけどやめた。寒いし」

私がそう言うと、千春はいつもの屈託のない笑みで答える。

「私とくつついていたいんですよ。私あつたかいもんね。私はせんぱい専用人型カイロですから」

「使い捨てのね。そのうちゴミ箱に捨ててやるわよ」

「使い捨てなんですかあ？　さんざんもて遊んで欲望満たして飽きたらばいなんだ。私が捨てられたら店長、拾ってくださいます？」

店長は缶コーヒーを飲み干すと、部屋の隅にあるごみ箱に向かつて投げる。空き缶は力コン、といい音をさせてごみ箱におさまった。行儀が悪い。

「拾うけど一晩で捨てるぞ。いいから、そこ、どけ。寝る。悪いがこの皿片付けといてくれ」

私たちが給料もらえる場所があるのもこの店長の頑張りのおかげだし、店長が休憩したいというのを邪魔する理由はない。皿くらい片付けてやってもいい。

二人で一緒にかぶっていた毛布を店長にわたすと、三人掛けのソファを店長にゆずった。店長は乱暴に靴を脱ぎ、ソファに横になるというか上着くらい脱げばいいのに。しわになる。私たちから受け取った毛布をかぶるうとして、店長はぼかんとした顔になった。

「おい……おまえら、なんだその格好。っていうか、いつもと違うよな？ ……最近の女子高生というものはそういうものなのか？」
「えーなんのことですかあ？」

千春はそうとぼけたが、やはり、一目でわかるか。今までは毛布で隠れていたんだけど。

私たちは休日でも制服を着て出歩くのが普通。正直言うと服を買うお金がないというのもあるが（バイト代はケーキと携帯電話代で消える）、うちの高校の制服は地元ではそこそこ人気のある逸品なのだ。

なにしろ、中学高校含めてもセーラー服を採用しているところが市内でうちの高校だけというのが高ポイントである。二十年ほど前に共学になるまでは清楚な女子高で名の通っていた高校なので、高年齢の人にも受けがいい。

ところが今日の千春の服装は、どぎついピンクのゆったりとしたトレーナーに八八〇円で買ったいかにもなジーンズ、泥でよごれて真っ黒になったまま洗ってない五八〇円のスニーカー。トレーナーには外国の無名のアニメキャラクター（その上かわいくない）がかでかとプリントされている。

……どう考えても、あるかないかで言ったら『なし』のセンスだ。女子高生がこれで外に出歩くのはちょっときつい感じ。スニーカーが一番ヤバイ気がする。

もともとの持ち主である美雪ちゃんがクローゼットから自分で取り出してきたものだから、一応、美雪ちゃんも『なし』だということとを自覚はしていたのだろうか。

私は学校の制服。昨日着ていたのはしわができたので家で着替えしてきた。くそ、千春め。

いつも通りといえばその通りなのだが、ひとつ違う点はスカートの丈をかなり短くしているところだ。どのくらいかというところ、寒くて仕方がないくらい。具体的にはソファに横になった店長が眉にしわをよせて、私にかけた言葉でわかんと思う。

「あー……、小島あ、一応それ、スカートはいてる、んだよね？」

「瞬はいてないかと思った」

「ちゃんとはいてます！」

「だがな、このおれの位置からだ、あのな、なんというか、言っているのか悪いのか、この場合言った方が親切だよな、……見えてる」

「ちよつ、ちよつと、やめてください！ やめて！」

思わず叫び声をあげた。スカートを手で押さえて後ろを向く。

千春があわてて私と店長の間にたちふさがる。

「店長！ 見ちゃだめですう！ 目を閉じて！ 眠ってください。」

安らかに。永遠に」

「やっぱりおめーらおれに死んでほしいんだな」

「目を閉じないとあたしたちが店長を殺しますよ」

「殺すのかよ」

「社会的に」

「そりゃかんべんだ」

店長は案外素直に目をとじた。

「若いと馬鹿って同義語なんだなあってしみじみ思うよ。あー、5時前におこしてくれ。あと、風邪ひくなよ」

しばらくすると、店長の寝息が聞こえてきた。あつという間だ。本当に疲れていたのだろう。

お仕事お疲れ様、さっきのは私からのねぎらいのプレゼントだと思ってください。でも忘れてください。そのためなら厨房にあるフライパンで頭殴るくらいのお手伝いします。

千春は店長にそつと近づき、寝息が軽いいびきに変わったのを確認すると、私に親指をたててみせた。そして私から少し距離をとり、

上から下まで私の全身をねっとりとした視線でチェックする。

「ん、大丈夫、下から覗かない限り見えないですから、安心してください」

「ほ、ほんとね、ほんとに大丈夫？ やりすぎるとほら、逆にさー、

」

「大丈夫ですよお、それに、胸も、ちゃんと偽装工作成功してます。ばっちりです」

「工作とか言うな。このくらい、化粧と同じ、身だしなみよ、身だしなみ。普通のこと」

今日の午前中は千春とデパートに行き、新しいブラを買った。店員さんと相談しながら試着に試着を重ね、やっと見つけた魔法の品引き出したばかりの給料はあらかたふつとんだが、女にはお金よりも大事なものがあるのよ。

「ちゃんと大きく見えるように胸をはっててください」

「ん、うん。がんばる」

「がんばってください。がんばりましょう」

私を安心させるためだろう、すごくいい笑顔を私に向けてくれた。「が、がんばるわ」

少しの間、私は千春の顔を見つめた。千春は『んっ？』というように小首をかしげ、微笑んでみせた。なんだかんだで私に協力してくれてるんだもの、この子もいい子よね。親友なんだもの、当然。友情って、美しい。

その時、思ったよりも早く、星くんがバックヤードに入ってきた。

五 見えそうで見えないのがエロいんであって、モロに見えるのはだらしない

星くんは、ちらりと私たちに視線をやると、瞬間、体を硬直させた。千春には視線を送らず、私の方を向いて、のどの奥から絞り出すような声で挨拶をした。

「おはよう」

無理に笑顔を作っているようだけど、やはり、その表情は硬い。

「おはよう」

「おはようございます」

私たちも挨拶を返す。

星くんはソファの上でかすかにいびきを立てている店長を見、少し迷っている様子を見せた後、男子更衣室に入って行った。

私はほつと、息を吐いた。星くんの姿を見た瞬間、心臓の鼓動が跳ね上がるように激しくなった。これはやっぱり、好きなんだなあ。

あの様子では、せっかく短くした私のスカートも目に入っていないかっただろう（もちろん胸も）。千春がわざと似合わない服を着ていることにも、気付かなかったかもしれない。

千春が私の耳元でささやく。

「せんぱい、じゃ、いったん、あたしここを出ますから。がんばれ！」

そう言って私の手を握ってくれた。

千春がいなくなると思うと、さっきまでは感じなかった緊張感で胸の奥がぎゅっと締めつけられるように痛い、負けるわけにはいかない。

「じゃ！ せんぱい、あたし、そのコンビニに買い物行ってきますねえ。雑誌とか立ち読みしてくるけど五時過ぎには帰ってきますから！」

千春が更衣室の中にいる星くんにも聞こえるように、わざと大き

な声で言う。

「うん、オーケー」

そう私が答えると、千春はニカツと笑ってバックヤードから出て行った。

千春がそばにいなくなると、改めて不安感や、恐怖感が襲ってきた。なんだかんだ言っても、私は千春にかなり頼っていたらしい。一人でなにかに立ち向かうっていうのは、本当に怖いものだ。

私は大きく深呼吸する。

『恋愛なんて、そもそもアホなことなんだ。スマートにやろうと思うほうが間違っている。いかに考えないでアホなことができるか、そこが勝負だぞ』

昨日美雪ちゃんに言われた言葉を思い出す。きっとだれかの受け売りだろうけど、その言葉通りやってみよう。

考えるな、アホなことをやるんだ。

むむ、私、なんか震えてるぞ。そんなにやわなつくりの女じゃなかったはずなのに、いざとなったら怖気つくのか。

いやあ、頭と心って、別々なんだなあ。心臓のときどきは、理性で抑えられない。

そんなことを感慨深く思いながらソファに腰掛ける。

膝は、ちゃんと閉じてた方が女の子らしいだろう。ぴた。それとも、この際、少し隙を見せてやった方がいい？ どうせさつき店長に見られちゃってるし。ぱか。いやでもさ、だらしないとかはしたないとか間抜けっぽいとか思われてしまうだろうか。ぴた。でもそれじゃせっかくミニにしたんだし。間をとって、二センチだけ開けておこうか？ ぱか。

冷静に考えるとものすごく頭がからっぽな女の行動だが、案外真剣にそんなことをしていると、星くんが着替えて更衣室からでてきた。

反射的にソファから飛び上がってしまう。

星くんは照れたような笑いを浮かべながら、私の方へ来る。

「小島、あのさ、昨日は……ごめんな」

「え？ な、なにが？」

声がひっくり返る。でも、昨日の私たちの予想通りの展開だ。この時間はバックヤードに店長のほかだれもないのも、店長が寝ているのも、そして星くんが昨日のことを私に謝ってくることとも。

「いや、ほらさ、昨日、おれ、二人に、いろいろ迷惑かけただろう？ それにさ、あんな遅い時間になったのに、小島を送るとか言っ
として、置いて行っちゃったじゃないか。悪かった。ごめん」

そして頭を下げる。

うんうん、星くん、わかってるわよ。昨日は、ショックなことがあつて、たまたま私の存在を忘れちゃっただけよね。うんうん。ちゃんと気がついて、謝ってくれるんだ。それでこそ私の星くん。いや私のじゃないけれど、これから私のにしてみせる！

「いいのよ。私、あれからそのまま千春の家に泊まつたし。あ、別に置いてかれちゃったから仕方なくそうしたんじゃないよ。ほら、昨日のこと、いろいろ千春と話したかつたし」

「あ、ああ。そういえば、よく葉村の家に泊まるって言ってたもんな……」

「うん。そうなの。それでね、星くん。昨日、千春といろいろ話し合っただけだ」

「……葉村、なんか、言ってたか？」

「うん。あ、悪い事じゃないよ。星くんはいい男だし、かつこいいつて」

「あ、そ、そうか。はは。でも、葉村には好きな男がいるんだろう？ 悪かったよ。葉村にも小島にも。せつかくここで楽しくやってたのになんか変な波風たてちゃったみたいで」

「そんなことはいいの。それでね。星くん、もう、千春のこと、あきらめちゃうの？」

星くんの目をじっと見る。私の心臓はもうときどきだ。星くんも私の目を見つめ返す。あーもう、この瞬間が永遠に続けばいいのに！

「あきらめて、いいの？ 本当に、もう駄目だと思っている？」

私の質問で、星くんの瞳に少し希望の光が宿ったように見えた。胸が、ちくりと、痛む。ごめん、星くん。私、今から少しばかり、嘘を、つきます。

「え、だって、葉村にはもう、好きな男が」

「いないよ、そんなの。昨日はいきなりだったから、びっくりしちやっただけ。星くんのことが嫌いなわけでもない。少し、意識しているところもあったって」

星くんの表情が少し明るくなる。胸がちくちくどころじゃない、ぐさぐさ痛む。

「でも断っちゃったから、もったいなかったけれど、もういいかと
か言ってた。でもね、脈、ないわけじゃないの。まだ、これからよ
だからね、私、星くんの味方する。星くんはいい男だし、星くんと、
千春をくつつけてあげるよ。まかせて」

「そ、そうか？ 本当に？」

さっきまで死人みたいだった星くんの顔色が、ぱあっと明るくなる。

「うん。今夜にでも、作戦たてて星くんの携帯に電話するね」

「お、おう」

やった！ 電話かけてOKの約束とりつけた！ 番号とかメール
アドレスは前から知ってたけど、んでたまに夜中にその番号を呼び
出して通話ボタンを押すふりしたり、メール作成して送るふりした
りしてたけど、今度はほんとに電話かけられる！ ……やり方、姑
息^{そく}だけ。

「まかして。恋のキューピッド、私やるから」

ほんとはそのキューピッドは、自分とあなたをくつつけるように
動くんだけどね。

——いいか、私の同級生だけでも二人いる。

昨日、美雪ちゃんはそう言っていた。

「たとえば、男がある女の子に恋したとする。悩んだあげく、男はその女の子の友達に相談するわけだ。何度も相談を重ねるうちに、いつのまにか情が移り、男とその友達がくっつく。実際に私の知り合い二人がそれで恋人をつくった。漫画とかでもよくあるパターンだ。今回の場合、るるが男の相談役になる。で、ここが肝心なのが、千春はるるの味方なわけだ。期待をもたせ、望みをつなげ、男がるるに情が移るまで千春は曖昧な関係^{あいまい}をひっぱりつづけなければいい。この場合、時間は私たちの味方だ。決定的に失敗するリスクは低いし、成功の確率も高い。ついでに色仕掛けも忘れるな。その女の子を好きか嫌いかは別にして色仕掛けされるとコロッ^{コロ}といってしまう、と道場に通う既婚者の男性が言っていた」

そう、つまりはそういう作戦だった。

星くん^{ほしくん}に希望をもたせ、千春との仲をとりもつフリをしつつ、それを理由に星くんと急接近！ 気がついたときには星くんは私の魅力^{みみど}に気がついて、いつのまにかラブラブに！ 完璧だ。さすが耳年増^{しみ}の美雪ちゃん。

おっと、色仕掛けも忘れずに。

色仕掛けって、なにをすればいいんだろう。

うーん、色仕掛けって言ったら、まずスキンシップよね。

そうだ。まずは、て、手を握ってみるというのはどうだろうか。

い、いや、腕か。腕をからませてみよう。つ、つ、ついでに、む、む、む、胸をおしつけてみる、というのもべただけど、い、いいいいいかもしれない。どうせ本物とパッドの感触の違いなんてわからないだろうしっ！ 本物の乳じゃないからいいの！ 恥ずかしくないかない！

よ、よし。『応援するから！ きゃは！』とか言っつて、さりげなく腕を組むんだ。そして胸を！

アホになれ！ 私！

「ほ、ほ、星くん！ 私、千春と星くんがつきあえるように、応援

するからね！」

裏返った声でそう叫んだ私は、星くんの腕めがけて突進！

……しまった。

そう思った時にはもう遅い。力の加減を間違った。

私の横綱ばりのぶちかまして星くんは体のバランスを失い、壁際のスチールラックにぶつかる。

「いってえ！ か、缶詰が」

スチールラックいっぱいに積まれていた缶詰のいくつかが衝撃で落ち、そのひとつが星くんの頭にヒット。

「……今のは鼻につんとくるほど痛かった……」

星くんが頭を押さえてうずくまる。というか、鼻につんとくるほど痛いつてなにその表現。かつこいい。

「ご、ごめん。ごめんなさい。大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫。それより、缶詰、拾わないと。石川さんに怒られる」

二人で床に転がる缶詰を拾い、スチール棚に戻す。店長はともかく、石川さんにこんなところを見られたら大変だ。星くんが最後の缶詰を拾うために、しゃがみこむ。

そこで、私は発見してしまった。

「ほ、星くん？ あ、あのね」

「ん？」

星くんは最後の一つの缶詰を棚に片付け、振りかえる。

「あの、……スボンのチャックが、あいてる……」

「うわ、ごめん」

「い、いいよ私がし、しめてあげる！」

これも色仕掛けの一環だ。こういうのもエロく感じるに違いない、きつと。

「だ、だめだつて！ だめ！」

星くんは抵抗するが、私は無理やり星くんの股間に手を伸ばし、チャックをあげる。

「あ、シャツも出てるじゃない。だらしないなあ」

スキンシップ、スキンシップ。

星くんのシャツの裾をつかむとそれをぐいっとズボンの中に押し込む。

「ちよつと、小島、や、やめる。やめなしゃい」

「ああ、もう、星くん、動かないで、また乱れちゃう」

私ももう頭の中でお星さまがぐるんとまわってわけがわからなくなっている。星くんだけにお星さまだ。星くんは私のお星さまだ。ぐるんぐるん。

星くんがあちこち動くもんだから、ズボンの中に突っ込んだ私の手はなかなか抜けない。ふたりで下手なダンスを踊っているようにあっちへこっちへじたばたする。と、その拍子に。

「あ」

「う」

じゃり。あまりに強く手を引っかいたものだから、親指の付け根をベルトで少しすりむいた。い、いや、そんなことより。

右手の先に、今、なんか、私が生まれてこのかた、一度も経験したことのないような奇妙な感触を感じたような……。なまこというか、こんなにやくだいいうか、むにゅつとしたのが。こ、これは、たぶん、きつと、……。

「きゃゝゝあはははあゝゝゝゝゝはっはっはっはっは」

私は悲鳴をあげたが最後には変な笑い声みたいになってしまった。星くんはいつそう乱れたズボンを直しながら、顔を真っ赤にしている。たぶん私もそうだろう。

私は思わず両手で顔を隠し、その手で何をさわったかを思い出すとあわてて離してスカートにこすりつけようとして、いやでも拭いちやうのもそれはそれで失礼なようなもったいないような。そんなことを思っ手て手をどこにもっていけばいいのやら、ばたばたさせていると、

「ご、ごめん。も、もう仕事に行ってくる。そ、相談には後でのっ

てくれよ」

星くんは背中私にそう言っ厨房へのドアを開けた。首まで真っ赤にしてる。

星くんが出て行っ後、ドアがぱたんと閉まる音で、私は全身から力が抜けていくのを感じた。

「ははは、結果的には、せ、成功、かな？」

そう独り言をつぶやくと、後ろから、

「失敗に決まってんだろ」

と、声が聞こえた。

とっさに振りむくと店長が半身をおこして、こちらを見ている。

その目は、呆れ^{あき}というよりも、憐れ^{あわ}みの光が宿っているように感じた。

「て、店長？ い、いつから起きてましたか？」

「缶詰おちた音で」

「は、はは、ごめんなさい」

「若いと馬鹿は同義語だと思っていたが、どうやら若いやつ^の愚かさ^さというのは馬鹿などという言葉では到底言い表せないらしい」

「はははは」

どうリアクションを返せばいいのかわからなかったので、とりあえず笑っておいた。

「小島あ」

「はい」

「スカートめくれてるぞ」

「くああああははは、み、見ないで」

「覚えておけ、見えそうで見えないのがエロいんであって、モロに見えるのはだらしない、と言っんだ」

「はははははははは」

私の笑い声もはや乾いている。

店長は立ちあがり、毛布を無造作にソファの上に投げつける。

「目が覚めちまつたよ。顔洗っ仕事だ。小島あ、手洗っってから水

ールに出ろよ」

「は、はい」

「馬鹿やるのはいいが、あんまり残酷なことはするなよ。星だって昨日は電話で泣いてたんだ」

そう言い残し、店長は伸びをしながらバックヤードを出て行った。星くんに見られちゃっただろうか。見られちゃったよね。今日はお気に入りのパンツでよかった。まさか一日に二人の男にパンツを見られちゃうなんて。これはもう、星くんにお嫁にもらってもうしかないかも。初めて男の、なんていうかさ、こう、変なのを触っちゃったし。

——あれ。なんか店長の言葉がひっかかる。

昨日、電話で、泣いてた？

ってことは、昨日あれから星くんは店長に電話したってことか。

つまり、店長はだいたいの状況を知っていた。

残酷なことはするな、か。ふん、わかってるわよ。星くんは私の大切な人。傷つけるつもりは、ない。

星くんはいま、千春のことを好きだ。千春は私の味方。星くんの気持ちが私に向くまで、千春は星くんのことを、決定的に振ることはない。だれも、傷つくはずはない。

しかしもちろん、そんな風にはいかないのだった。

六 女のここはね、サイズじゃなくて広さと暖かさで勝負するもんなんだから

店長が出て行ったあと、なんだか、ものすごく疲れた気がして、ソファの上にへなへなと座り込んだ。

頭の中は真っ白だったけど、いつもの癖で携帯をいじる。学校の友人からいくつかメールの着信があったが、返事をする気力もない。そうこうしているうちに、コンビニの袋をもった千春が帰ってきた。

「せんばあい、どうでした？ 首尾は？」

「いや、あの、ははは」

パンツ見られただの、変なもの触ってしまっただの、そんなのあほらしくて言う気力もない。

千春は私のとなりに座ると、コンビニ袋の中からビスケットを出して、その包装を破る。

「だめだったんですか？ まあこれ食べてください」

「うん、ありがと。いただくわ」

ビスケットをつまんでかじった。協力者に対して経過の報告をしなければならぬ。都合の悪いところは多少端折^{はしよ}ってもいいよね。

「一応さ、今日の夜、携帯に電話かけて相談するってことになった」

「おお。大成功じゃないですか。ここからが腕の見せどころですよ」

「……そうね。これからよね……はあ」

私のため息に千春は不思議そうな表情をする。

ビスケットが、ほろ苦い。

「いやあ、今日は忙しかったねえ！」

大きな声を出してバックヤードに入ってきたのは石川さんだ。この店の要^{かなめ}、スーパーパートタイマー。手にはさっき店長が食べていたのと同じペペロンチーノの皿。ただし、量は二倍近くある。

「あ、石川さん、お疲れ様です」

「や、葉村さん、それに小島さんも。おつはよう!」

いつでも元気な人だ。年の頃は三〇と四〇の間くらい、正確には知らない。この前千春の親の年齢を聞いてだいぶショックを受けていたことがあったが、それよりは年上なのかもしれない。やさしい旦那さんと小学校低学年の息子がいるらしい。黒髪のショートカット、千春よりさらに小柄な体。いつでも店の中を忙しく動き回って仕事している、うちのムードメーカーでもある。

パスタの乗った皿をだん! とテーブルの上に置いてソファに座ると、

「いやあ、これから晩御飯の支度だよ! 今のうちになんか腹に入れておかなきゃ家事する力がわいてこないもんね」

そう言って割り箸をつかってパスタにかぶりつく。

石川さんがパスタに手をつけると同時に、店の制服を着た知らない人がバックヤードに入ってきた。その姿を見て、一瞬思考が止まった。なぜかって、その人が嘘のような美人だったからだ。

第一印象。顔、ちっちゃ!

第二印象。なにこのカッコいい人。

第三印象。その笑顔は反則! かわいらしすぎるでしょ!

完璧だ。パーフェクトだ。子どもの頃にこんな風になりたいって憧れていた大人の女性の理想像、そのままだ。

身長は私よりも少し高い、一六〇センチくらい。ウエストはきゅっとしまっていて、大きすぎない、でも決して小さすぎはしない胸の膨らみとのバランスはまさに完全無欠。っていうかさー、腰、その位置にあるわけ? どんだけ足が長いよ。

私よりも明るめに染めたロングヘア。大人っぽいカール。小さな顔にナチュラルメイク、そしてそして、

「お疲れ様です。今日からここでバイト始めました、藤沢そらと申します。よろしく願います」

にこっと人懐っこい笑顔、バックヤードの空気が変わる。場が締

まる、というのだろうか、まるで茶室に飾られた生け花のごとし。その美しさが私の心まで浄化するよう。においたつばかりの魅力、っていうのはこういうのを言うのね。

「はあ、……小島るるです。よろしくです」

「あら、るるさんってお名前なんですか？ ふふ、名前、かわいいですね。いいなあ」

だからその笑顔は駄目だって。体の力が抜けちゃうって。

「葉村千春ですう……」

ビスケットを口にくわえたまま名乗る千春も、あっけにとられた顔をしている。

「るるさんと千春さんですね。さつき夏雄^{なつお}さん、あ、いけない、店長がおっしゃってた美人高校生コンビってお二人のことですか。ほんとにかわいらしくて、うらやましいな」
につこり。

はあ、あなたがうらやましいなんて思う女性なんてこの世に存在するんですか？

もう嫉妬する気にもならないほどこれは負けてる。私がパンツ見せたり偽装工作おっぱいをおしつけるのなんて、この笑顔ひとつで全部ふつとばされるわよ。

「ほらほら、そらちゃん、ここ、座って！」

石川さんが自分の隣の席をばふばふたたく。

「それでは失礼しますね」

またあの笑顔で石川さんの隣に座った。

「そらちゃんね、あんたたちと同じくらいの時からここで働いていてさ、去年いろいろあつて一度やめちゃったんだけど、大学の卒論の目途がついたってんで、またバイトに来たのよ」

さつき店長が言っていた人だな。

「今四年生で、来年卒業なんです。一応、院に進む予定なんです。が、忙しくなる前にひと稼ぎしちゃうおうと思って」

「大学院に行くんですか？ すごいですね。専攻は、なんですか？」

なんか文学史っぽいけど。

「日本の文学史です。古代中心に」

やっぱりね。なんとなく、そんな雰囲気。

「あのお、藤沢さん？」

千春が話しかけると、

「そらって呼んでください。私の友達はみんなそらって呼ぶんですよ」

にっこり。うーん、かわいい、きれい。

「あ、じゃあそらさん」

千春が言いなおす。

「さつき、店長、あたしたちのこと美人高校生コンビって言うってほんとですかあ？」

それかい！ いや、私も少し気になってただけだね。

「ほんとですよ。うちには美人高校生コンビがいるから華やかだぜって」

店長の口真似もうまい。

うん、店長、見直した。フライパンで頭叩くのは勘弁してあげる。おたまにしておこう。

「ほんとに良かった、店長も石川さんも前とかわからないし、前よりも店の雰囲気もいいし。るるさんも千春さんもこれからよろしくお願いしますね」

私たちの名前を一度聞いただけで覚えてしまった。好感度高し。

石川さんがパスタを豪快にすすりながら言う。

「そらちゃんは高校生の時からここでバイトしてたからねえ。店長と同じくらいのキャリアあるんだよ。二人ともよく教えてもらいなっ」

ってことは、五、六年の経験はあるのか。

「あら、るるさん、その制服……亀ヶ崎高校よね？ 私と一緒にだ」
そらさんが嬉しそうにそう言った。

「あ、はい、そらさんも亀ヶ崎なんですか？ じゃあ、私たちの先

輩？ バイトも高校も先輩なんだ」

「そうみたいね。ふふ、頼りない先輩だけど、よろしくね。ところで、るさんの制服……ずいぶんスカートを短くしているよね。私勇氣なくてできなかったなあ。ふふふ、かわいい。うらやましいなあ、きれいな足してるもんね」

「そ、そんなことないですよ」

「そんなことあるよ。やつぱりいまどきの高校生はスカート短い方が好きなんだ？」

「あ、ま、まあ」

まさか星くんの気をひくためとは言えない。

「でもだめだよ、これから寒くなるんだし、暖かくしないと体に悪いよ」

そらさんはいたずらっぽく瞳で私を覗き込むようにして続ける。

「健康を犠牲にしてまでおしゃれしたい気持ちもわかるけど、女の寿命はね、八五歳までであるの。五年後も十年後もきれいなままでいたかったら、ちゃんと自分の体も大事にしないとだよ」

「そうそう！ 二十年後だって女は女なんだからね！ ストッキングぐくらはきなさいよっ」

石川さんも元気な声でそう言う。

「はい。もう少し、寒くなったら、考えます」

仕方なしにそう返事をした。石川さんは続けて、

「葉村さんもよっ。あんたもいつもいつもスカートを短く……」

そこまで言っ言葉を飲み込んだ。そりやそうだ、今日は『星くんを千春からるるへなびかせる作戦』（命名美雪ちゃん）の一環でわざと『なし』な服装をしている。

「葉村さん、服の趣味、変わった？」

石川さんでなくてもそう聞きたくなるところだろう。

「今日はあ、ちょっと気分を変えてみようかなと思って。こういうのもたまにはいいと思いませんかあ？」

「なしだわ」

石川さんはずばつと言いつ切る。さすがの気風の良さだ。かげ口とかが嫌いな性格らしく、言いたいことがあるときにはいつでも誰にでも面と向かつてはつきり言う。

「あんだねっ、女の子は健康も大事だけどおしゃれも大事なんだよっ。それはなし！ なしだ。その靴！ せめて靴くらいはきれいなものを履いてきなさい。ほらあ、そらちゃんも言っつてやって！」

「え、ああ、うん。千春さん？ ええと、そのトレーナー、……ちよつと食べ物シミかなにかついてるよ。あと毛玉もちよつと……さすがに、うーん、ほかに服もつてたらそつちにしたほうがいいかもしれない。あ、ごめんね、かわいいよ。かわいい。でもきれいな服きたら、もつとかわいくなるよ」

初対面の人にまでそんなこと言われるなんて。そらさんも結構直球な性格しているのね。ちらりと目をやると、千春は下を向いて体をふるふる震わせている。

「ちよつと、千春、何笑つてんの？」

「笑つてないですう！ ただ、ちよつと、なんですか、だれが！ だれのためにい」

あらら、泣いちゃってる。っていうか、私のために恥をかいてくれてるんだもんね。もつとがんばれ。

「あ、あ、ごめんなさい。そういうつもりじゃなかったんだよ、ごめんなさい」

そらさんが慌てて謝るが、

「じ、自分でもわかつていたんですけどお、るせんぱいに無理やり罰ゲームでこういう格好させられたんです」

おいおい、そう来るのか！

「んー？ 小島さん？ それほんとなのっ？ 後輩いじめて楽しいの？ いじめってどういうものか、私が教えてあげようか？」

石川さんが厳しい声を私に向ける。いやまずい、それはほんとにしゃれにならない。

「いや、ちが、ちがいますって。ほら千春、今のはうそだって言っ

て！」

「半分はほんとじゃないですかあ」

「は、半分もほんとじゃない！ それに、その服のチョイスはあなたの妹がしたんでしょ」

「でもせんぱいも賛成したあ。せんぱいはあたしを犠牲にして幸せになろうとしてるんだあ。せんぱいはほんととはあたしなんかどうでもいいんだ」

「ちがう、ちがうって、あんたを不幸にしたら私だって不幸よ！」

「ほんとにいい？」

「ほんとほんと」

「じゃあ、許しますう」

千春は私の手をとってぴたっとくっついてきた。もう笑顔になっている。目の端に涙をためたままの笑みがものすごくいじらしくてかわいらしい。よしよし、後輩よ、あとで何か甘いものおごってあげる。

そらさんはそんな私たちを見て啞然呆然、石川さんはさっきの剣幕はどこへやら、いつものことだと言わんばかりに平然と口元をティッシュで拭いている。

「さっ、あんたたち。仲直りしたならそろそろ仕事の時間だよっ！ はやく制服に着替えてきなさい。私はこのお皿洗ってくるわ」

石川さんは左手に皿を持って立ち上がる。私たちも着替えるためにそろって立ち上がった。そらさんも私たちに続く。

更衣室へ入る直前、石川さんが今度は私に向かって大声で言った。

「小島さんっ！ 女のここはね、」ばしっと自分の胸をたたく。「サイズじゃなくて広さと暖かさで勝負するもんなんだからねっ」ばれてた。さすがだ。

いいわよ、別に。世界中の人々にばれたとしても、星くん一人を騙せたらそれでいいの。私の心の広さと温かさをわかってもらうためには、まずは距離を近づけないといけないじゃないの。恋する乙女はなんだってやるのよ。

更衣室で、いつものように千春とじゃれあいながら着替える。

鏡を見ながら今日買ったばかりのブラの微調整。ほんとは一度洗濯してからじっくりと慣らしたかったんだけどね。

鏡ごしに私のバストを眺めながら千春が小声で私に囁く。

「せんぱあい、もう、あたし、ああいう服、着まさんからね」

「わかった、わかった、ごめんね、ほんととは泣くほど嫌だったんだね」

「……うん。せんぱい、そのブラ、いい感じ」

「ありがと」

隣で着替えているそらさんをちらりと見てみる。あ、こりゃ見ない方がいいわ、自信なくす。

「るるさん？」

「はい？」

突然、そらさんが声をかけてきた。

「るるさん、今、好きな人いるよね」

なんと、くすくすと魅惑的な笑い方をしてそんなことを言ってきたのだ。

今日初対面で、まだ大して話もしていないのにいきなりそんな核心にせまることをまたもや直球で言ってくるなんて、そらさんって、案外食えない人なのかもしれない。

「え、いや、そんなことないですよ」

「わかるよ、なんかきらきらしてるもん」

「ですよねえ！ るるせんぱい、なんかきらきらしてますよね！ ばればれですよねえ」

千春もそんな茶々をいれてきやがる。

そらさんはミニワンピースの上にカーディガンをはおりながら、
「高校生の恋かあ……。いいよね。楽しいよね。全身全霊で後悔ないよつに、」

そう言って私の肩をがしっとつかむ。長いまつげの奥の瞳がきら

りと光る。

「楽しむんだよ。命かけてでも」
その表情は真剣そのものだった。

がちやり、とバックヤードと厨房をつなぐドアが開く音がした。

そして店長の勢いのある声が響く。

「おい、小島あ、葉村あ。わりーが早めに入ってホール出てくれないか。団体のお客さん来ちゃってまわらねーわ」

この日、私たちは、とにかくよく食べる二十名ばかりの団体様を相手にてんでこまいになった。ちなみに私たちの神経を逆なですることに、その団体様、全員柔道着を持っている。中には『柔』と大きくロゴの入ったジャージを着ている人もちらほら。

もちろん、金髪ベリーショートの前髪な少女もその団体様の中にいた。

美雪ちゃん。それ、ただの野次馬って言うのよ。まさかほんとにおもしろがつてるだけじゃないでしょうね。

七 私が知っている中で一番いい男だよ

午後九時すぎ。

私たちはいつも通り、バックヤードのソファにぐたつと体を預けていた。

星くんは八時で仕事を終えて帰宅しているので、ここにいるのは私と千春だけだ。

「ねえ千春ー、あんたの妹ってさーどうなってるわけ？」

「めんぼく
面目ないですう」

「だいたい食べ過ぎよ、あの子。チキンカツ膳にうどんにチョコパフエにフルーツパフエって。よく太らないわね」

店長は喜んでいたけどね。あの集団だけで一日の売り上げに匹敵するほど食べたらしい。

「美雪って朝も晩も十キロずつ走っていてえ、食べている時と寝ている時以外はずっと柔道柔道だから、あたしたちと運動量が違うんですよ。腹筋なんかかちこちで六つに割れてるんですよ」

「それにしたって。あの食欲見るとあんたたちってほんとに姉妹なんだなあって納得するわよ。なんか性欲まんまんだし。エロ本とか貸し借りしてそう」

「ほんとにきわどいのはしてないですよ。してるのはレディコミとかふつうなエッチのやつだけ」

「げ、しているの？ 高校生がレディコミって」

「うう、この変態姉妹の言うとおりにやって大丈夫なんだろうか。」

「せんぱいだって弟さんと貸し借りくらいするでしょお」

「しないわよ！ 弟まだ小学生だし！」

「あたしだって美雪の下に小学生の妹いるじゃないですかあ。見られないように美雪の部屋でがっちり施錠してますけど、もう少ししたら教育の一環として貸してあげようかと」

「小学生に悪いこと教えちゃだめでしょうが。それより、さっき言

つてた『ほんとにきわどいの』っていうのはどういうのよ」

「あたしはどっちかっていうとぐちゃぐちゃに凌辱りやうじよくするようなのが好きでえ」

りようじよくって。するのが好きって。ぐちゃぐちゃって。ぐちゃぐちゃってどこがどのようにぐちゃぐちゃされるの？ このぼわつとしてかわいらしい後輩はいつもそんな妄想してるのか。怖い。

「美雪はぐちゃぐちゃに凌辱されるのが好きなんですう」

美雪ちゃんはある方か！ されたいのかあの男ぶりのいい筋肉女が。ぐちゃぐちゃに。きついなあ。あんまり想像したくない。

「まーそれじゃあ、趣味はあわないわよね。同じ異常性癖姉妹といつても違いがあるのか」

「でもでも、こないだ大発見したんですよお！」

「大発見？」

「百合ものなら一冊で二人の性癖力バーできるんです！ お小遣いの節約になるんです！」

「そつくるのか！」

っていうかそつちでもいいの、あんたら？ それもあんただけならともかく美雪ちゃんまでアリなの、それ？

こんなに聞きたくない話を聞くこともそうそうない。うわ、私の手が！ 鳥肌鳥肌！ 鳥の皮って嫌いなのに自分の皮膚がそうなるなんて悪夢。

「でもお、美雪っていつも本をしわくちゃにして返すしい、もっと丁寧に使ってほしい」

「使ってじゃなくて扱ってでしょ！ 本は使うじゃなくて扱ってっていうの！」

「えー使うもんでしょお、エロ本って」
聞きたくない聞きたくない。

「でもこないだ試しに初めてB Lの本を買ったんですけど案外これが」

「聞きたくない聞きたくない聞きたくない」

「こないだなんか読むのはお風呂入る前か入った後かでケンカになったんですよ。読んでからお風呂の中でっていうのも」

「聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたくない。ってか、あんたたちで風呂入れなくなるでしょ！ その話はやめ！」

千春の話を聞いてると本気で友人の縁を切るうかと思う瞬間がたまにある。この子、立派な大人になれるんだろうか。

千春から五十センチほど体を離して座りなおす。近寄れないようにテーブルの上にあったティッシュペーパーの箱を障害物として私と千春の間に置いた。

「ええ？ せんばあい、さすがにここじゃ無理……」

私の手刀が千春の喉に突き刺さった。言っておくが手加減なしの本気だ。千春は、げこ、と蛙のような声を発して悶絶した。ざまあみる。

「せんばあい、暴力はいけませんよお。もつと女子高校生らしくおしとやかに貞淑に」
おしとやかに貞淑に

「あんたが言うな」

いまの会話星くんに聞かせてあげたいわ。

「そうそう、美雪ちゃんと言えばあれ、なに？ 注文するたびわざわざ星くんを呼び出して」

「やっぱり興味、もつたんじゃないですかあ？ せんばいが好きな男ってどんなのか」

そうなのだ。美雪ちゃんは注文するだの皿を下げてほしいの、なにかと理由をつけては星くんを呼び出してはそのたびに何事か話していた。

なんか最後には随分仲良く笑い合っていたが……。店長に怒られるかと思っただが、店長が私たちに言った言葉は「あの団体、常連にしてーな」だった。

あーあ、美雪ちゃん、星くんと何話していたんだろ。いいなあ。星くんの笑顔って見るだけでほっとするなあ。でもときどきもする。安心ときめきの笑顔。

ぎゅうと抱き寄せられて間近に見たい。

それは、どんなに、幸せだろう。

星くんは力強く抱きしめられる私。首筋に顔をうずめちゃったりなんかして。星くんってどんな匂いがするんだろう。きつといい匂いだ。

「あ！ せんぱい！ いま考えていること顔に出てますよ」
まずいますい。私はあわてて表情を戻す。

「せんぱあい、今星先輩ってどんな味がするんだろうって思ってたよね」

ティッシュの箱で頭を殴ってやった。ポコン、と間抜けな音がした。

「味ってどこの味よ！ …… いや、言わなくていいわよ。言うな」
「あたしもせんぱいの味がみへみは」

最後まで言わずほったをぐにゆりとつねってやった。くそ、この顔か。こんな顔が星くんの好みなのか。ひきちぎってやりたいもーなんで、こいつなんかに星くんが！

「……で、せんぱい。いつまでこうしてるんですか」

つねった手を離してやると、千春がほったをさすりながらそう言った。

「なにが」

「なにがじゃなくて。ほら。携帯出して！」

そう、私はこれから、星くんは電話して、明日のデート（じゃないんだけどね、厳密には）の約束をとりつけなくてはいけないのだ。はやくはやく、と急かす千春に私は仕方なくポーチから携帯を取り出す。

手の中でそれを弄ぶ。

「ほら、はやくはやく」

「ちよつと待つてよ、私にも心の準備ってものがあるのよ」

一人で電話をかける勇気がなかったので、千春に頼んで隣にいてもらうことにしたのだ。

携帯のフリップをぱかと開け、星くんの番号を呼び出す。

さて、あとは通話ボタンを押すだけ。押すだけなんだけれど。

「せんぱい？」

「千春うゝ、やっぱ、私、だめかも。できない。緊張して」

「大丈夫ですって。気軽に言えればいいんですよ」

「でもさゝ今お風呂入ってるかもしれないし、トイレかもしれないし、勉強の最中だったら悪いし、家族の人と喧嘩したりしてたまたま今機嫌が悪かったりするかもしれない」

「あー！ もう！ いらいらする！」

「あ、駄目、ばか！」

千春が手をのばし、私の携帯を奪い取った。取り返そうとする私の動きよりも早く、通話ボタンを押してしまう。

「はい！ かけました！ がんばって！」

そう言って私の手に携帯を押しつける。

いやいやいや、ちょっと待って、駄目、切っちゃおうか、でも向こうに着信残るわけだし意味ない、こ、この際間違ひ電話のフリして、って今夜電話するって言ったじゃん私。

仕方がない。緊張してうまく動かなくなった手で携帯を耳にあてる。

呼び出し音が鳴っている。

やばい、やばい、息が、息が、息が苦しい。呼吸がはやくなる。

し、心臓が、心臓もなんでこんなに痛くなるんだ。静まれ、我が不随意筋。千春、私の顔を見ないで。きつと歪ゆがんでる。なにこれ、ちよつと電話で明日一緒に遊ぼうと言っただけなのにこんなにガチガチになるなんて、私こんなに乙女ちゃんだったのか。千春、なによその満足気な笑みは。

呼び出し音がふつと途切れ、そして、

——はい。

星くんの声が聞こえた。

「あ、あのほしゅ、ほしゅきゅ、星きゅん、星くん？」

三回噛んだ。ベタすぎるだろ私。

「ほ、星きゅんって、きゅんって、きゅん！」

千春が悶絶もんぜつしている。顔を紅潮させ、テーブルの端を震えるほど強く握り、涙どころかよだれまで垂らして爆笑するのを我慢している。星くんに千春の声が聞こえるのはまずいので、声を出して笑えないのだ。それはともかくよだれは汚いって。くそ。

「ご、ごめん、星くん、いま電話大丈夫？」

「大丈夫。ちようどどうでもいいテレビ見てたところ」

「良かった。私も今家。で、今日話したことなんだけど」

「……あ、ん、うん。……葉村のこと？」

「そう。千春にももう言ってあるんだけど、とりあえずね、付き合うのはまだちょっとあれだけど、私が一緒ならどこかに遊びに行くくらいいいって。で、明日学校終わった後ひま？ 星くんもバイトないよね。カラオケにでも行かない？ 三人で」

「うん、明日は特に予定ないけど。でも、ひとつ、念押しで聞いていいか？」

「なに？」

「葉村はほんと全然その気がないのに、小島が無理に付き合わせてるってことは、ないよな」

「ないよ。いい？ 千春はまんざらでもないの。迷ってる、というところまではいらないかもしれないけど、でも押せば全然、いけるよ。千春と一番仲がいい私がこう言うんだから、間違いない。世界で一番私が千春のことよく知っているんだから」

エロ本の趣味までは今日まで知らなかったけど。それは抜きにしても家族を除けば私以上に千春のことについて詳しい人間はいないだろう、星くんもそれを知っているはず。だからこそ、私のこの言葉信じるはずなのだ。

「わかった。ありがとう。恩に着るよ。どうして、おれのためにこんなことしてくれるんだ？」

「だって、私千春のことが好きだもん。千春にはいい男と付き合っ

てほしいと思う。私中学から星くんのこと知っているけど、星くんは、とてもやさしくて強い人だし、人が困っている時には自然と体が動いて助けに行ける人じゃない」

そうなのだ。中学時代、いじめられていた私を助けてくれたのも、いよいよ家庭に居場所がなくなつて壊れかけていた私に手を差し伸べてくれたのも、この世で千春と星くんだけだった。

深夜の繁華街、真つ暗な駐車場。

つらいはずの記憶は、千春と星くんのおかげで今は暖かい思い出となつている。

「私が知っている中で一番いい男だよ、星くんは。だから親友の千春が付き合うなら星くんと付き合つてほしい」

私が星くんを恋愛するに足る男として評価している、ということ言外に伝えたかつただけど（ほんととはそれどころじゃない、大々好きなんです……）、少し直接的すぎたかな。でも、伝わったはず。

「……ありがとう。小島に認めてもらえて嬉しいよ。ありがとうな。小島は、気持ちがやさしくていい女子だな」

そう！　そういうのを待ってたのよ。星くん、もっともつと私のいいところを見つけてください。

「そんなことないよ。じゃあ、あした、五時くらいに駅前のコーヒ―ショップで待ち合わせでいい？」

「おう、了解だ。恩に着るよ。葉村のことがうまくいってもいかなくても、いつか小島に好きなやつができれば、今度はおれが全力で応援する」

「うん、ありがとう」

ほんとにほんとにほんとね？　頼むわよ。

「じゃあ、明日五時だな。遅れずに行くよ」

「うん、じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

電話を切った。

肩から力が抜けた。うまくいった。明日は千春がうまくやってくれば二人でデートだ。

千春の顔を見る。

本当に、この子にも感謝しないと。自分が振った男のことを親友が好きとはいえ、ここまで協力してくれるなんて。おもしろ半分だったらここまでは協力してくれないよね。私の恋を、本気で応援してくれているんだ。

ありがとう、千春。一生、友達でいよう。

一生、ずっと、ずっと一緒にいよう。

そんな気持ちをこめて、千春に笑いかけた。

「うまくいったよ」

千春は——私の親友は、私の瞳をしっかりと見つめかえして、まるで聖母さまのような微笑をたたえて、

そして、

私に向かって叫んだ。

「ほっしきゅ~~~~ん！ きゅんきゅん！！」

がきょん。

私の左ハイキックが千春の顎を打ち抜く音がバックヤードに響いた。

八 犯罪じゃん！　こんなの！

駅前のコーヒーショップ。このあたりでは有名な恋人たちの待ち合わせ場所。

女子の間では、ここで好きな人と一緒にエスプレッソを飲むと幸せになれる、という噂がまことしやかにささやかれている場所だ。店の前で落ち合った私と星くんは、カウンターで飲み物を注文する。

もちろん私は、

「エスプレッソのS、お願いします」

「ありがとうございます、エスプレッソのSがおひとつですね。二五〇円でございます」

「んじゃあ、おれはオレンジジュースのL」

……………いや、いいんだけどさ。別に期待はしてなかったし。でもしってかなりの量だよ。

私たちは壁際の席に陣取る。私が壁際、その向かいに星くん。

「で、葉村は少し遅れるって？」

「うん、今日掃除当番になったけど、運の悪いことに金魚の水槽洗いの日らしくてさ。まあそんなに遅れては来ないと思うよ」

「金魚か。そんなの放っておけばいいのに」

ぶつぶつ星くんが文句を言う。もちろん掃除当番なんて嘘だ。私と星くんが二人で過ごす時間を作るために、千春には一時間ほど教室で時間をつぶしてもらっている。報酬として漫画雑誌を一冊買っただけ。エロくないやつね。

騙し打ちみたいなものだけど、これもひとつのデートみたいなもの。二人きりで喫茶店。ここでぐつと距離を縮めて、仲良くならなきゃ！

両手を組んでその上に顎をのせ（このポーズは昨日、鏡の前で練習した）、星くんの顔をじーっと見つめる。

うん、いいよね、こういうの、いいよね。ずっと懂れてたんだ。
ところがその星くんはちらちらと店の出入り口ばかりを気にして
私のことは全然目に入っていない様子。ま、負けるか。

「ねえ、星くん、今日、何か面白いこと学校であつた？」

「……………」

「聞いてちやいねえ。」

「ねえねえ聞いてよ、今日ね、数学の佐藤先生がさ、奥さんと喧嘩
したらしくて、ほっぺたに引っかき傷あつたの気付いた？」

「へー」

ほんとに聞いてちやいねえ。視線はずっと店の出入り口。そんなに
凝視したつて私が合図のメール送らない限り千春は来ないんだから、
無駄だつてば！

「そういえば生徒会長がさ、ついに副会長と別れたんだつて。今ま
であんなにラブラブだったのにびっくりだね！」

「ふーん」

……………。星くん、そんなに私と会話するの、嫌？ 泣いちゃう
ぞ。

「ねえ星くん、千春のバストつて何カップか知ってる？」

「ふーん」

反応なしか。うんうん、星くんはそんな下賤げせんな話題なんかに興味
ないわよね。

「国語の池田先生、そろそろ結婚するんじゃないかって噂だよ。相
手は西高の先生なんだつて！」

「へー。そうなのか」

「で、私、その西高の先生つて一度見たことあるんだけど、」

「で、どのくらい？」

「へ？ なにが」

「いや、葉村の。サイズ」

星くんは視線は店の出入り口に視線を固定させたまま、そんなこ
とを聞いて来る。少し頬を赤く染めている。かわいらしい横顔だが、

今そう思ったら私の負けだ。惨敗だ。

「小島、知ってるんだろ？ 葉村ってどのくらいだ？ いやおれ力ツプで言われてもよくわからないから、牛丼のどんぶり为例えてみてくれ。並？ 大盛り？ まさか特盛りとか？」

「そっちのがわかんないって！ とうかやつぱり食いつくのか！ 私牛丼なんて数えるくらいしか食べたことないし！ そもそも並のどんぶりだつてでかいよ、でかすぎるよ十分！ 私なんか、私なんか、おしんこの皿くらいしか、ってこのすけべ男が。くっそお。」

「星くんって思ったよりエッチなんだね。教えてあげない」

星くんはやつと私の方を向いて、照れ隠しに笑いながら言う。

「いや、冗談だぞ。そんなの、どうでもいい。おれは女子の胸の大きさなんか気にしていないからな」

と、星くんはちらつと私の胸のあたりを見て言った。ばればれだ！

せつかくこういう話題になったんだし、ここはひとつ、はつきり聞いておかなきゃいけないことがある。でもストレートに聞いたら答えてくれないかもしれない。私は誘導尋問をしかけた。

「ねえ、やつぱり女の子は胸が大きいほうがいいわけじゃん。千春ももう少し大きければもつとかわいいのにねえ。星くんもそう思うでしょ？」

考えられる回答は三つ。

一、そうだな、もっと大きい方が好みだな。

二、もう少し小さい方が本当は好みんだけどな。

三、どっちでもいいよ、そんなの。

二か三だ。二か三！ 二か三！

「うーん、まあどうでもいい、ってわけじゃないけど。そんなに大きさは気にしないな」

さっすが星くん。

「おれはさ、本当はどちらかというと、あんまり大きいのは苦手なんだ」

希望の光が、希望の光が見えてきました、神様。

「FとかGとかあんまり大きい人はちよつと。葉村くらい小さめがいいかもな。はっは」

神様！ 大きいの基準が違ってました！ Dは、Dは小さめだそうですね。

星くん。私はあなたのことが好きだけど、いますごくあなたを殺したいです。刺していいですか？

私の殺意を含んだ目つきに気づいたのか、星くんは笑うのをやめ、また一瞬私の胸に視線を注いで（できれば私の瞳をじっと見つめてくださいませんか？）、あつ、と声をあげ、慌ててフォローする。あつ、てなによ、あつ、つて。

「いや、でもさ、男にもいろいろ好みはあるわけさ。ほら、おれのクラスの田村なんか、小さければ小さいほどいいって」

田村なんかどうでもいいっつーの！ あんたがどうかっていうのが問題だっつーの！ そもそも、あいつ、彼女いるじゃん、巨乳の！

神様、ソドムとゴモラを滅ぼした天の火を世界の男すべてに落として消滅させてください。

「はっは、それにしても葉村、遅いなあ」

「……そうね」

なんか目の端が熱くなってきた。『身体だけ求められているようで……』っていう人の気持ちが少しだけわかったような。それとも私なんか、身体すら求められるだけの価値がないのかな。死んじやおうかな。弟よ、姉は先に逝くけどお前だけは心で女性を選ぶ男に育ってくれ。

なんだかお互いに気まづくなって、黙りこんでしまった。

違う、違う。こんな気持ちになるためにわざわざ策を弄して二人きりの時間を作ったんじゃない。

「ん、ちよつとトイレにいつてくる」

そう言つて星くんが立ち上がる。

よし、このインターバルで気持ちを立て直して、ちゃんと星くんと仲良くなるんだぞ私。星くんはほんとにちゃんと人の心がわかる人だって、知ってるはずじゃないの。私がいまここでこうやって馬鹿やってられるのも、高校ではそこそこ楽しくやっていけるのも、あの時星くんがこの腕をつかんでくれたからだ。

変なこと考えないで、普通の会話をして、普通に仲良くなって、そしていつか普通から特別な存在になりたい。

きちんと、前を向いて、って、……え？

私の席からはカウンターが見える。

そこでコーヒークップを受け取っている女性の後ろ姿に見覚えがあった。

見覚えどころではない。

どこその有名デザイナーがデザインしたという格好いいブレザーの制服姿、手にはスポーツバッグとおしゃれなどどこかのお店の紙袋、膝下まであるスカートから伸びる足はふくらはぎの筋肉までくつきり、それどころかブレザー越しでも鍛えられた広背筋が想像できるほど、細いけどがっちりした体格、そして、金髪ベリーショート。

美雪ちゃん、なぜ、ここに？

まさか、私をからかいにここまで来たとか？ 今の時間なら部活しているんじゃないの？

テイクアウト用のカップを持って振り向いた美雪ちゃんと目が合う。

よお、といった感じでカップを持った手を上げて私に合図を送る美雪ちゃん。そしてこちらに、歩いてくる。

いや、来なくていいから！ 来ないで！

「るじゃないか。こんなところで会うなんて珍しいな。二人か？もしかしたら千春と一緒になのか？」

私はぶんぶんと顔を横に振る。どうやら、今日が美雪ちゃんも加わって作成した作戦の決行日だとは知らされていないらしい。

「美雪ちゃん、部活は？」

「今日はケガしちゃってな。足の小指を脱臼したんだ。すごいで、小指が90度に曲がってなかなか壮観だった。さすがの私も少しばかり焦ったぜ」

「だ、大丈夫なの、それ？」

「ああ、特に痛みもなかったから着替えて整骨院に行っただが、この程度は大したことなかったらしい。関節入れ直してはい終わりさ。一応念のため今日はこのまま帰宅して休むことになったんだが、いやだなあ。女の子が足の小指をそんな風にしちゃうスポーツか。どうも美雪ちゃんは私と違う世界に生きてるらしい。」

美雪ちゃんは空席となっている星くんの隣の席に座る。相変わらずきりりとした眉毛と鋭い目がかっこよすぎる。でも、ぐちょぐちょにされるのがお好みなのよね。うわ、想像しちゃった。

「美雪ちゃんもスカート履くんだね……」

「当り前だろう、うちの学校は制服には厳しいんだ。入学当初、ジャージで校内をうろついてたら先生におこられた」

「……こうして見ると、スカートでも男前よね。不思議だわ。美雪ちゃんってさあ、バレンタインにはチョコもらう方だよね」

「困ったものだ。毎年二月になると憂鬱だよ。重くて一度に持ち帰れないからな。いつも部室に持って行って部員に食べてもらっていたものだ。中には私を好きにしてくださいなどと抱きついてくる馬鹿な後輩もいてな。相手にしなかったが」

でも『りようじょく』されたいのよね。だから相手にしなかったのよね。好きにされたい方だもんね。その後輩も『私の好きにさせてください』って言えば落とせたかもしれないのに。

おっと、忘れてた、大事なこと。

「美雪ちゃん、いまね、私星くんと二人なの。だから、悪いけど……」

「……あ、そうなのか。ってことはうまくやったんだな」

美雪ちゃんはそう言うてにやりと笑うと、

「では邪魔者は退散するか」

そう言って立ち上がる。

タイミングが悪いことに、ちょうどそこで星くんがトイレから戻ってきた。あーあ、せっかくのふたりきりの時間が。かなり微妙な雰囲気だったけど。

「あれ、昨日の……葉村の、妹さん？」

「あ、ああこんにちは。改めましてご挨拶いたします。葉村千春の妹の、長南高校一年、葉村美雪と申します。昨日は失礼いたしました」

ぴしつと背筋をのばして星くんに挨拶する。美雪ちゃん、軍隊みたい。かけー。

「小島とも知り合いなんだよな」

「はい。るる先輩とは以前より親しくさせていただいております」
私のこと今まで先輩なんて呼んだことないくせに。

「では、私はこれで……」

「いやいやここで一緒にお茶していこうぜ」

美雪ちゃんが帰ろうとするのを星くんが引きとめる。

「いいから、いいから。もう少ししたら葉村も来るしさ。そうだ、これからカラオケに行くんだけど美雪さんも一緒にどう？」

「ちよつと、星くん！ それは……」

私が止めようとすると、星くんは身を乗り出して私に耳打ちする。
「ほら、将を射んと欲すれば、だ。妹さんと仲良くなっておいて損はないだろう？」

星くんの小声が耳元でこしょこしょと……。あん。

美雪ちゃんは状況を把握したのか、困ったような顔をして紙袋を持ちあげ、

「私はこれから家に帰って読書しようと思っていたので……。今日はこれで失礼させていただきたいのですが」

「ってことはヒマってことだろう？ いいからいいから、座って座って。ほら、座れ」

「はい……」

美雪ちゃんは年上の言うことには逆らえないようになっていた。素直に星くんの隣に座る。ちょっと、その二人、近い近い。袖が触れ合っているって！

「美雪さん、その髪の色、かっこいいな。自分で染めたのかい？」

「月に一度、美容院で染めてもらってます」

「葉村とは仲がいいの」

「年の近い姉妹だとそんなにべったりというわけではないです。ケンカばかりですよ」

あーつまらない。なんか二人で話し始めた。私が口を挟む隙もないほどに、テレビの話やら、趣味の話やら。ぶすつとして好きでもないエスプレッソをすすっている私を無視するかの如く盛り上がり始めた。

「そうですか！ 星先輩も格闘技好きなんですか！ 私も格闘技なら見るのもやるのも好きで……」

「じゃあこないだのキックボクシングの試合見た？」

「見ました見ました！ あれは凄かったですね！」

私にはわからない話題になってるし。星くんの顔を見る。とても楽しそう。美雪ちゃんも話の合う相手で会話に夢中のようにだ。私の存在を忘れ去ったな、この二人。

私って可哀そう。ひとりぼっちだ。もういいや、千春を呼び出そう。

グループでだつてとりあえず星くんと遊べればいいや。

私は『ダッシュで今すぐ来い！ お前の妹が邪魔してる！』と千春にメールすると、手持無沙汰になって美雪ちゃんが持っていた紙袋に手をのばす。

中には書店のブックカバーがされた本が一冊。何気なくパラパラとめくる。

「ひiiiiiiiiiii！」

思わず声を上げてしまった。

「あれ、小島。どうした？ ……髪が逆立ってるぞ」

「い、いや、なんでも。あははは」

美雪ちゃんの顔を睨む。

「なんだ、るる。人の本を勝手に読んで」

「犯罪者」

「なにを言っただ。この作家は前衛的でマニアには有名な……」

「犯罪じゃん！　こんなの！」

ぐつつちよぐちよ。そして生け花。それ以上はどんなだったかは言わない。言えない。

「お、小島、おれにも見せてくれ。どんな内容なんだ？」

「駄目！　星くんは見ちゃだめ！」

目が汚れる。こんなプレイを星くんに覚えさせるわけにはいかない。私はその本を紙袋の中に戻すと美雪ちゃんにおしつけた。

「ちゃんと持っててよ！」

「るる、読みたいなら私が使った後貸そうか？」

「だから使うつて言っくな！　ちゃんとしまっておいてよ、それ。汚い」

美雪ちゃんはぶつくさ言いながら紙袋ごとスポーツバッグの中へそれを入れる。

星くんが不思議そうな顔で聞く。

「美雪さんは小島のこと名前で呼び捨てにするんだな。葉村は『せんぱあい』とか言っのに」

美雪ちゃんも首をひねる。

「そっついえば、昔は千春もるること『るるちゃん』って呼んでいたな。中学生くらいからか。せんぱいって呼び始めたの」

「千春は私の偉大さに気づいて敬意を見せているのよ。美雪ちゃんも私のこと先輩って呼びなさい」

「るるはるるじゃないか、今更るるを先輩だなんて、こそばゆい。

冗談言っくな」

「はっは、小島と美雪さんも仲がいいんだな」

楽しげに星くんが笑った。

「小島にはいい友達がたくさんいていいな。うん。今は、安心して、見ていられる」

星くんのその言葉は、つまり、私のことを安心して見ていられなかった時期があった、という意味だった。まあ、あのころの私はね、ちよつとやさぐれていたから。

でも今はこうして星くんや、頭のからっばな姉妹とばかなことして遊べてるからね。

星くんがみゆきちゃんも一緒にカラオケ行きたいというなら仕方がない。仲間にいれてあげよう。そのかわり、きつちリトスあげるのよ！

ふふふ、カラオケかあ。どさくさまぎれに腕組んでデュエットしたりして星くんとスキンシップできたりして……。くふふふ。

さあ、変態姉妹たち、ちゃんと私をフォローして盛り上げてね！

九 ほんととは私のこと、馬鹿にしておもしろがってるだけなんですよ

千春の部屋のベッドの上で、私はあぐらをかいて座っている。まだ制服のままだ。

私はフローリングの上に無造作に置かれたクッションをびしっと指さして言った。

「座りなさい」

千春と美雪ちゃんはそのそとその上に座る。

「ちゃんと正座！」

二人は不満そうな顔をして私に抗議してくる。

「るるは厳しいなあ」

「そうですね、正座なんて……」

そんな抗議なんて聞いていられない。正座させられるときはさせられるだけの理由というものがあるのだ。私は怒鳴った。

「いいから早くしなさい！ 文句は許さないわよ！」

二人がきちんと正座になったのを確認して私は声高らかに開会を宣言した。

「これから反省会を行います！」

結局、あれから私たちは四人でカラオケに行くことになり——予定していた計画、途中で千春が帰って二人きりでラブラブ作戦も実行されることがなく、それどころか二人して、二人して——。

「まず千春！ あんた、なんで星くんに抱きついた！？」

「そんな、人聞きの悪いこと言わないで下さいよお」

「抱きついていたじゃない！」

「ちよつと腕をからめただけですよお」

なにがちよつとだ。ちよつとどころではない。

「星くんの腕にからまったまま、一曲歌いきったでしょ！」

「だってあれはあ、星先輩がたまたまあたしの好きな歌を歌ってい

だから、これは一緒に歌わなきゃと思って……」

「べ、別に腕を組まなくなたっていいでしょ！ それに、一応、一応、今は、今のところは、星くんはあんたに惚れているんだから、そんなことしてほんとに勘違いされたらどうするの？」

あまりの激怒に口がうまくまわらない。

「ごめんなさい、ついついそのこと、すっかり忘れていましたあ」

「つい、なんてこと、ないでしょ！」

「そうだぞ、千春、あれは少し思慮分別しりよぶんべつが足りない行動だったぞ」

「あんたが言うな！」

口を挟んだ美雪ちゃんに私はいつそう大きな声を出して怒鳴る。

「美雪ちゃん！ あんたのほうが酷かった！」

私の瞳はいま、憤怒ふんぬに紅く染まっていることだろう。美雪ちゃん
はうつ、と呻うめいてたじろいだ。

「美雪ちゃん、あんたも星くんにからまっていたでしょうが！」

「そんな、一瞬だけのことではないか」

「そ、その一瞬で、なんであんた、星くんにキスした！？」

「い、いや、そんなキスなんて大それたものじゃなくてな、ほっぺ
たにちよつとちゅってただけだろう」

「だ、だからなんでそんなことした？」

「いやあ、私も最近部活や道場で柔道漬けの毎日で、カラオケに行
くのが久々だったから、ついテンションがあがってしまったてな」

「あんたはテンションがあがるとキスするのか？ こともある
うに、ほ、星くんに！」

「そ、そんな怖い顔するなよ。るる、いまお前、道場の先生よりも
おっかない顔しているぞ。……まさか獣人ファイヤータイガーのテ
ーマソングを歌詞を見ずに歌いきれるとは……これはプロレス好き
としてはキスせざるをえま」

「んなわけあるかあ！」

私は自分の学生鞆をまったくの手加減なしに本気で美雪ちゃんに
投げつけた。縦回転してでっかい手裏剣のように飛んでいくそれを

美雪ちゃんは真剣白刃取りするように事もなげに受け止めた。まあ美雪ちゃんなら受け止めると思ったから投げたのだから。

「この……性欲増大変態姉妹……ふたりで、私の邪魔ばっかして……」

私は星くんのことが大好きだ。目を合わせるのもつらいほど。恥ずかしいことに。意識し始めてから話しかけることすらどきどきしてうまく口が回らないし、携帯だって昨日かけたのが初めてだったし、こんなに苦しいのなら人を好きにならなければ良かったと思うほどにつらかったのに、この姉妹は二人して平気な顔して抱きつくわ、ちゅーするわ、どう考えても、……どう、考えても、

「あんたたちさあ、ほんととはさあ」

私の声はかすれて涙声。情けない。

「ほんととは私のこと、馬鹿にしておもしろがつてるだけなんですよ。私のこと応援するつもりなんかなくて、今日だって美雪ちゃんわざと邪魔しに来たんでしょ？ 二人して私の間抜けな姿見て、笑っているんでしょ？」

涙が溢れてとまらない。人間というのはこんなにも涙が出てくるものなんだとびくりするくらいぼろぼろと涙が頬をつたい落ちる。ベッドの上の毛布をくしゃくしゃにして顔におしつけた。こんなみじめな顔、見せたくない。

これ以上感情が爆発しないよう、毛布を力の限り抱きしめて、激情が過ぎ去るのをじっと待った。深呼吸だ。深呼吸。

しばらくそのままの体勢でいると、私の両隣に二人が座る気配がした。

顔をあげると千春と美雪ちゃんが私をはさみこむようにして座り、千春は私の髪の毛を、美雪ちゃんは背中を撫でてくれていた。

「せんぱあい、ごめんなさい……ちよつと調子に乗りすぎましたあ」「ごめんな、るる。そんなにまで好きだとは知らなかったんだ。ごめんな」

手のひらから二人の体温が私に伝わる。

「あ、あのね、」

しゃくりあげているせいでうまく声がでないけど、ちゃんと言おう。

「私、星くんのことが好きなの」

「うん、そうだな、わかつている」

美雪ちゃんの手が妙に安心感を与えてくれる。

「でもね、私ひとりじゃ、できない。できないよ。助けて。ちゃんと協力、してください。お願いします。お願いだよ」

「わかった。ちゃんと本気で協力するぞ」

「そうですよお、せんぱい。あたしたちがついているから、だいじようぶ」

ふたりは私の肩に手をまわし、残った手で私の手を握ってくれた。その力強さと温かさが私に勇気をくれる。

私には味方がいる。この子たちしか、味方はいない。この子たちが、味方でいてくれる。私は幸せなんだ、きっと。がんばろう。

部屋のドアがノックされた。ほんの少しだけドアがあき、千春のお母さんが声をかける。

「るるちゃん？ いまるるちゃんの家から電話あったけど、今日は、どうする？」

嗚咽をなるべく抑えて、普段通りの声で答えた。

「今日も、泊めてください。お願いします」

千春のお母さんは笑いを含んだ声で私に優しくこう言った。

「お願いしなくなつて泊つて行っていいわよ。そっちの方が私も嬉しいんだから。ふふ、青春、がんばれ！」

深夜。私は千春と一緒にベッドの上。

普段は床にお布団を敷いて寝るのだけど、私が泣いてしまった日はいつもこうして一緒に寝るのが半ば習慣化している。

千春は静かな寝息をたてている。ベッドの上は狭いけど、こつち

の方があたたかくていい。結局のところ、私は人肌ひとだが恋しい人間なんだろう。いつもピンチの時は千春の体温に助けてもらっている気がする。

私はそっと目を閉じる。

千春の寝息に合わせて私もゆっくり呼吸する。

こうしているといつもすぐに寝ついてしまうのだった。そうして私は夢の中へ。楽しい夢が見られますように。

十 いい女だっという自信、あります？

次の日の火曜日。

今日はバイトの日だ。

いつもどおり、私と千春は二人で連れだつてバイト先であるファミリーストランに歩いて向かつていた。千春とおしゃべりしながら店を目指す。気持ちのいい秋晴れだ。空気もおいしい。まだ日が暮れるまでには時間がある、それまでにこの気持ち良さを堪能^{たんのう}しよう。

「せんばあい、最近うちに泊まりすぎじゃないですか？ あたしは別に楽しいからいいし、お母さんなんかも喜んじゃっているからいいんですけど。せんばいの親とかは大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ、あの家は弟さえ家にいればいいんだから。……あんなちつて、自分の家より居心地いいんだよね」

言いたくないが、私の家庭はぼろぼろなのであまり帰りたくないというのもある。どうせ下着の替えとかはある程度千春の家に置いてあるし。今度からパジャマも持っていこうかな。美雪ちゃんからいつも借りているあのアニメキャラ尽くしのパジャマはかわいいんだけど、ちよつとね。

「そのうち食費入れてもらいますよお」

「心配しなくてもあんたの嫁になつて家に居つくわよ」

「え、まじですか？ やつたあ！」

いつもどおり千春が私に抱きつく。うんうん、かわいい子だ。いや待てよ。

「どっちかっていうと私が旦那であんたが嫁じゃない？ 私、婿入りするわ」

「ええ、だってあたしが攻めじゃないですかあ」

「攻めとか受けとか言うな」

「心配しなくてもやさしくしますから」

「ぐちゃぐちゃにするんですよ。私にはそういう趣味はないわよ」
「最初は痛くても慣れればそのうち気持ちよくなりますよお」

つつこみのかわりにどん、と肩で体当たりしてやった。っていうか、痛いのか。痛いのはやだぞ。この変質者め。

そんなあほなことをいちやつきながら話していると、ファミレスが見えてきた。

お店は広い国道に面していて、そんなに大きくなく、淡い黄色を基調とした可愛らしい外見。『JUST』という看板が目をひく。駐車場は結構広い。全国津々浦々にあるチェーン店とは違ってこの市内に三軒あるだけのちっぽけな店だが、その分地元に着したサービスが定評となっていて、味の方もそこそこの評判だ。冷凍食材が多いけれどね。オーナーは昔、このあたりでは有名な悪がきだったらしくて（今のおっさん姿からは想像もつかないが）、たまにお客さんからオーナーの若かりし頃の武勇伝を聞かされたりする。

私達は駐車場を横切って建物の裏にある従業員入口へと向かった。従業員入口の前、そこに人影が見えた。

星くんだ。星くんも学校帰りらしく、学生服。昨日一緒にカラオケではしゃいだばかりなのに、姿をみただけで足元から全身にびりびりと震えが走る。武者震いって言葉があるけど、恋愛震いって言葉もあっていいと思う。

「あれ？ あのバイク……？」

星くんの傍らにはでっかいオートバイが。エメラルドグリーンの光沢のある車体、いかにもスピードが出そうだ。あの大きさだと私なんかまたがっても足も届きそうにない。

「星先輩、おはようございます」

千春が屈託のない明るい笑顔で挨拶する。さすが昨日星くんに抱きついた女。今度やったら拷問にかけてやるからな。

「星くん、おはよう」

私もそれに続くが、やっぱり緊張してしまつて、顎がガクガクする。恋つて、つらい。

「おお、おはよう。昨日は楽しかったな」

星くんも軽く片手を上げて挨拶。やっぱりシャツが学ランの裾から出ている。かわいい。まあ今回は無理やり入れてあげるのはよしとおこう。また星くんの股間のナニカに手を触れたりしたら今度こそ失神しそうだわ。それはともかく、この間の私のあの行動はどこからどう見ても変態女というか痴女というか……消し去りたい過去だ。星くんの頭もフライパンで殴りたい。自分の頭もついでに中華鍋で殴れば記憶がなくなってくれるだろうか。

まぶしすぎる星くんの笑顔に見とれながらそんなことをぐだぐだと考えていると、千春はなんの迷いもなく星くんの袖をつかんで「（えっ？）、感嘆の声をあげた。

「このバイク、すっごーい！ でかい！ なんか怖いくらい！ まさか、これ、星先輩のですか？ ついに買っちゃったんですか？」

星くんに見えないように千春のスネのあたりをがしつと蹴つてやった。千春は反射的に星くんの袖から手を離す。っていうかさー、どう考えてもそんなことしたら勘違いするに決まってるじゃんよー、なんでそういうことするかなー、昨日の約束はどうなった。こういうパーソナルスペースが狭い女の方がモテるということか。私も真似してやってやろうか。でも私がやると痴女になってしまう……。こういう行動できるのも才能ってやつなんだろうか。少しわけてほしい。

星くんは目をきらきらさせて答える。

「いや、おれはまだ免許もないからな。これ、日曜日に入ったバイクの人のバイクなんだ。さっき少し話聞いたけど。いいよなあ、これ。まさに日本の技術の結晶だよ。しかもジムカーナの大会で入賞したこともあるらしいよ、女の人でこれだけのバイクを自由にとりまわせるなんて憧れるなあ」

ジムカーナってなんだかわからないけど、星くんのはしゃぎっぷりからするとすごいことなんだろう？ でもこれ、女性が乗るには大きすぎないかなあ。それにしても、日曜日にうちに入ったバイ

トの人で、女の人ってことは……。

「あれ？　るるさんと千春さんじゃない。おはよう。随分早くきてるんだね」

そらさんが従業員出入り口のドアから顔を出した。

「おはようございます。私たち、いつも早めに来ているので……。

あの、そらさん、このバイク、そらさんのですか？」

私がそう聞くと、そらさんはドアから全身を出した。レザーでできたバイク用のツナギ。この間の綺麗でかわいらしいミニワンピ姿とは違ってまさにかっこいい、の一言。ぴったりフィットしていて体のラインがくつきり出ているが、背中から腰にかけてのしなやかな曲線はまさに、女豹。猫科だ。女の私でもぞわつとくるほどの色っぽさ。黒のレザーが放つ光沢がその艶めかしさをさらに増幅させている。なにこれ、どこの映画から飛び出てきたの、この人。

「ふふ、知り合いから買った中古だけだね、いいでしょ。私、大学じゃバイク同好会に入ってるんだよ。今日はその帰りだったから乗ってきたんだ」

「すげーなー、いいなー、おれもほしいなあ。はやく買いてえ」

昨日のカラオケでは見せなかった程の興奮もあらわに、星くんはバイクの周りをぐるぐる周っている。星くんが惚れているはずの千春の姿すら目に入っていないみたいだ。ほんとにバイクが好きなんだなあ。星くん、目が輝いている。あーあ、早く免許とってバイク買ってくれないかなあ。んで私を後部座席に乗せてほしい。星くんの背中に抱きついて、あの海岸線を走ったら、……くう！　星くん、私のバイト代もあげるから、早く、早く！

「星くんも早く免許とってよ！」

思わず、声に出してしまった。あらいやだ、恥ずかしい。

「はっは、そりゃ無理だ、十八歳にならないとこういう大きいバイクに乗れる免許はとれないんだ。中免もまだもってないけどな。あー、早くこういうのに乗りたいよ。どんな気分なんだろう？」

星くんのその言葉に答えて、そらさんはどんな人でも惹き付けて

しまいそんな魅力的な笑みで、とんでもないことを言い始めた。

「じゃ、乗る？」

「え？」

星くんの顔が期待に満ち満ちたものになる。そらはふふん、と自慢げに笑って、

「さいっこうに気持ちいいよー。石川さんはスクーター通勤だからヘルメットもあるし、私も今日は六時からだしね。星くんもそうでしょ？ よし、ちょっと石川さんにメット借りてくるね」

「いやったあ！ おれ、ビッグバイクに乗るの、生まれて初めてだ！」

星くんのテンションは最高潮。文字通り、小躍りして喜んでいる。ええええ。なにそれ。なにそれ。なにそれえ？

星くんと二人乗^{タンデム}りするのは私が最初って（勝手に）決めてたのに

！ なにこの女！ 敵だ！ 新たな敵が現れた！

そらは一度店の中に引ッ込んで、ハーフトタイプのヘルメットを持ってくると、

「んー、これ、さすがに星くんには小さいかな？」

「大丈夫です！ 頭蓋骨が割れてもかぶります！」

星くんは石川さんのヘルメットを無理やり頭に押し込む。うわ、入るんだ。石川さんもそんな頭が大きいわけじゃないのに。うん、星くん、顔ちっちゃいもんね。うふふ。かっこいい。じゃない、この状況はそんなことを言っている場合じゃない。

そらはバイクにまたがるとスタンドを蹴って上げると、エンジンがかかる。その一連の動作も流れるようにスマートだ。足、片方しか届いてないようだけど、バランス感覚が抜群なのか、全く危なげない。グオン、というエンジンの音は胸に響くくらい低くて大きかった。

「さ、星くん、後ろに乗って。ちゃんとお姉さんの腰につかまるんだよ」

星くんはそくさとタンデムシートにまたがる。

「ちゃんとぴったりくつついていてね！」

その言葉の通りに、そらさんの背中にぴったりと密着する星くん。えええええ。なんじゃそりゃあ。え、そんなにくつつくものなの？「じゃ、私たち、四〇二号線をひとつ走りぐるつとまわってくるからね！　るるさん、千春さん、あとはよろしく」

よろしく言われても。何を？

四〇二号線って日本海に沈む夕日が見えるっていう最高のロケーションのドライブコースじゃん。まだ夕日には時間があるけどさ。え、そこを、星くんが美人のオネエサンと一緒に二人乗りタンデムしてくるということですか？　私には理解できません。

呆然としている私をよそに、密着した二人を乗せたバイクは発進し、駐車を飛び出していく。

国道を曲がって見えなくなっていく二人の姿を、私は言葉もなく見送ることしかできなかった。

「……せんぱい？」

千春が声をかけてくる。

「なによ」

「なんか、あたし、ものすごく嫌な予感がするんですけど」

「大丈夫でしょ、なんとかっていう大会で入賞したって言ってたし、事故とかはめったにおこさないでしょ」

「そうじゃなくてえ、見ました、星先輩の顔？　せんぱい、もし、星先輩があたしからそらさんに気持ちに移ったら……、趣味もあうし」

「そ、そんな！　星くんはそんな浮気性じゃない！」

「別に付き合ってもいないんだから浮気も何もないじゃないですかあ。見たでしょう、あの星先輩のきらめく笑顔。そらさんにはあたしでさえときめいちゃうくらいなのに、男子高校生にしてみたら……」

「……」
「な、ない！　ないはずよ！　そ、それに私たちの方が若いんだから」

「そらさんだつて二十二歳ですよ、一番いい時ですよ？ 年上のお姉さんにころつといつちゃうとか、よく聞く話じゃないですかあ」

「それって、あんたもそらさんに負けを認めてるってこと？ あんたのプライドってそんなものだったの？」

「じゃあ聞きますけど、せんぱい、そらさんよりいい女だつていう自信、ありますか？」

う。ううう。

「ない」

「でしょ？」

二人の姿がとつくに見えなくなった国道を眺めながら、私たちは黙りこむ。

「負けちゃ、いられないわね」

「そうですねえ……もしかしたら星先輩、特殊な趣味の男の人かもしれないし、そんな簡単に負けないですよあ」

「それってあんたが特殊ってことじゃないの」

「まあ否定しません」

否定しないのか。自覚しているのか。

千春は私の手をがしつと握って、きつぱり覚悟を決めた顔で言った。

「せんぱい！ がんばりましょう！ これはもう、私たち二人のたたかいですよ！」

「そ、そうね！ 多少、魅力で負けていたって、女子高生の底力を見せつけてやるのよ！」

私たちは手を握り合い、沈みかけている太陽に向かって誓ったのだった。

「せんぱい、私もそらさんに星くんをとられないように、頑張つてアプローチしますから！」

……いや、それはやめて。忌々《いまいま》しいことに星くんは現在のところあんたに惚れてんのよ。また私、泣くよ？ 暴れるよ？

「おい、お前ら、店の外で騒いでないで早く入れや。馬鹿やるんならお客さんに見えないとこでやれ」

ドアから顔だけ出した店長の声が響いた。

十一 へっ、おれの夜の顔を知らないからそんなことを言えるんだ

「まったく、おめーらがきゃーきゃー騒ぐ声はよく響くんだからよ。お客さんが何事かと思うじゃねえか」

店長はカレーライスをスプーンで口に運びながらそう言った。カレーは毒毒しい真っ赤な色をしている。この店で一番インパクトのあるメニュー、超激辛100倍カレーだ。こんなの、よく食べられるなあ。変なところで感心した。私も食べたことがあるが、一口で断念。あそこまで辛いともはや毒だと思う。

私と千春はいつもの指定席に座り、店長の食べっぷりを半ば呆れながら眺めている。

「で、そらと星はどうした？」

顔色ひとつ変えずに激辛カレーをぱくぱく食べながら店長が聞く。汗もかいていない。この人の味覚はどうなっているんだろうか。飲食店の責任者として致命的な欠陥があるのではないかと勘ぐってしまふ。

「ええとそれがあ、二人してバイクに乗って海岸線走ってくるって行っちゃいましたあ」

千春が私の顔をちらちら窺うようにして答えた。

「ああ、あいつもバイクまた乗るようになったみたいだな。ふっきれたのか。いいことだ」

店長がよくわからないことを言う。

「ふっきれたって、何がですか？」

「おっと、秘密だ。それよりも、小島あ。気をつけろよ？」

「は？ 何がですか？」

店長の言っていることがいよいよわからない。

「そらつてな、昔から男を切らしたことがないんだ」

まああれだけ美人なら男も放っておかないだろうし、彼氏がいない方がおかしいというものだ。

「昔からそうだったんだ。あいつは高校生の時から、三カ月おきにとつかえひつかえいろんな男とつきあってた……」

「もしかしたらそのいろんな男の中に店長も入ってたんじゃないですかあ？」

千春がそう茶々を入れると、

「まさか。おれはデブ専だからな」

衝撃の事実！　そうか、そうだったのか。いや別に店長を男として見たことはなかったからどうでもいいっちゃどうでもいいんだが。「じゃああたしなんかぴったりですねえ」

千春はそう言っただけのおなかのあたりをおさえる。千春はたしかにむっちり感はあるけれど、どう厳しめに見てもデブとは言えないと思う……。

店長はほんの数秒、千春を品定めするかにようにねめつけて、

「失格」

と切り捨てた。

「ひどくないですかあ？　失格って、それ、セクハラですよ」

店長はそんな抗議の声を無視し、スプーンを皿に置くと、ソファの背もたれによりかかり、何かを想像するかのように目をつぶった。「おれの理想の女っていうのはなあ、……そうだな、ヒグマみたいな体型の女がいいんだ」

ふーん。いやまあそういう趣味の人も結構多いらしいけどさ。でもヒグマって。

「だって、男の人って、ふつう、細い人の方がいいんじゃないですかあ？」

千春は食い下がる。

「それでもねーよ、細い女は骨が当たって痛いしな」

なんかそれって軽くセクハラ発言じゃないの？　骨が当たるって、つまり、ナニをアレする時の話よね。

「だって、テレビに出てくる女優さんとか、グラビアアイドルとか、みんな細いじゃないですかあ」

千春は口をとがらせ、目を剥いてそう言った。そこまでムキにならなくてもいいじゃん。

「ふん、葉村はコドモだなあ。いいかあ、あれは観賞用だ」

なんかセクハラどころか全世界の女性を敵にまわすようなことを言い始めた。この男、女性を観賞用とかそういう風に色分けしてたの？ 今まで少しは尊敬していたところもあったのに、一八〇度回転して軽蔑してしまいそうだ。だいたい、観賞用があるってことは……実用もあるってこと？ 実用って、ナニに使うの？ ワタシワカンナイ。

店長は目を閉じたまま、

「やっぱり、圧倒的な肉に押しつぶされたいよなあ。もう、そりゃ、窒息するくらいに。ふふ、ふふふ、ふふふふふふ」

「お前もうしゃべるな」

つい店長に向かってタメ口で命令してしまった。黙っていればそこそこ顔もいいし、モテそうな男なのに。というよりも今までは男性として意識はしていないにせよ、野性味あふれる魅力のある人間だとは思っていたのに。

「ああ、窒息して死にたい……」

店長は両手を空中でもみもみし始めた。この男の頭の中では今どんな妄想が繰り広げられているのだろう。考えたくもないけど。

「いいかあ。女っていうのはなあ、観賞用と実用と共用の三種類がいるんだ」

ん？ キョウヨウってなんだろう。店長の言葉の意味がわかりかねたので、少し考えこんだ。教養じゃないだろうし、共用？ 共同で、用いる、女。

そして理解した。

こいつ、女の敵だった！ この世から滅すべき魔だ！

「千春！」

私の呼びかけに千春は俊敏しゅんびんに反応した。私たちはテーブルの上に置いてあるファッション雑誌を取り、立ち上がる。二人で店長

の座っているスツールの後ろにまわり、雑誌を丸めて棒にしたもので店長のラフにセットしているつもりらしい頭を思いつき殴る。あまりにも力を込めすぎたので、手首が痛くなったほどだ。

私は店長の背中から大声で、

「さいてー！ こんな性根の腐った男は見たことないですよ！」

と叫んだ。千春も同じように声を張る。

「世の中にはあ、思っても口に出しちゃいけないことってのがあるんですよお！ 確かにそういう女性がいるのはほんとのことですけど！」

スパーン！

ついでに千春の頭も殴ってやった。

「ほんとのことじゃないわよ！」

「えーだってえ、実際そういう友達、いるじゃないですかあ。男女仲良しグループで、ほらみんなの共有物になっている……」

「そんなのとは友達の縁を切れ！」

もう一度はたく。

「だって、野球部のマネージャーのチカさんなんか、サトウくんのスズキくんとかカハシくん、みんなやっているっていう噂が」

「マジで！？ 初めて知った！ うわもうチカの顔見れなくなる！」

表面上、そこそこ仲良くやっているクラスメイトだったのに。シヨックを振り払うためにさらに千春の頭を叩いた。しかし千春の頭はいい音がする。きつと中身がないから良く反響するんだろう。

「おいおい、漫才ならよそでやってくれ」

店長が呆れた声でそう言うが、

「もともと店長が人として許されないようなこと言うから悪いんじゃないですか！」

と言いつ返して最後のトドメとばかりに野球のバットを振るようなフォームでフルスイング。うん、真芯でとらえた。

「み、耳に……。鼓膜破れたらどうするんだ、おい。お前ら少し女らしくしねーとモテねーぞ」

「少なくとも店長にはモテなくて結構です」

そう言っただけたちはソファに戻る。

「あー悪かったよ。今のは冗談だ。本気にとるんじゃないぞ。そのチカッて子は知らないけどな。いいか、おれの知ってる範囲じゃ、自分の身体安売り……違うな、高くて安くても身体で釣るような女はたいてい最後にはろくでもない男にひっかかって不幸になる」

「ろくでもない男ってこの人ですよ」

制服のポケットから手鏡をとりだして店長の顔につきつける。店長は鏡の中の自分を見つめ、

「あー、こいつは百人単位で女を泣かしているから気をつけろよ」

「ほんと泣かされてるくせに」

「へっ、おれの夜の顔を知らないからそんなことを言えるんだ」

「寝不足で目がイッてる店長の顔は知ってますけどね。あれ見たら私も泣きそうになりましたよ、怖くて」

店長はふん、と鼻で笑うと食べかけだったカレーに手をつけ始めた。

あれ。何の話をしていたんだっけ。脱線するにも程がある。そうだ、そらさんがどうか……。気になるから聞いてみよう。

「店長、じゃあそらさんもそういう、安売りするタイプの人なんですか？」

とてもそうは見えないけど。

「あいつはな、身体は安売りしないが、自分は安売りしちゃうんだ。目についた男がいたらとりあえずオトす。いや違うな。自分をオトすように男を仕向ける。んで男が我慢できなくなるまで焦らして焦らして限界越えそうになるとばい、だ。魔性の女だよ」

へー。そうなのか。ちょっと話したただけなんだけど、一途っぽい雰囲気持ってたのに。

「店長、詳しいですね」

「前にな、おれの友達もあいつと付き合ってた。あいつは一年近くは持ったな。そらの最高記録じゃないか」

「それって店長のことじゃないですよ」

「だから違うつていったじゃねーか。でだ、おれの知る限りでは今現在、そらには男がいない。それもそらにしてはかなりの長期間な。これも最高記録かもしれん。小島あ、気をつけろよ」

「だからなにがですか」

「星くらの男ならあつという間にオトしまうぞ、あいつは。二人乗りで海岸線なんて、もうおれにはオトします宣言にしか見えねーよ。そらは狙った男とは必ず四〇二号線を走るんだ。あれはなにかの習性なのかね」

……何だと。

店長は皿を手にもって残り少なくなったカレーを口の中にかきこむ。

「もしそうだったら、おれはそらの味方するからな」

「私の味方してくださいよ！」

思わずそう叫んだが、ん？　なんで私が星くんのこと好きだっていうのを店長が知っているんだろう？

私の表情を読み取ったのか、店長はにやりと笑う。

「小島はいい奴だよなあ。思っていることがそのまま表情と態度にでるしな。そういう奴に悪い奴はいねーんだ。けどな、さっきも言った通り、おれはそらの味方するからな」

千春はまた雑誌を丸め始めて、

「てんちよお、せめて中立になってくれないとまた頭はたきますよ。それに、星先輩は、今は」

千春のことを好きはず。ここでそらさんに乗リ換えられたら、千春の女としてのコケンにも関わるんだろう、千春は不機嫌そうな顔をしている。

「葉村はもう星を振ったんだろ？　じゃあもういいじゃねーか。お前らがなに考えてるんだか知らないが、葉村は星に期待を持たせるようなことはすべきじゃねーよ」

「でもお」

「小島には前にも言ったな。お前ら、自分のことばかり考えて、あんまり残酷なことはするんじゃないよ」

言い返せない。確かに、私たちは星くんの気持ちを自分たちの都合のいいようにふりまわそうとしていた。私は星くんが好きだ。でも、星くんが本当は全く可能性がないのに、私たちにそれがあると信じさせられて、もしもその結果苦しんで傷ついて、それで、目論見どおりに私のものになったとして。それって、私にとって、ハッピーエンドなんだろうか。好きな人が苦しんでいるんだよ？好きな人をつらい目にあわせて、泣かせて、何がハッピーなんだろう？私は恋をしている。欲しいのは星くんの私への好意とか、愛情。

夜中に一人で泣いてしまうほどそれが欲しい。でも、欲しいのは本当にそれだけなのだろうか？星くんを手に入れられたら、私は幸せなの？違う。断じて、違う。私は、私のハッピーと同時に、星くんのハッピーも願っているんだ。好きな人には、笑っていてほしい。できれば私の隣で笑顔でいてくれたらいいけど、たとえ、そうでなくても。でも、私以外の誰かの隣で笑っている星くんは？それを見て私は幸せ？まさか。でもそうさせないために星くんを泣かせる？馬鹿、それじゃ私の存在が星くんにとって毒になつてしまっじゃない。わからない。わからない。ほんとは、どうすればいいんだろう。

でも、私たち、もしかしたら、もしかして、
「間違っているのかな」

気がついたらそう呟いていた。

「せんばあい……」

千春が不安そうな顔で私を見る。

「千春、もう、やめようか、作戦」

私がそう言つと、千春はふいつと横を向いて言った。

「やめない」

「だってさー」

「やめません」

まさか、千春、本気でそらさんに負けるのを嫌がっている？

私は、星くんのことが好きだから、心の中の半分が、もうこんなことやめようやめようって言っている。

重い空気が流れた。

その空気を察したのかどうか、店長は空になった皿を持つと立ち上がり、

「んじゃ、おれは仕事に戻ってくるわ。おめーら、よく考えておけよ」

と言ってバックヤードを出て行った。

入れ替わりに、仕事を終えた石川さんが超特盛りのカレーライスを持って入ってきた。やっぱり一〇〇倍激辛だ。この店、こういう味覚の人だらけで大丈夫だろうか。

……石川さんが仕事あがるってことは、そうか、もう五時過ぎたのか。

「よおつ、おつはよう！　んー、なに二人して不景気な顔してんだい？　笑え、笑えっ！　若いうちに笑っておかないと歳とってから老けるよっ」

石川さんが歳の割に若く見える秘訣ひけつがわかった。確かにいつも笑っているのよね、この人。

石川さんはさっきまで店長が座っていたスツールに腰掛けると、わざとのようにカレーの皿をだんっ！　とテーブルの上に置いた。「いやあつ、そらちゃんもだいぶ元気になったね！　星くん後ろに乗つけてバイクで海岸線走りに行っただって？　ははは、いいねえ、青春だねえ！　そらちゃんもあの道好きなんだから！　いっつも狙った男とはあそこ走るんだよね！　よく飽きないもんだっ。ふふ、このままあの二人つきあっちゃえばいいのに！」

なにやら不穏当な発言ふおんとうをしているが、この際、そらさんのことを石川さんに聞いてみよう。店長よりもこの店の経験長いから、そらさんについてもいろいろ知っているだろうし、それに何より石川さんは嘘ついたり隠し事したりしない人だ。隠し事ができない、ので

はなく、確固とした信念に基づいて隠し事をしない、という性格の人なのだ。聞けばなんでも答えてくれるだろう。

「石川さん、ちょっと聞いていいですか？ そらさんって、どんな人なんですか？」

「まあた曖昧な質問だねっ。どんな人って、あの通り、いい子だよ」
「さっき店長が、男を切らしたことがないって……」

石川さんはカレーを一口食べ、うん、これはいける、今日の晩御飯はこれでいいや、と呟いた。大丈夫か石川家。小学生の息子さんがいるはずだが、なんとかマンカレーとかの方がいいんじゃないの？
「石川さあん、店長の言ってたこと、ほんとなんですかあ？ 男の人をとつかえひつかえだとか言ってたけどお」

「そりゃ昔の話だよっ！？ 確かに高校生のころから下は中学生から上は三十路までいろんな男とつきあってたみたいけどさ。でもね、今は全然ちがうんだよっ！？ 田倉沢くんが何言ったか知らないけどさ、」

田倉沢っていうのは店長の名前だ。田倉沢夏雄。変な名前。でもるよりはましか。

「最後にや大恋愛して、そりゃー途なものだったよ！ 私もびつくりしたけどさ！ 女って変わるもんだよねえ。私も昔は引つ込み思案で、今のだんなど知り合うまではさ、男の人とまともに話すこともできなくて、」

その話もそれはそれですごく興味があるが、とりあえず今聞きたいのはそれではない。

「大恋愛したって、相手はどんな男の人だったんですか？ それに、さっき、だいぶ元気になったねって……。何かあったんですか？ 失恋したとか？」

石川さんはスプーンを咥えて、眉にしわを寄せ、

「んー、その辺はプライバシーっていうものがあるからね。あんまりその話は……」

と口ごもる。石川さんにしては珍しい。

千春は手を合わせて石川さんに懇願する。

「私も聞きたいですう！　るせんぱいの幸せがかかってるんですよ！　そらさんって、星先輩みたいな年下の高校生でもオーケーな人なんですかあ？」

あ、こいつ余計なことを。まあいいや、どうせ石川さんにもバレてるんですよ。恥多き青春になっちゃったなあ、私も。

「うーん、でもねえ、これは本人に聞いてみたら？」

ほんとに石川さんらしくないなあ。

「お願いします！」

私も手を合わせてみた。

二人で石川大権現いしかわだいこんげんに心をこめてお願い。千春なんか柏手かしわでまでうつてる。私も真似しよう。パン、パン。

「んー。教えてもいいけど、ひとつ、約束できるならねっ！」

「なんでも約束します」

「じゃあ、いい？　ちゃんと約束して」

石川さんはスプーンを皿に置いた。

「はい、守りますからあ、どんな約束ですかあ？　石川さんに聞いたなんて絶対に言いません」

と千春も誓う。

石川さんはいつもと違うトーンで、

「あのね、べつに私から聞いたと言ってもいいよ。私はこんな性格だし、それはあの二人も知ってるしね。どうも小島こいじさんの恋路こいじにも関係あるみたいだし」

やっぱりばれてるじゃん。ああ恥ずかしい。石川さんは続ける。

「約束っていうのはそうじゃない。知ったからと言って不用意に、そらちゃんと田倉沢くんを傷つけるようなことをしない、言わない。それが約束だよ」

「はい！」

二人で元気よく返事をする。あれ？　そらさんを傷つけないっていうのはなんとなくわかるけど、店長を傷つけない？　なんでここ

で店長の名前がでてるんだろ。

「そらちゃんが大恋愛したっていう相手は、田倉沢くんの親友だった」

「店長の友達とつきあってたとはさっき言っていましたけど……」

「おとし一昨年のことだよ、彼もバイクが好きでね、田倉沢君の紹介で付き合い始めて。そらちゃんにしてみれば本当の意味では初めての恋愛だったかもしれないね。二人好き合っていたんだけど、すれ違いもあったみたいで、たまにそこで」

そう言っで私たちが座っているソファを指さす。

「泣いていたよ。愚痴いっぱい聞かされたもんさあ、ははは」

「それで？ どうなったんですか、その二人？」

私は先を促す。

「それで、結局二人は別れて、今に至る、って話だよ」

「それじゃあ、普通の話じゃないですかあ。ほかになんかあるんでしょう？」

千春の言うことももつともだ。あんな前置きしといて、店長の友人と付き合いしました、別れました、終わり、じゃ納得がいかない。もつと問い詰めよう。

「じゃあ、今はその、店長の友達ってどうしてるんですか？」

「そりゃそらちゃんが一番知りたいだろうね。ま、楽しくやっていえると思うよ」

「なんですかそれ」

「私も田倉沢くんも、彼が楽しくやってるって信じてる」
意味がわからない。

「そらさんはその人のこと、どう思ってるんですか？ 今も、好きとか？」

「そりゃそうだろうねっ！ そうじゃなきゃいけないと思うよ。でも、もう忘れた方がいいとも私は思う。はい、この話はおしまい！」
石川さんはそう言っでカレーを攻略し始める。スプーンが皿にぶつかるかちゃかちゃという音だけがバックヤードに響く。

千春は黙って何か考え事をしている。その表情は微妙に、暗い。私も、なんとなく、想像がつくような、つかないような。

店長の紹介で、そらさんとその男の人は知り合い、付き合い始めて、で、別れた。

——おれはそらの味方するからな。

さっきの店長の言葉が頭に響く。

「ねえ、石川さん、その友達さんと店長って今も仲がいいんですか？」

「うーん、私にはわかんないよつ、そんな難しいこと」

石川さんはぱくぱくカレーを食べている。

千春が決定的な質問をした。

「その友達さんは、今どこにいるんですか？」

石川さんは一瞬躊躇したあと、スプーンを持ったまま、人差し指を立て、天井を指さした。

いや、天井じゃない。

きつと、

空だ。

空の向こう。ずっと、ずっと上。そらさんの彼氏がいる場所。空の上。

「病気でね」

ぼつりと石川さんが言う。

「あのバイクが、形見になっちゃったねえ。小島さんには悪いけど、私はそらちゃんの味方するよ。あの子には幸せになっただけ。去年のそらちゃんも田倉沢くんも見えてられなかったよ。年下でも高校生でもいいよ。ふっ切って次の恋愛した方がいいと思うんだ」

「……」

私たちはふたりで黙りこむ。

「ま、そうは言ってもね。あんたも、真正面からぶつかりな。恋愛ばかりは相手あってこそだから、こっちの都合で動いてくれないからね。ただね、言うておくけど、」

石川さんにはこやかに、私の目をまっすぐ見て言った。

「本気になったそらちゃん、剛腕だよ。男を落とすことにかけてはね」

十二 いいにおいしてたなあ

午後八時過ぎ。

私たちは、いつものごとく、ソファでくつろいでいた。

まるでこのソファの一部になったみたいだ。もしかしたら、仕事をしている時間よりもここでおしゃべりしている時間の方が長いのかも知れない。

私と千春が三人掛けのソファに座り、星くんは二人掛けのソファ、テーブルをはさんでその向かいのスツールにそらさんが座っている。店には厨房に調理係が一人と店長が出ている。今頃店長はレジで日報とにらめっこしているはずだ。

私と千春はもうセーラー服に着替え終わっているが、星くんとそらさんはまだ店の制服のまま。今日こそなんとかして星くんに家まで送ってもらいたい。

やることがないのか、千春は学生手帳をだして校則を読んでいる。確かにここにある雑誌はほとんど読み終わったものばかりだけど、学生手帳はないだろう。そこにはあんた好みのぐちよぐちな官能的世界は広がっていないわよ。それとも千春ほどアブノーマルな人間には校則でも興奮するのか。ちよつと聞いてみよう。

「それ、なんか面白いこと書いてあるの？」

「結構面白いですよ。聞いてくださいよ、『本校生徒の淫みだらな行為は禁止とする』って校則にあるんですよ」

「そういう校則あるの！？　じゃあ野球部マネージャーのチ力ちゃんちゃんは校則違反じゃん！」

私思わずそう叫ぶと、星くんが反応した。

「え、チ力って、え、そ、そうなのか？　……淫らな行為って、つまりその、」

顔を真っ赤にして動揺している。そう言えば星くんとチ力って一年生の時に仲良かった気がするなあ。あの頃はチ力に嫉妬していた

つけ。

千春は下品な笑みを浮かべて、

「ここに書いてあるのはそれだけじゃないですよ。『淫らな行為とは次のものを言う。一、お互いの……』」

「ストップ！ それ以上は言わなくていいわよ。ほんとにそんなこと書いてあるの？」

「これはうそです。淫らな行為の禁止はほんとに書いてありましたけど」

「失敗したわ。止めなきゃあんたの中でどこからが淫らな行為かがわかったのに」

「こないだの夜のせんぱいとあたしの行為は淫らでしたよねえ？」

千春の髪をひつつかんで、ごっん、と頭突きしてやった。

「いったー！」

ダメージを受けて頭を押さえたのは私の方だった。そういえばこいつは石頭だった。

千春は私の頭突きにも平然とした顔で腕時計を見て言った。

「まだ、こんな時間なんだあ。今日はいっぱい働いた気がしたのになあ」

「今日なんて全然ヒマだったじゃない。お客なんて、七時くらいにわつときたけどそれからぱったりだったし」

「あんまりヒマすぎて時間がたつのが遅く感じたんですよ」

そう、今日はヒマだった。お客がいつもの半分くらいしか来なかった。だから、予定より早く、八時にはタイムカードを切らされてしまったのだった。

「私お金、稼ぎたいのに……」

千春がそう文句を言う。

私たちのやりとりをにこにこしながら見ていたそらは、その笑顔そのままに、

「でも、どのくらいお客さんがくるかを完全に予想はできないからね。仕方がないよ」

と、諭^{さと}した。この笑顔ひとつで何人の男を騙^{だま}してきたことやら。
「そうだ、それで、そらさん、今日はバイクに乗せてもらってありがとうございました」

星くんがその時の興奮を思い出したかのようにはずんだ声で言う。
あれ？ 星くんって、そらさんのこと、名前で呼ぶんだ。そうなんだ。ふーん。ちょっと胸がずきん、と痛んだ。私のことは名字で呼ぶくせに。

「おれ、はじめてビッグバイクに乗りましたよ！ すっげえ気持ち良かった！ シート越しにエンジンとマフラーの音が伝わるじゃないですか。あれがもう、ほんとにたまらなかった」

「でしょう？」

そらさんが、自慢げな、そして魅惑^{みわくてき}的な笑顔を見せる。

「マフラーはヨシモトのをつけているんだけどね、いい音出すでしょう？ 音だけじゃないんだよ、性能いいからね、たちあがりのフケ具合が最高なんだよ！」

「いいなあ、いいなあ、すごいすごい」

「バイク好きの子がいて嬉しいよ。最近の前ほど若い人がバイクに乗らなくなってきたからね。大学のバイク同好会も人少なくて。星くんもうちの大学に入学してバイク同好会に入らない？」

くそ、この二人、なんだかい感じで会話してやがる。どこかで横槍いれて話題を変えてやらなきゃ。

と、思っている間にも、話題はどんどんキナクさい方向へと進んでいく。そらさんはたたみかけるように、とんでもないことを言い始めた。

「じゃ、今日の帰りも星くんを乗せて行ってあげようか？」

「ほんとですか！？ やりい！」

それはなしだって！ 星くん、そんなに喜ばないで！

「うん、夜の海岸線もいいよ！。海が灯りできらきら光ってね」

ちよつと待て、なぜ帰りに海岸線を走る？ 方向逆じゃん！ だいたいきらきらってなにそのロマンチックな情景描写。っていうか

さ、まじでそらさんこれ、攻めてない？ 大学生になるとこのくらい普通？ いや、私としてはこれはちよつと、看過かんかしがたいよ？ な、なんとかして止めないと。

「えー、星先輩、帰りはあたしたちを送って行ってくださいよお。女の子たちだけで夜に道を歩かせちゃ駄目ですよお」

千春が口を出した。ナイスだ。

「大丈夫よ。この辺は別に危なくないところだし。私も高校時代はずっと一人で歩いて帰ってたよ？」

完全に敵認定いたします。この女、敵だ。目標、十時方向、距離二メートル。これは私も邪魔しないと、とんでもないことになりそうだ。

「あ、あの、そらさん！ ヘルメット、ないですよ？」

確か、ノーヘルは違反のはず。さっきは石川さんのヘルメットを借りて行つたけど、今はこの店のどこにもヘルメットなんてもんじゃない。

「あ、そうだよな。そっか、今日はヘルメット二つ、ないよね。うーん、残念だよ。星さんと夜の海岸線走りたかったのに」

そらさんはがっかりした顔をする。

星さんと、夜の、海岸線、走りたい、ですって？ それは、私がいつか星くに言おうと思つていたセリフなのに！ なんで先に言われちゃっているのよ。それにこれって、受け取りようによっては、コナかけているようにも聞こえるんですけど。いや完全に、コナかけてますよね？

そんな私の思いを知つてか知らずか、空さんは、

「星くん、バランス感覚すごくいいから、後ろに乗せていても運転楽なんだよね。また星くんタンデムと二人乗りしたいから、今度からメットもう一つもつてくるね」

と言つた。

「はい！」と元気よく返事する星くん。おもちゃを買ってもらつ約束を取り付けた子供みたいな満面の笑みだ。軽くガッツポーズまで

している。それは、バイクに乗れるのを喜んでるんだよね？　そらさんと一緒、というところに喜んでるんじゃないよね？　でも、心なしか、顔が上気して見えるけど。

「なんだか胸がざわざわしてきた。」

『剛腕だよ』

石川さんの言葉が頭の中でリフレインする。

自分のことを名前で呼ばせて、夜の海岸線を二人乗^{タンデム}りしたいとか言って？　さつきから私たちには目もくれず、ずっと星くんの顔ばかり見つめている。

実に、不愉快。

ちらりと千春を見ると、彼女も不機嫌そうな顔をして、学生手帳をばらばらとめくっている。

千春が不機嫌になるのもわかる。星くんが千春に告白したのはつい三日前のことなのだ。それがいまや、星くんは千春を無視してそらさんとなにやらしい雰囲気で話している。振った相手に私に譲る予定だったとはいえ、これではオンナとしてのプライドに関わるのだろう。

「星くん、私のバイクはタンデムシート狭いし、乗るときはもっとくっついていいんだよ」

内容も去ることながら、そらさんの声が少し、甘ったるくなってきた。まともな恋愛経験皆無の私にも、わかる。これは落としにかかっている声だ。

「あ、でも星くんに抱きつかれるんだから、私もつとダイエットしなくちゃ。腰に手をまわされるんだから、太っていると恥ずかしいし」

そのプロポーションでそれを言うか。店長とは別の意味で全世界の女性を敵にまわす発言だ。

「え、そんなことないですよ、そらさん、すごく細かったですよ」「ほんと？　やったー！　星くんの腕って、見かけよりもずっとたくましいよね。私ドキドキしちゃったよ」

星くんがだらしのない照れ笑いをすると同時に、千春が決然と立ち上がった。あまりの勢いに隣にいた私がびびったほどだ。それさんも驚いた表情で千春を見つめる。

千春は生徒手帳をもったまま、星くんのそばへ歩いて行くと、お尻をねじ込むようにして星くんの隣へ座った。そして明らかに不自然に体を密着させる。さらにはいつも私にしているのと同じように、頭を星くんの肩に預けた。

私はもちろんのこと、それさんもあつけにとられた顔をしている。気持ちにはわかるけど、いくらなんでも、あからさまじゃないの？

「ねえ星先輩い、生徒手帳のこのページ、みてくださいいよお」
うげえ。千春はこんな媚び媚びの声を男にも出せるのか。

「ほらほら、ここですよお」

ちよつとちよつと、その距離、千春の息が星くんの首筋にかかったりしてるんじゃないの？ 千春の太ももが、星くんの太ももにぴたりとくっついていてる。やりすぎだって！ 星くんも顔を硬直させてるじゃないの！

「あたしが読めますよお？ 本校の生徒は、通学に特に必要だと職員会で認められない限り、オートバイの免許の取得、運転を禁ずる。安全の観点から、オートバイの後部座席への乗車も禁ずる」

「あ、ああ、そう書いてあるな」

「星先輩、残念でしたねえ。駄目なんですって」

千春がふん、どうだと言わんばかりの勝ち誇った目でそれさんを見る。それさんは慌てた様子で、

「それは昔暴走族とかに入る生徒がいるからできた校則なんだよ！

私が乗せるのとは意味が違うよ！」

「でもお、校則は校則だし、こうやって禁止って書いてあるから、禁止なんですよ。ばれたら停学かもしれませんよ」

「ばれないよ、このくらい」

「あたしがチクるもん」

バチバチと火花が散る。怖え。いや、怖がっている場合じゃない、

これ、もしかしたら私も参戦しなければいけない状態じゃないの？
千春は星くんにぴったり寄り添ったまま、愛くるしい、ちよつと子供っぽい雰囲気^{かも}を醸し出して、甘えた声を出す。

「ほしせんばあい。今日のあたしって、いいにおいしませんかあ？
日曜日にコロナ買ったんです。星先輩に気に入ってもらえたら嬉しいなあ」

裏切りだあ~~~~~！！ 裏切り者がでた！！ どこでそんな技覚えた！

あんた、昨日の夜のあの約束はどうなったの？ 三日前に告ってきた男相手にそんなこと言ったら一発で誤解されるじゃないの！誤解されないわけがない！ 完全に裏切りでしょこれ！？ いくらそらさんに対抗意識燃やしたからといって、これはないわよ！ あんた裏切り者の末路を知らないの？ 小早川秀秋がどうなったか！ 私も今日の歴史の授業で習ったんだけどね。いやそれはどうでもいい。と、とにかくこの毒蛇から星くんを引き離さないとい

星くんは目を白黒させて、でも当然のごとく、ふにゃ、というかへにゃ、というか、なんともしまりのないとろけそうな表情をしている。星くん、危ない！ それは毒だ！

力づくで千春と引き剥^{はが}そうかと思ったが、そんなことしたら、まるで、まるで——私が星くんのこと好きで邪魔してるみたいじゃない！ 大好きだけどさ！

声が怒りで震えないように注意しながら、クールに私は言った。

「千春、どうでもいいけど、もうこんな時間だし、帰ろうよ。あんまり遅くなるのはいやよ」

「そうですねえ。そろそろ、帰りましょうか？」

千春は案外素直に星くんから離れた。その瞬間、星くんが実に残念そうな表情をしたのを私は見逃さなかった。悔しい。

「いいから、ほら、千春、帰るわよ！」

「はあい、せんぱい」

「ちよつと待ってくれ、おれまだ着替えてないんだ。とにかくさ、

夜だし、送って行くからちよつとそこで待っていてくれ」

さすが星くん。なんだかんだでちゃんと送ってくれるんだ。

自分のけ者にされたのが気に食わないのか、そらは唇をつんとがらして、

「……私も着替えて帰ろうつと」

と言つて更衣室に入っていく。その表情すら可愛らしい。ああ腹が立つ。

でも、この状況って良く考えると星くん、いま、ハーレム状態よね？ なにこれ。私も星くんハーレムの一員になつてるじゃない。しかも序列は一番下。三号さん？ なんだそれ。

星くんとそらが更衣室に入っていくのを確認した後、私は千春の腕を乱暴につかみ、強引に引き寄せて小声で凄んだ。

「あんた、どういふつもりなの？ あれ、なによ、やりすぎじゃない？」

千春も小声で反論する。

「だって、あのくらいやらないとそらさんに星先輩とられそうな気がしたんですもん」

「あれで星くんは完璧にあんたに脈あるって思ったわよ！ 恋愛感情強化してどうするのよ」

「んーでもその想いを引き延ばしてやらないと、るせんぱいが星先輩の相談相手になるっていう作戦がうまくいなくなるじゃないですかあ」

「だからそういうのはもうやめようかなって思つてるところだし！」

「あたしは、るせんぱいがいやだって言つてもるるせんぱいの応援しますからね！」

ありがた迷惑って言葉をあんたに送りたいわ。確かにありがたいとは思うけど、過ぎたるは及ばざるがごとし、って言うでしょ？

今日の国語の時間に習った。

「そらさんなんか絶対に負けませんからね、あたし」

千春はきつぱりとそう言った。なんだかややこしくなってきたな

あ。

この日、そらはさんはバイクに乗って一人で帰宅し、星くんは私と千春を家まで送ってくれた。千春を家に送り届けたあとは、念願叶って星くんと二人きりになった。

でも、嬉しいはずなのに、私はどうもテンションが上がらず、お互いほとんど言葉をかわさなかった。

唯一あった会話らしい会話といえば、千春のことだった。

「なあ、今日の葉村のあれって……」

「千春はどんな男相手にもああいう態度とるんだよ。ほんとに好きな男にはああいうことしない子なの」

きちんと釘をさしておく。じゃないと後々とんでもない展開になりそうだ。

「そうなのか……なんだ……はは……」

星くんは心底がっかりした様子だった。見ていて痛々しい。ああ、私たちは一体何をやっているんだろう。

「葉村、いいにおいしてたなあ」

ため息まじりにそんなことを言う。私もコロンをつけようかな。でも、今月の給料はみんな、『魔法の逸品』を買うのに費やしちゃったし。星くん、私の（インチキで）大きくなった胸、もつとちゃんと見てくれないかなあ。あんまりじつと見られると恥ずかしいけどさ、でもさ、ちょっとだけなら見てほしい。見てほしくないけど見てほしい。

そんな馬鹿なことを考えていると、星くんが、ぽつりと言った。

「でも、そらさんみたいな人もいいよな」

「やばいやばい。そちに行くのは最悪のシナリオだ。」

「星くん、大丈夫だって。そりゃ、千春も今はまだ、星くんのこと好きってわけじゃないけど、好きと普通の間くらいにはいるんだから！　ね、がんばろう？」

星くんは笑って頷き、

「ありがとな」

と言った。

「小島の言うとおり、がんばるよ、おれ」

「うん、がんばって」

がんばれ。がんばれ——私。

十三 言つとくけど私は生まれてから一度もしたことないからね

金曜日、放課後の教室。

私は窓際の席に座り、ぼうつと外を眺めていた。教室には何人かの生徒たちが残り、雑談をしている。

校庭では、なんの部活だろうか、体操服姿の生徒たちがストレッチをしている。

秋の冷たい風がカーテンを揺らし、私の頬をなでる。肌寒い。そろそろ冬の足音も聞こえてきそうだ。この辺りは日本海側で積雪もあるし、冬になればどんよりとした灰色の雲が春になるまでずっと空を覆う。冬は、あんまり好きじゃない。教室の窓が閉められっぱなしになる季節がくるのもすぐだろう。

今日はこれから千春と買い物に行く予定で、私は千春がくるのをここで待っていた。この間のテストの結果が悪かったらしく、補習があるとかで少し遅れるらしい。ちゃんと勉強していないからだ。まあ、私もぎりぎりの点数だったから人のことは言えないけれど。

あれから、二週間近くがたった。

あれから、というのは星くんが千春に告ってから、という意味だ。状況は全然かわっていない。

あいかわらずそらさんは星くんに対してあからさまなアプローチをしているし、千春も対抗心を燃やしているのか、これもまたあからさまにべたべたしている。私はその狭間はざまでおたおたするだけ。情けない。

幸いなことに、そらさんは校則を守らせる程度のモラルは持っていたみたいで、あれ以来、一度も星くんをバイクのタンデムシートに乗せていない。星くんは乗りたがっていたみたいだけど。

なんで星くんこんなにモテるんだろう。そりゃ、私が好きになるくらいだからいい男だけど、女の子がよってくるようなタイプでは決してない。服装だらしないし。人生に二度は来るというモテ期に

でも入っているのだろうか。

とは言え、よくよく考えてみると本当の意味ではモテているわけではない。そらは亡くなったという元カレの代わりを探しているだけ、のような気もするし、千春に至ってはただただそらさんに負けたくないという対抗心がそこにあるだけ。千春、あの約束は忘れるんじゃないわよ。今日こそしっかり念をおしてやる。

「私だけじゃない、ちゃんと星くんを好きなの……」

と、思わず小さな声で呟いてしまった。そんな私が星くんから一番遠いところにいる、ような気がする。

なんだかすつきりしない気持ちで外の風景を眺め続ける。見えるのは校庭で運動している生徒たちとあとは住宅。全然いい景色じゃない。ふう、とため息をついた。

そんなとき、教室内を覆っていた雑談がぴたり、と止まった。一瞬の間があつた後、さわさわと教室の生徒たちがざわめき始めた。

「なあ、あれどこの高校？」

「なんかかつこよくない？」

「あれつてもしかしたら女子？ うそ？」

この教室内でおこる出来事にさして興味もわかなかった私はそのまま考え事続ける。

ところが、そのざわめきの主の足音はまっすぐに私の方へ向ってきた。

その人物が私の肩をぽん、と叩いた。

「よお、るる。なにたそがれてるんだ？」

そこにいたのは例の「柔」のロゴ入りのジャージを着た金髪ベリーショートのおつとこまえな少女。涼やかな目元にきりりとひきしまった眉。かつけー。

「み、美雪ちゃん？ どうしてここに？」

「ああ、合同練習だよ。今日はここの道場で市内の高校の柔道部が集まって練習するんだ。今日は亀ヶ崎お前んとこ高校でやる」

「じゃあ道場にいなきゃいけないんじゃないの？」

「遠いところから来る高校もあるからな。始まるまでまだ少し時間があるんだ。それよりもだ」

美雪ちゃんは少し声を落して言った。

「ちよつと話があるんだけど、二人で話せる場所ないか？」

少し、二人で校内をうろろしてしまった。

案外、二人きりで話せる場所というものは校内にないものだ。いや、あることはあるのだが、たいてい先客のカップルがいちゃいちゃしていたりする。

結局、私たちは校庭の花壇のそばにあるベンチにすわることにした。まわりに部活をしている生徒たちはいるがどうせこちらの会話なんて聞こえるわけもないし、ちよつど大きなけやきの陰にもなっていてそんなに人目につかない。道場の入り口も見えるから練習が始まれば美雪ちゃんもすぐに行ける。いい場所だ。

「で、話つてなによ」

「ほら、最近私ら会う機会がなくて例の話もまともにできていなかったじゃないか」

「まあね。ここしばらくはあんたんちに泊まりに行つてないし。美

雪ちゃんも柔道柔道で忙しいじゃない」

「うん、それでなにか進展あったか？」

「進展も何もメールで報告した通りよ。あんたところの馬鹿姉貴が私の邪魔してる」

「うーん、千春も千春でそれなりの考えがあつてやつてゐるつて言つてただけだな」

「なにがそれなりの考えよ。千春なんかにも考えてないに決まつてゐるわよ」

「まあそれはいいとして。ひとつ、真面目な話があるんだ。私は正直なところ、顔が広い」

美雪ちゃんがずいとい私ににじりよつてきた。思わずその動きに合わせて距離をとる。

「なによ急に」

「まあ、なんというか、なぜか私の周りには呼んでもいないのに女子が先輩後輩問わず寄ってくる」

それは知ってる。美雪ちゃんはその端正な顔立ちと男っぷりで近所の女子学生に大人気なのだ。その様子は砂糖に群がる蟻のようだ。あと年輩の男性にも人気がある。

「それでな、いろいろな噂が耳に入ってくるんだ。この辺りの高校生のことならその辺の女どもを捕まえて聞けば家庭の事情までたいがいわかる」

「いやな話ね。私にだってプライバシーはあるんだから、嗅ぎまわらないでよ」

「るることなんか毛が生えてきた時期まで知ってる」

「……美雪ちゃんに隠し事はないからほかの人に言うのはやめてよね」

小学生の頃からの付き合いなんだから他人に聞くまでもなかったか。

「いや、今回の話はるることじゃない。星先輩の話だ」

ぴくりと体が反応してしまった。なんだろう。

「それは私にとっていい噂？ 悪い噂？」

「悪い噂だな」

美雪ちゃんは断言した。

私の喉がごくりと鳴る。美雪ちゃんの目は真剣そのものだ。緊張しながらおそろおそろ聞いてみる。

「……覚悟して聞いたほうがいい？」

「かなり、覚悟して聞いてくれ」

心臓がばくばくする。ただ、なんとなく予想がつく。

「まさか、星くんに彼女ができた……とか？」

美雪ちゃんは首を横に振る。

「……結婚するとか？」

「あほか。というか星先輩はまだ十八になっていないだろう」

「じゃ、じゃあ、だれかを妊娠させた？」

「るるはあほな上にすけべなんだな」

「……美雪ちゃんにとって妊娠はイコールすけべなことなのね。さすが変態姉妹の片割れだけあるわ」

「姉は変態だが私は変態じゃない」

「陵辱されるのが好きなくせに」

あ。ついつい言っちゃった。美雪ちゃんのただでさえ鋭い目がつり上がる。やばい。怒らせちゃったか？

「……だれに聞いたか知らないが、というか千春に聞いたんだろうが、私は陵辱されるのは好きでも何でもないぞ。くだらないこと言ってるといくらるるでも許さないぞ」

「あ、ああ、そう。ごめん。まさか、美雪ちゃんがそんな趣味持ってるなんて思ってたないわよ」

「……ただ、ちよつと、縛られてみたいとは思っけどな……。この間練習してみたんだが、亀甲縛りって一人でもできるもんなんだな」
本物でした。美雪ちゃん、少し顔を赤らめてますが、こっちはど
ん引きのあまり青ざめてるわよ。

自分が赤面していることに気づいたのか、美雪ちゃんはパン！
と自分の頬を両手で叩くと、

「まあそんなことはどうでもいい。こんどるるがうちに泊まりに来たときに話そう。るるに聞きたいこともあるし」

「なによ」

「るるは風呂に入る前と入った後、どっちが」

「言っとくけど私は生まれてから一度もしたことないからね」

「なにを」

「オ」

……！！ あつぶな！！ 危つく言っところだった。セーフ
セーフ。

美雪ちゃんはポンと膝を叩き、

「ああ、マス……」

卓球のスマツシユの要領で後頭部を叩いてやった。そこら中を私の同級生やら見知った顔が歩き回っているっていうのに変な話しないでよ。

「あのねえ。さっきから全然話が進んでないわよ。で、いったいなんなの、星くんの話って」

「あ、ああ、そうだった。忘れてた。えーと、星先輩なんだが……これはきわめてプライベートな話だから他言無用でお願いしたいんだが」

「約束するわ」

「あのな、星先輩は星先輩じゃなくなるかもしれん」

「……………はあ？」

一瞬、星くんがなにかのSF映画のようにうにうにょと変形して異星人に変身する姿を想像してしまった。キシヤー！とか奇声を発して人間を食べて回るエイリアン。

「なに言ってるの、美雪ちゃん」

「だからさ、星先輩の名前が星先輩じゃなくなるかもってことだよ」
「……………」

つまり、つまりそれは。

「もしそうだったら、星先輩引越すことになるかもって話だ」

美雪ちゃんの目をじっと見つめる。美雪ちゃんも私を見つめ返す。冗談を言っている顔ではなさそうだった。

校舎を挟んだ向こう側にあるグラウンドから野球部の連中が何か叫んでいる声が聞こえる。笑い合いながら帰宅していく生徒たち。いろいろな考えが頭の中をぐるぐるまわる。

私の事じゃない。私がどう思つかじゃない。星くんがどう思っているかだ。

美雪ちゃんがずっと立ち上がった。

「そろそろ、練習が始まるみたいだ」

見ると、柔道場の入り口に見慣れない制服を着た生徒たちが集まっている。

「るる、またあとで連絡するから。この話はまだ千春にも話していないんだが、私たちは相談に乗るからな」

ベンチの上で固まっている私の肩をぽんと叩くと、美雪ちゃんは柔道場の方へ向かって去っていった。

十四 その話、もっと詳しく聞かせてくれないかしら

美雪ちゃんはおそろしい勢いでスプーンを口に運んでいく。激辛一〇〇倍カレー、大盛りだ。

白い皿に盛られたその毒毒しい真っ赤なルーは、見るだけで口の中がひりひりしてくる。

「美雪ちゃん……それ、辛くない？」

サンドイッチを手で弄^{いじ}りながら聞く。どうにも食欲が湧かない。

「全然辛くないぞ、もっとトウガラシがきいててもいいくらいだ」

「ほんとに？ レシピ変えたのかな。前は辛くて一口も食べきれなかったんだけど。……ちよつと、一口食べさせてよ。辛いものなら食べられるかもしれない」

「おう、いいぞ」

美雪ちゃんはカレーをスプーンに乗せて私の口元に持ってくる。

「やめたほうがいいんじゃないですかあ？」

千春が心配そうな顔で言うが、あまりにも美雪ちゃんがおもしろいそうに食べるんだもん。

「ぱくり、と食べてみた。

「……ん、おいしいかも」

「だろう？」

美雪ちゃんが得意満面の笑みで言う。別にあんたがつくったわけでもないでしょうに。というか調理したのは厨房の佐々木さんか店長だ。

「うん、ちよつと味変えたみたいね。けっこうおいしいわ。うちの店にしちや上出来よ。あとからじんわり辛いのがくるのが……あほふあら、ふふええふあらいのやがあ」

目の前が真っ赤に染まった。脳天に暴虐なまでの刺激がずんと突き刺さる。口の中が唐辛子、体中の毛穴という毛穴がぶわっと開いて汗が噴き出る。

かつら！！！！辛いどころじゃない、痛い。なんだこれなんだこれなんだこれ、前よりひどくなっているんじゃない？

「み……みひゅ！」

自分のグラスの水を飲み、美雪ちゃんの水も飲み干し、ついでに千春の水も飲んでもまだ足りない。割るほどの勢いでグラスをガツ！と握ると立ち上がったウオーターサーバーめがけて走りだした。別の席にすわっていた背広姿のおじさんふたりが私を見て目を丸くしているが気にしちやいられない。金曜日の夜だ、お客が障害物のようにわらわらといやがる。小さい子供を轢きそうになるがそれを華麗なサイドステップでかわし、サーバーに抱きつくようにしてグラスに水をなみなみと注ぐ。席に戻る余裕なんかあるもんか、その場でぐいぐいと飲み干し、もう一杯！一心不乱に水を飲む。

「……お客様？」

ぱあつと花が咲いたかのようなにこやかな笑顔で店員——そらさ——が話しかけてきた。

「申し訳ございませんが、他のお客様のご迷惑になりますので、ご飲食はお席に戻ってからお願いいたします」

いつものごとく、見る者をとろけさせるような笑顔だけど、今は辛さで脳細胞が溶けてしまいそうがかまっていられない。もう一度グラスに水を注いで、腰に手をあてて飲み干す。はあ、と大きく息を吐くと、私はそらさんの顔を睨みつけた。

「……店員さん。あの激辛カレー、いろいろと間違っていると思うんですけど」

「あらお客様。カプサイシンはダイエットにとっても効果的なんですよ。お痩せになりたい方にはとてもお薦めで……」

そらさんはちらりと私の胸を見る。

「いや、もう少し、ふくよかな方がいいかも……」

「ふ。ふふふ。店員さあん。私は今お客様でございますのでそのような失礼な発言はおよし遊ばせ」

「あら、申し訳ございません、お客様。ちなみに本日のお勧めは鳥の胸肉の豆乳シチューでございます」

「あら、店員さん、胸の大きくなる食べ物を勧めてくださってありがたいことですわ。でもわたくしまだじゅうななさいでございますのでこれからまだまだ大きくなるんですよ。二十歳超えた年増みたいになんて努力はまだ必要ございませんの、おほほ」

強がりだ。花の十七歳、もう成長期は終わっちゃった……。

「私は二十歳超えてからも少し大きくなったわよ」

「まじで!？」

ちよつと希望が出てきた。私のおっぱいだってこれから花開くかもしれない! そらさんはそんな私の表情を読み取ったのか、
「まじで。……まあその話は後でゆっくりしてあげるよ。ほんとに他のお客様に迷惑になるからさ、もう少し静かにお願いね」

そう言つてそらさんは軽やかな足取りで去つて行く。その後ろ姿を見ながら、くそ、なんで私はああいう風にいい女に生まれてこなかったんだ、と自分の遺伝子を呪った。

席に戻ると、美雪ちゃんは激辛カレーをあらかた食べ終わつていた。

「よくそんなの食べられるわね」

あきれ顔でそう言つと、美雪ちゃんは、

「このくらい、なんともないぞ。るるは少し、食が細すぎやしないか。だから出るところが出てこないんだぞ」

「余計なお世話よ」

美雪ちゃんは自分の胸を触りながら言う。

「私などもう少し、小さければ良かったと常々思っけどな。柔道には邪魔だ、これ」

「……………へえ」

人の無自覚な自慢話ほど聞いていて腹がたつものはない。あんたの胸の大きさの話なんか聞きたくないっつーの。興味ないわ。

「筋トレして胸に筋肉をつけるとサイズが大きくなつてさ、その度

にブラ買わなきゃいけないからめんどくさいんだぞ」

「……………へえ。興味あるわね、その話、もつと詳しく聞かせてくれないかしら」

「ちよつとお、二人ともお、今日はそういう話をしにきたんじやないでしょお」

千春が口を挟んできた。

そう。今日は、胸を大きくする話をしにきたのではなかった。もっと重要な話、いや胸の話も超重要だけど、私のバストアップよりも少しだけ重要な話をしなければならなかったのだった。そのために、美雪ちゃんの合同練習が終わるまで、このレストランで客として時間をつぶしていたのだ。その美雪ちゃんはこのここに来るなり、一番早くできるメニュー（つまりカレーだ）を頼んで話をする暇もなくぱくついていったのだったが。

「で、美雪ちゃん。昼間の話の続きなんだけど」

「……………ああ、星先輩の話だったな」

「私もせんぱいにさっき聞いたんだけどお、星先輩引っ越しちゃうかもっていうのはほんとなの、美雪？」

千春もこの話はまったく知らなかったようだった。

「ああ、星先輩の友人の彼女つてのが私をストーカーしてるんだが、そいつに聞いたんだ」

「……………彼氏持ちにもモテるんだ、美雪ちゃん」

「なんでもそいつが言うには男と女は別腹だそうだ」

「なんだかいろいろツツコミたい気がするけど、今はスルーしよう。美雪ちゃんは続けて言う。」

「そいつが言うには、星先輩のおかげでとんでもない迷惑を被_ひってるそうだ」

「は？ 星くんがその子になんで迷惑をかけるのよ」

「そいつの彼氏、つまり星先輩の友人だな、その人は野球のスポーツ推薦でうちの高校に入学したんだ」

「ふーん、で？」

「星先輩とは共通の友人を通じて知り合ったそうなんだが、問題は
その彼氏とやらは越境入学でな、ちょうど寮の空きもなかったんで
アパートで一人暮らししてるそうなんだ」

「えー、うらやましいなあ。高校生で一人暮らしとか、あこがれる
う」

千春がうつとりとした顔で言う。その一瞬後に、はっとした表情
を見せた。

「え、ちよつと待ってよ、美雪、そのあんたのストーカーの女はそ
の彼氏とつきあつてて、彼氏は一人暮らしで……？」

美雪ちゃんは少し頬を染めて頷いた。

「そう、まあ、なんというか、アパートに遊びに行つては仲良くや
つていたそうな」

「くわー。私に関係ないとはいえ、なんとなくむかつくわね、不潔
だわ」

私は思わず顔をしかめる。

「それでだ。ここからが本題だ。そのストーカー女がな、愚痴ぐちるん
だよ。ここ何日か、彼氏の友人が泊まりに来ていて遊びにいけない
と――」

「は？」

えーと、この話の流れからすると、その泊まりに来ているって友
人が、つまり、

「星くんってこと？」

「そうだ」

美雪ちゃんは神妙な顔つきで答えた。

「えー、どうしたことよ、美雪」

「私もどういふことかわからなかったからな、詳しく話を聞いたん
だが――」

美雪ちゃんの話の総合すると、こうだ。

しばらく前から星くんの両親は仲が悪かったそうだ。ほとんど家

庭内別居状態で、顔を合わせれば喧嘩の毎日。父親が母親に暴力をふるうこともあったそう。それで星くんは父親と大げんかをし、取っ組み合い寸前までいって、家を飛び出した。そして一人暮らしをしている友人のアパートに転がり込んだ、というわけだ。星くんの両親はもう離婚寸前で——もしそうなると星くんは母親についていくかもしれない、そしてその母親の実家は——九州だそう。なんてこと。ここから千キロも離れたところじゃない。

そんなそぶり、学校でもバイト先でも全然見せていなかった。家庭内の不和の話は、私にとってはあまりにも身につまされて——言葉もなかった。

手元の干からびたサンドイッチをつまむと、なんとはなしに少しちぎって口に運ぶ。おいしくない。サンドイッチが乗った皿を押し出すようにして自分から離す。

「るる、食わないのか？　じゃあ私がもらう」

美雪ちゃんが私の皿に手を伸ばしてサンドイッチを取るとぱくりとかぶりついた。この気を使わない振る舞いが逆に心地いい。

「よく食べるわね……」

「来週辺りから減量に入るからな。食えるうちに食っておく」

「美雪が減量始めると不機嫌になるから嫌なんだよね」

千春はフライドポテトを口にせつせと運びながら言う。この姉妹は本当に食欲も性欲も旺盛だ。ちなみに減量するときは二週間で4キロも体重を落とすそうだが、そのノウハウは普通の女子高生にはあまりにもハードルが高くてやる気にもならない。

「で、せんばあい、どうするんですか？」

「どうするもなにも……」

「だって、話を聞くと、星先輩、るるせんぱいとかどうこうするような状況じゃないみたいじゃないですか。るるせんぱいはどうしたいのかなって」

「どうするもこうするもないわよ。私のことは一時、棚上げ。明日

は土曜でしょ、星くんもシフト入ってるはずだから、会ったときに直接話を聞いわよ」

「聞いて、どうするんですかあ？」

「家出なんて、ただごとじゃないわよ、星くんはそんなこと軽々《けいけい》にする性格じゃないし。私にできることがあればやる、なければ、……応援することくらいしかできないわね」

早くもサンドイッチを咀嚼そしゃくし終わった美雪ちゃんが、

「応援するって、家出をか？」

と言ってグラスの溶けかけた氷を口に含む。ぼりぼりと氷をかみ砕く音が聞こえた。まったく、おっさんみたいな女子高生だ。

「家出を応援するわけじゃ、ないわ。でもさ、話を聞くだけのことなら、できそうじゃない？ ……それくらいのことしかできないし」

今日も星くんは学校でも普段通りだった。何か変わったことがあるようには見えなかった。落ち込んでる様子もなく、本当にいつもみたいに、「はっは」とあの笑い声をあげていた。両親とつかみ合いの喧嘩までして家を飛び出しているのに。ということは、隠しているんだ。あの透明感のある表情の向こう側に、真っ暗な感情を。それを知りたい。

星くんのつらさを、共有したい。

わかっていて、これは私のエゴだ、自分勝手だ、星くんと一体感を感じて私自身が気持ちよくなりたいだけ。

それでもいい。

つらい思いをしている星くんの隣にいるのは、私でありたいと思う。

困っている星くんを助けるのは私でありたいと思う。

これは、あの時からの、私の意地みたいなもんだ。

目の前のグラスを手に取り、氷を一気に口の中に放り込むと、美雪ちゃんの真似をしてそれをかみ砕いた。冷たい。

「とにかく、明日バイトの時に捕まえて話を聞いわ」

私がそう宣言すると千春と美雪ちゃんは顔を見合わせて、こくり

と頷いた。

十五 いっぱい食って早くでかくなりなよ

次の日の土曜。

星くんは、いつも通りの笑顔でバイトに来た。

バイトが始まる五時までまだ時間がある。私は裏口——今日もそらさんのバイクが停まっていた——に星くんを呼び出すと、

「ねえ、星くん。昨日、千春の妹の美雪ちゃんに聞いたんだけど、家出してるんだって？」

とずばりと訊いた。

星くんは困ったような顔をして、私を見る。イタズラをして見つけた子供のような、少しはにかなだ笑みすら浮かべて、

「はっは、美雪さんもおしゃべりだな……。小島は、どこまで知ってるんだ？」

「どこまでって……星くんのご両親が、その、あんまり仲良なくて、星くんとお父さんが喧嘩して、美雪ちゃんのストーカーをやってる女の人の彼氏のアパートに転がり込んでいて、もしかしたら星くんが九州に引っ越しちゃうかもってところまで聞いた」

一気にそうまくし立てた。

「ストーカーって、あの子、美雪さんのストーカーなのか？ たまに葉村の家の郵便受けに直接手紙を入れていくとかは聞いたことがあるが」

「こわっ！ まじで？ っていうかやつぱり完璧にストーカーじゃないの。いや、そうじゃなくて、とにかく、家出してるってのはほんとなの？」

星くんはもぞもぞと学生服のボタンを弄っている。むしろそこじやなくて今日も開きっぱなしのズボンのチャックをどうにかしてほしいけど、まあ、いい。それよりも今日は授業も補習もない日はずなのに、学ラン姿というのはやっぱり家出中、ということなのだろうか。

「そうか……あの子、そういう感じの子だったんだ……なるほどね……」

などと呟いて、私の質問になかなか答えてくれない。答えにくいのはわかるけど、ちゃんと星くんの口から聞きたい。

「ね、お願い。教えて。ほんとなの？」

私は星くんの顔を見上げる。星くんは私の視線をしっかりと受け止めた。星くんの深い輝きを放つ瞳が私を見つめる。確かめようとしている目だと思った。私が、ただの興味本位で聞いているのか、星くんのことを思っ^て聞いているのかを。

私は齒を食いしばって唇を引き締め、目に力を入れる。両手でスカートの裾をぐい^っと握った。しわになってもかまやしない。

しばらくそのまま見つめ合う。もちろん甘やかな雰囲気なんてそこには少しもなく^て、傍^{はた}から見たらむしろ睨^{にら}み合っているように見えただろう。

星くんの瞳に吸い込まれてこの世から消えてなくなってしまうんじゃないかという錯覚^{おちいり}に陥りかけたとき、星くんはゆっくりと頷いた。

「ああ。そうだ。今、家を出ているんだ。美雪さんに聞いたとおりのことだと思うよ。友人のアパートに転がり込んでいる」

「どうして、」

答えはわかっているけれど、どうしても聞かずにはいられない。

「どうして、私に相談してくれなかったの？」

私はなにをわかりきったことを聞いているのだろう。答えは簡単だ。そんなことを相談するほど星くんは私のことを近しく思っていないのだろうし、相談してもどうしようもないと思ったのだろう。星くんには私よりももっと信頼できる友人が何人もいて、実際のその友人たちは私よりももっと星くんのためになる行動ができるのだろう。

星くんにとっては、星くんの問題は、私には関係のないことなのだと思う。星くんの世界と私の世界は深い深い崖で切り離されてい

るのだ。崖ならまだ救いがある、お互いの姿が遠くにでも見えるから。高い高い壁なのかもしれない。相手の顔すら、存在すら見えない。その壁を必死の思いでよじ登り、声を出して、相手に自分の存在を知ってもらおう。私はここにいるのよ、と。私がここにいる。気づかなかったかもしれないけれど、私があなたが一番近くにいたい人間なんだ、って。

人を好きになるっていうのは、つらいことばかりだ。毎晩毎晩ひとり布団の中で身もだえして泣くばかり。苦しくて苦しくて誰かに隣にいてほしい、でもその隣にいてほしい誰かが隣にいないから苦しいのだった。

「どうして、私に相談してくれなかったの？」

同じ台詞を繰り返す。どうしてもなにも私に相談する義理がないからだ。なぜこんなことを聞いてしまうのだろう、私は馬鹿なのだろうか、みつともない。

でも、星くんはそんな馬鹿な私を一言で切り捨ててするような人ではなかった。

一瞬、顔をしかめたが、でも次の瞬間にはもういつものあの晴れやかな笑顔になった。

「はっは、男が女子にこんな情けないこと、相談できるか。心配かけるわけじゃないからな。小島、悪かったな。心配かけたみたいだ。おれは、大丈夫だから。なんとかしてみせるよ」

「でも……」

「小島」

星くんはいつものように人を包み込む暖かい陽光のような笑みを私にくれた。

「ありがとうな」

「……ごめん。こんなこと、聞いて」

「いいよ。じゃ、これから仕事だ。落ち着いたら、今度は小島にも状況話すよ。今の高校に入るのにも結構苦労したんだ、九州に引っ越しなんていまさらできないよ」

その言葉にほっと胸をなでおろす。が、

「……しないで、すめばいいんだけどな」

星くんが付け加えたその一言に、私はぎくつとして、背筋が震えるのを感じた。

今日のバイトはいつもより早く、八時には終わった。やはりお客さんが少なくて、私と千春は予定より一時間早くタイムカードを切らされたのだった。今は店長が厨房に入り、そらさんと星くんが店に出ている。

星くんが仕事終わるまで待とうかと思ったけれど、今はこれ以上話すこともなさそうで、それにあまり詳しく聞くのも怖かった。いつものソファでのおしゃべりもほどほどに、私たちは帰ることにした。

私はなんとなく口を開くのもおっくうで、無言で着替える。そんな私にちらちらと視線を送りながら、千春もやはり無言で着替えていた。

「せんばい、今日、どうします?」

「今日は、帰るわ」

千春の家に泊まらないで、そのまま自分の家に帰る、という意味だ。少し、そっけなかったかもしれない。目も合わせずに、自分でもわかるくらい沈んだ声だった。

「そうですか……」

私の様子をどう解釈したのか、千春もそれ以上はなにも言わずに髪をとかしている。私たちはまた無言になって着替えを続けた。

着替え終わった私たちは、バックヤードのドアを開け、従業員通用品口に向かう。通用品口に行くには厨房の端を通らなくてはいけなくて、店長に挨拶をしようと思ったとき、業務用のでっかい冷蔵庫の向こうからその声が聞こえてきた。

「店長、お願いします。今日、泊めてくれませんか?」

星くんの声だった。

「はあ？ 星、お前なにを言ってるんだ、まっすぐ家に帰れよ。っていうかおれんちに来てなにをするつもりだ、おれの体でも狙ってるのか」

私たちは思わず冷蔵庫の陰に隠れる。そういえば、店長もアパートで一人暮らししているはずだ。

「まさか。……実はいま、家に帰りたくなくて……実際、家出してるんですけど」

「家出って、じゃあお前いまどこで寝ているんだ」

「友達のアパートに泊まらせてもらってたんですけど、ちょっと今日明日は用事があるみたいで、駄目なんです。おれの知ってる人で他に泊めてくれそうな人っていうか一人暮らししている人、店長くらいしかいなくて……」

「……親とケンカでもしたか」

「まあ、そんなとこです」

「親は知っているのか、おまえがその友人とこに泊まっているってこと」

「知らないはずですよ」

「じゃあ、おれのとこに泊まってもいいぞ。ただし、おれからお前の親に電話して、了解が得られればな」

「そんな！ 駄目です、秘密にしてほしいんです」

店長の声に怒気が含まれる。

「おい、星、お前はガキだからわからんかもしれんが、親が心配していないわけがないだろう。おれだってまだガキだが、一応世間的には責任つてものがあるんだ。いいか、今日は仕事が終わったら家に帰れ。なにがあつたかは知らんが、親に文句があるなら納得いくまで話し合いでもケンカでもすればいいだろう。言いたいこと言っても縁が切れないのが家族のいいところだからな。ちゃんと家に帰れ」

「でも……」

「でもじゃない。今日、どうせほかに行くところないんだろ？」

じゃあ、家に帰ればいいだけの話だ。というか、家出とは。お前も若いんだな、まあ無茶やるのはいいが、今ここで家に帰ると約束できないならおれはお前の家にこれから電話して迎えにきてもらおう」

星くんは言葉につまったようだった。

「約束できるか？　今日は家に帰る、って。それなら、明日早めにくればおれの休憩時間にも相談に乗ってやるよ」

「……………」

しばらくの沈黙が続く。

「家に帰ると、約束、できるか？」

店長が重ねて聞く。少しの間を置いて、

「はい」

と星くんが答えるのが聞こえた。

「よし、じゃあ仕事に戻れ。ほら、ちょうどお客さんがきたぞ、今フロアにはそらしかいなくなってるじゃないか、お前も行け」

私たちは店長たちに気づかれないようにそっと店を出た。

千春の家までの帰り道。私たちはいつものように二人並んで歩いていた。秋の夜風は冷たくて、少しでも暖まろうと私たちは身を寄せ合う。

「店長もケチですよ、一晩や二晩くらい黙って泊めてあげればいいのに」

千春はさつきからぷりぷりと怒っていた。

「心が狭いんですよ、店長は。あとで自分に責任がかかるのが嫌だから星先輩を突き放したんですよ」

「そんなことないでしょ、店長の言ってることは正しかったと思うわ」

そう。店長は正論を言っていた。それに、自分の雇っているバイトの高校性を親にも黙って家に泊めるなんて普通に考えたらできるわけがない。

「いいえ。違いますよ。店長はケチなだけです。自己保身ですよ、

あんなの。星先輩のことを真剣に思っていないんです」

そうだろうか。親と折り合いがつかなくて家を飛び出すなんて、星くんのわがママかもしれない、という考えが頭を掠^{かす}める。親とは、話し合えるなら話し合うべきなんじゃないだろうか。

黙っている私にいらしたのか、千春は絡めている腕に力を込めて言った。

「星先輩が困っているんだから、店長も少しは助けてあげればいいのに。一人暮らししているんだから一晩泊めるくらい、なんてことないと思いますよ」

「でも、今日は星くん、家に帰るって約束してたじゃない。……いいことだと思っわ、家出なんかするより、家に帰るのが一番いい選択よ」

千春は私の顔をちらりと見て、言いたいことがあるのか口を開きかけ、そしてやめた。

うん、千春が言いたいことはよくわかる。わかるけど、ここで逃げ出しちゃったら星くんも帰る場所がなくなっちゃうかもしれない。星くんがそんな風になるのだけは、見たくなかった。

千春の家の前で別れ、私は自分の家に帰ってきた。

木造の古い借家。雨風さえしのげれば住むところに文句を言うつもりはない。自分の部屋もあるし、むしろ感謝すべきだろう。

立て付けの悪い玄関の引き戸をガラガラと開けると、家に入る。

居間からテレビの賑やかな音が聞こえてくる。まっすぐ二階の自分の部屋に行ってもよかったが、喉が渴いていたので居間の向こう側にある台所に向かった。

居間では母親が焼酎の水割り片手にぼんやりとテレビを見ていた。私の中学時代の学校指定ジャージを着て、髪はぼさぼさ、化粧のケの字もなく、意識があるのかないのかわからないような濁った目でただ画面を見つめている。

私が居間に入っても視線を向けることすらしない。いつも

のことだからどうってことないけど。冷蔵庫の中からペットボトルを取り出すと、振り返って母親に声をかけた。

「お父さんは」

「今日から一週間出張」

「弟は」

「部屋。ごはんは食べさせた」

はい、本日の親子の団らん時間終了。私はペットボトルを持って自分の部屋に向かった。

自分の部屋に入る前に、隣の弟の部屋を覗く。十時をまわっていないくらいの時間だから、まだ起きているだろう。小学六年生で部屋持ちだなんて、贅沢なやつめ。

とんとん、とノックすると、「いるよー」と弟の返事が聞こえた。最近は何となく入ると本気で怒ることがある。そろそろ悪いことでも覚える頃なのだろうか。あの変態姉妹には近づけないようにしないと。弟の成長は嬉しいけれども、お姉ちゃんとしては少し寂しい。昔みたいにうるさいくらいまとわりつくくらいがかわいかったのに。

がらりと戸を開けてずかずかと入り込む。学習机に、本棚。畳には漫画本やら教科書やらが乱雑に散らかっている。

弟は布団の上でだらしなく寝っ転がって漫画本を読んでいた。

「まだ起きてたの」

「明日は日曜だもん」

「ふん、宿題はちゃんとやった？」

「半分くらい。明日やるよ。姉ちゃんこそ、ちゃんと勉強してんのかよ。おれと似て頭悪いんだからちゃんと勉強しないと留年するぞ」

最近は何となく口をきくようになった。背も伸びてきて、もう少しで身長も抜かれそうだ。まだ声変わり前で子供らしい高い声なのに、背伸びした男言葉で話すのが可愛い。

「来年になったらちゃんと勉強するわよ」

弟は漫画本を放り投げると、私の顔をまじまじと見る。

「なによ」

「あーあ、もつと美人の姉ちゃんなら良かったのに」

「鏡を見て、自分の顔と同じ血の人間が美人になるかどうかよく考えなよ」

「……………ああ、無理だな、そりゃあ。納得した」

二人で顔を見合わすときとすと笑った。

「今日は千春ねえちゃんのところは行かないの？」

「あんたがちゃんとごはん食べてるか心配だからね」

「食ってるよ、今日はサンマの焼いたやつで三回おかわりした」

「いっぱい食って早くでかくなりなよー」

「わかってるよ、そのうち姉ちゃんよりも背高くなるから」

「楽しみにしてるわ。…………じゃ、私はお風呂入って寝るから、あんたも早く寝なさいよ」

そう言って、弟の部屋を出て行く。普段ならもう少し馬鹿話をしていくのだが、今日はなんだか疲れた。

自分の部屋に入って部屋着に着替えると、お布団を敷いて横になる。

ペットボトルを額に当てる。冷たくて、気持ちがいい。そのまま、目をつむる。

今頃、星くんは自分の家に帰っているだろうか。親とちゃんと話し合いしただろうか。

他人の家庭のことなんて、口を挟む権利はないけれど、できれば仲直りしてほしい。同じ家の中に住んでいて、単語でしか会話が成立しない母親と、暴力しかコミュニケーションの取り方知らない血のつながっていない父親と、「おれと姉ちゃんは似ているから」が口癖の、父親違いの弟。弟は中学に行ったら柔道部に入っ
て体を鍛えて私を父親から守ってくれるらしい。ふっと口元がゆるむ。楽しみにしてるからね、弟よ。

星くん、わかるんだ。私は、わかる。家になんか、いたくない。親とは言葉が通じない。ケンカしたって、無駄。私だって、一番デ

ンパってたときは、同じようなことしてたんだから。今だって何かと理由をつけて千春の家に泊まりにいくし。私が帰ってこないときは弟が千春の家に電話して確認するのが習慣になっちゃった。

だんだん自分が眠りに入っていくのを感じる。駄目、お風呂入って洗濯もしないと……。しかし、襲ってくる眠気には勝てず、意識が遠くなっていく。

——今頃、星くんは数日ぶりに帰った自分の家で、何をしていた何を考えているんだろ……。

星くんの顔を思い浮かべながら、私は深い眠りに落ちていった。

十六 救えるし、救われる

結局次の日、正午近くまで寝ていた私は、同じく情眠をむさぼっていた弟をたたき起こしてご飯を食べさせ、シャワーを浴びて洗濯物を済ました。気がついたらもう三時だった。

弟は友人との約束があつたらしく、先月の給料で私が買つてあげた携帯ゲーム機を大事そうに抱えて家を出て行った。目を覚ましたときには母親はもうどこかに外出していた。どこに行ったのかは知る気もない。

いつも通り、千春を家まで迎えに行き、そのままバイト先のレストランへと歩いて向かった。

「結局、星先輩はちゃんと家に帰ったんでしょうかねえ」

歩きながら、千春は独り言のようにつぶやいた。私と同じセーラー服に短くつめたスカート、光沢を帯びた長い髪がさらさらと風に揺れている。くそ、反則だ、確にかわいいと認めざるを得ない。美雪ちゃんだつてよく見たら彫刻みたいな整った顔してるし、この姉妹は元はいいんだよなあ。中身はアレだけど。

私は昨日の星くんと店長のやりとりを思い出しながら答えた。

「店長に約束したんだから、帰ったんじゃないの」

そもそもほかに行くところなんかないだろう。親にも秘密で泊めてくれる知り合いなんて、高校性にはなかないない。

「まさか、星先輩、家に帰れなくて、それで泊めてくれる人もいなくて、公園とかで野宿してたりして……」

「あんたは馬鹿なの？ こんなに寒くなってきたのに野宿なんかしたら死んじゃうわよ」

「……死んじゃってたりして……」

私は千春のお尻を思いつきりひっぱたいてやった。

「んなわけないでしょ！」

とはいうものの、なんか嫌な予感がする。胃の下あたりがむずむ

ずするような、いてもたってもいられないというか、不快な感じ。

「生理ですか、せんぱい？」

今度は膝蹴りをお尻にかます。千春は「うふや！」と奇妙な声を出してうずくまった。そのまま、ふるふると震え始める。私は慌てて千春の隣にしゃがみこみ、顔をうかがう。目に涙をためていた。

「ちょ、ちよつと大丈夫、千春？ そんなに強くしたつもりはなかったんだけど……痛かった？」

「……の、」

「え、なんだって？」

「お尻の、……」

「うん？」

「穴に、直撃した……」

「………うん、それは、ごめん、大丈夫？」

千春は頬を紅く染めてふるふると子犬のように小刻みに体を震わせ、涙で潤った目で私を見る。

「せんぱあい」

「ん、どうしたの、病院行く？」

「さすって。そしたらなおるかも」

「へ」

「お尻の穴。直接。そしたらなおります」

「………」

「なんなら、なめても」

「………」

私はものも言わず、すつくと立ち上がると千春をその場に置いたまますたすたと歩き出す。変態って、インフルエンザとどっちが感染力が高いのだろう。これから千春と会ったあとには、うがいと手洗いをしっかりしなきゃ。

「うわひどい。せんぱいはあたしをお嫁に行けない体において、逃げるんですね」

「心配しなくてもあんたは嫁に行けるわよ、そのうち」

千春は妙に男受けがいいからね。心配すべきなのは私の方だ。十年後、私はちゃんと誰かのお嫁さんになれているだろうか。……誰か、っていうより、星くんの……。

店の看板が見えてきた。裏口にまわる。そらさんのバイクがいつもの場所に停めてある。今日は夜から雨が降る予報だ。雨でもバイクには乗るんだなあ。

そういえば、傘を忘れた。しまった。くそ、バイト終わるまで天気がもてばいいけど。

通用口のドアを開け、中に入る。厨房が見える。大学生のアルバイトの人がせわしく鍋を振っていた。外から見たときにホールには石川さんがでていたのを見たから、店長は休憩中か。そらさんはもう仕事終わったのだろうか。

それよりも、星くんはちゃんときているだろうか。まさか、千春の言ったとおりで野宿して、どこかで冷たくなっていたりして……。そんな碌ろくでもない想像に背筋を凍らせる。気が急せいて、バックヤードへのドアをあける。

真っ先に目に飛び込んできたのは星くんの後ろ姿だった。

ほっとすると同時に、あれ？　と思う。

学ラン姿だ。今日は日曜日。休みの日でも好んで制服を着る私たちとは違って、星くんはいつもラフなジーンズ姿だったはず。それが、学生服を着ている。ということは、昨日も家に帰らなかったんだろっか……。

「お前は考えが浅いんだよ」

店長の低い声が聞こえてきた。怒気を含んでいる。

「だいたい高校生が家出するっただけでも氣にくわねえのに」
バックヤードの中へとおそろのおそろ入っていく。店長の声が厳しい。前にバイトの人が店のレジからお金を盗んだときと同じ声。空気がぴりぴりしている。千春は私の背中にかくれるようにしてついてきた。

「……おはようございます……」

「おう、おはよう」

店の制服をだらしなく着崩してソファに座っている店長は私たちを一瞥して挨拶を返すと、また怒りをあらわにした声を出す。

「何を考えているんだ。馬鹿にもほどがあるだろう」

店長が机をどん！と叩く。その大きな音にびびって体がびくんとはねた。

店長が視線を向けているのは、星くんではなくて、そらさんだつた。

そらさんは短く切り揃えてある自分の手の爪を眺めながら、これもまた不機嫌な顔をしている。爪を触ったり、柔らかくウエーブのかかった自分の髪の毛を指に巻き付けたりして、なんとなく落ち着きがない。

「あのお……、何か、あつたんですか」

千春が私の背中から顔だけ出しておびえた声で聞いた。

「葉村には関係ない」

「千春さんには関係ないよ」

店長とそらさんが同時に答えた。ぴしゃり、という感じだ。

そのぶつきらぼうさになんだかむっとしたので、このまま引き下がるのも腹が立つし、思いつきで聞いてみる。

「……痴話げんか？」

「ちがうぞ」

「そつかもね」

今度はばらばらの答え。っていうか、

「え、痴話げんかなんですか？」

「ちがうって、あほかお前は」

「そつかもね、この人、私に嫉妬してこういうこと言ってるんだよ」
店長がそらさんをにらみつける。え、なに、この二人そういう関係？ おもしろそう。千春も少し瞳を輝かせている。他人のこういう話ほど楽しいものってないのよね。これは聞きたい。

「店長ってそらさんときあつてたんですかあ？」

興味津々《きょうみしんしん》といった風情^{ふうせい}で千春が聞く。

「あほか」

吐き捨てるように店長が言う。

「この人ねえ、」

そらさんがにやにやと意地の悪い笑みを浮かべて言う。小悪魔な女の表情ってこういうのを言うんだろうなあ。しかも男を指して「この人」って言う様子に、なんていうんだろ、なんか色気みたいなものを感じてしまう。

「私がさ、昨日男を家に泊めたんだよ。そしたら気に入らなかつたみたいでキレてるんだよ。これって嫉妬だよな」

げげ。なんておもしろそうな話。これは是非聞きたい。

「そんなに悔しかったの、私がほかの男を連れ込んだのが」

「別におまえがだれを連れ込もうとおれには関係ねえよ。だがな、それがうちのバイトの高校生となると話は別だ」

……………は？

なにに、そらさんが男を家に泊めて、その男がうちのバイトで、しかも高校生で、それでそれで、うちには男子高校生のバイトって一人しかいないはずで……。

「はああ……………っ!?」

頭が真っ白になる。中身だけじゃなくて髪の毛も真っ白になるんじゃないかというほどの衝撃を受けた。思わず、叫んでいた。

「なんだそのおもしろくない話！」

千春も私の背中で固まっている。

あまりのことにほんの数秒、世界の時間が止まったかと勘違いするほどすべての思考が停止した。私はかろうじて正気をとるもどすとびしっ！とそらさんを指さす。

「え、昨日、そらさんが男を家に泊めて、」

私に指さされたそらさんはにこり、とほほえみかけた。気のせいかいつもより肌がぴかぴかと輝いていてきれいだ。

「で、その泊まった男ってのが……」

その指さした腕を勢いよくそのまま星くんに向ける。星くんは思ったより近くにいて、ギャン！　っと私の裏拳（というよりも手刀か）があごに入った。あまりにもきれいに決まって、星くんは「いってえ……………」とうめいてよろよると壁によりかかり、そのままずると座り込んだ。

「小島は攻撃力高すぎるだろ……………」

などとあごを押さえながら私に非難の目を向ける星くんを改めてビツシイ！　と指さし、

「え、え、え、星くんが、そらさんの家に、泊まったって、こと？　あれ？　そらさん実家じゃなかったっけ」

「実家だけど離れに住んでるんだよ、私」

そらさんはすました声で答える。

うわ、頭の中が。頭の中が、ぐるんぐるんとまわる。妄想スパーク。お風呂上がりのそらさん、バスタオル一枚で星くんの前にたち、それをはらりと外し、「初めてでも怖がらなくていいよ、全部教えてあげるから……………」といってその抜けるような白い肌の肢体をさらし、そして……………。

いやいやいやいやいや。なにそれ。なんだそりゃあ。星くんの初めては私の初めてと婚前一体じゃない渾然一体となっっているいろいろ化学反応をおこして新郎新婦紹介の時に千春が「るるせんぱいと星先輩は高校生の時からずっとつきあっててえ、いつ結婚するんだろうと思っていたらいつのまにか二人の愛の結晶がるるせんぱいのおなかに……………」いやいや、待て、できちゃった結婚ってみつともなくね？　やっぱり、こう、順番は守って、…………いや、違う、今はそんなことを妄想するときじゃない、え、え、え、え、え、でもさー、いや、大丈夫、星くんはそんな誘いに乗るような男じゃない、でもでも、男はみんなすけべだっていうし、いやちよつと待て、ここはひとつ、本人に確認したほうがいいわよね、なんとかこう、遠回しに聞いてみよう、うん、遠回しに、婉曲に、さりげなく。

私は星くんを指さしたまま、口をひらいた。

「ヤツたの!？」

バックヤードを静寂が包み込む。

星くんも自分を指さしている私をぼかん、と眺めている。

「……………せんばあい、その質問はちよつと……………」

千春のかすれた声が聞こえた。

それで我にかえったのか、星くんは壁に手をつき、ゆっくり立ちあがりながら、

「ま、まさか……………おれは別に、なにも……………」

「あれ、るるさん？」

背中からそらさんの声が響いてくる。軽やかな、鈴を転がすかのような心地よい声、だけど、その声が紡ぐ言葉は、

「いい年した男と女が一晩ベッドをともしして、何もなかったって考える方が不思議だと思うよ？」

とてもじゃないが看過できない内容だった。

私は鬼の形相となって振り返り、つかつかとそらさんの方へ歩みより、そして、……………。

「せんばあい、ちよつと落ち着いて、まず落ち着いて!　ね?　ね?」

後ろから抱きつくようにして千春が私の体をおさえにかかった。

「まあまあまあ、小島、お前はちよつとここに座ってる、な?　今話を聞いているところなんだから」

店長が私の肩を両手でつかみ、強引にソファに座らされてしまった。その隣に千春も座る。千春が私の背中をぽんぽんと叩いた。

……………すこし、落ち着いた。

店長は大きなため息をひとつつくと、スツールに座り直す。

「まあ二人が言うにはだ、」

店長がテーブルの上にあった缶コーヒーをすすする。

「そういうことはなかった、と。まあ証明のしようもねーけどな、本人たちがそう言うならそうなんだろ、さっき星に誘導尋問してみただけどひっかからなかったしな」

「夏雄さん、あの質問はエロかった。ぜんぜん誘導になってないよ」
そらさんが呆れた声で言う。どんな質問だったんだ。

「いや、どっちにしたって星は正直なやつだから、目をみりゃわかるさ。だがな。問題はそこじゃないぜ」

缶コーヒーをたん！ とテーブルの上に置く。

「なにかあったにせよ、なかったにせよ、一晩泊めたって時点でまずい。しかも家出少年だぜ。星のためにもならない、おめーのためにもならない、そんなことをしたんだ。さっきおめーが言った通りだぜ、いい年した男女が同じ屋根の下で寝たって聞きゃあ、だれだってそういう想像をする。星も傷つけるし、おめーだって傷つくことだろ、そりゃ」

「だって、かわいそうだったんだもん」

そらさんはぶくつとふくれる。かわいらしいしぐさなのだろうが、今の私には殴りたくなる顔でしかない。

「変な噂たつたらもつとかわいそうだろうが。おい、星、なんでお前昨日家に帰らなかったんだ、おれと約束しただろう」

店長は鋭い目で星くんを見た。星くんは少しおどおどと、でもきっぱりと答える。

「……どうしても、帰りたくなかったんです」

店長は鼻で「ふん」と笑うと、携帯電話を取り出した。

「おめーの年で家族するにやまだちょっとはえーよ。もつとケンカしてこい。親に文句あるなら酸欠でぶつたおれるまでそれを叫んでこい。家庭のことに口出しする気はねーが、若いうちにそれをやっておかないと、一生後悔するぞ」

そして、にやりと笑って続けた。

「お前は間違っている。家出なんざ男のやることじゃねえ。男なら闘ってこい。……今からお前の親を呼ぶ。今日は仕事はいいから帰れ」

「いや、それは待ってください！」

「ちよつと夏雄さん、星くんを親に売る気？」

「店長、ひどくないですかあれ？」

皆の声を無視するように店長はすうっと大きく息を吸うと、

「うるさい！」

と一喝した。びりびりと空気が震えるほどのその大きな声に私たちは全員びくりとして黙り込んだ。

「まだ自分の人生も背負ってないガキどもが、他人の人生に口だすもんじゃねえ」

千春は反論しようとしたのか口をぱくぱくさせていたが、そこから言葉がでることはなかった。私もさっきまでのそらさんへの怒りもどこかにふきとんで、ただ黙ってなりゆきを見守ることしかできない。なにより、私も、星くんは家に帰るべきだと思うのだ。私の家みたいにしてがばらばらになる前に。

「何事だいつ、今の大声？ 田倉沢くん、混んできたからホールお願いしたいんだけどっ！」 石川さんがひよい、とバックヤードに顔を出した。そして星くんの姿を見ると、そばに歩み寄る。

石川さんは、小さな体を大きく動かして、バシッ！ と星くんの背中を叩いた。

「おう、少年！ 男ならね、逃げて勝つより、闘って負ける方を選びなっ！ いまのあんたはかつこわるいよ！」

結局、星くんは母親の運転する車に半ばおしこまれるようにして帰って行った。ぺこぺこと店長に頭を下げる星くんのお母さんはいぶん小さく見えた。初めて顔を見たが、挨拶するところではない。星くんはずっと仏頂面だった。星くんの意には反していただろうが、これでいいのだ、と思った。

家の中が熱いうちはまだいいのだ。親の怒鳴り合う声、弟の泣き声。大声を出さなきゃいけないとしても、まだ、コミュニケーションがある。それが過ぎると、今度は家の中が冷たくなっていく。凍りついたかのように寒々とした居間。交わされる言葉は何もない。家の中にいるのに、気温が氷点下になったように寒い。凍え死なな

いように、弟と二人、部屋の中で抱き合って寒さに耐えなければいけないのだ。

私は逃げた。弟を捨てて、いつも逃げた。コミュニケーションを捨て、ケンカをすることも放棄し、いつも千春の家に逃げていった。最初の頃は弟のことも心配で、千春や美雪ちゃんに泊まってもらうこともあったが、父親が殴るのはいつも私が母親。どうせ弟は殴られない。明らかにいやがっている親の視線を二人に我慢してもらうのも悪くて、結局私一人千春の家へ逃げていくのがいつものことになった。

私は女で、力もないし、なにより根性もなかった。逃げるのがベストの選択だと、それ以外にできることはなかったと、今でも思っている。

もう、あきらめた。修復不可能ならば、はやいところ脱出したい。好きな男を見つけて、つきあって、その人と結婚して、家を出たい。それが、まだ女子高校生の私にとっての、一番の夢だった。

星くんは闘うのだろうか。石川さんは言ってた、男なら闘って負ける方を選ぶ、って。男に生まれていたら、私だってもっと闘えたのだろうか。

星くんのいなくなったバックヤードは寂しく思えた。店長もホールに出ている。肩越しに伝わる千春の体温が私を安心させる。

「るるさん」

そらさんがソファの後ろから、声をかけてきた。そのまま、私と千春の肩に手をまわし、抱くようにして耳元で囁いた。

「ごめん」

「……そらさんが謝るのは私じゃないでしょ、星くんとその親じゃないですか」

刺とげを含んだ声で答える。

「さつき、ちゃんと謝ったもん。あとは、るるさんに謝りたいと思っ
つて」

「私は、関係ないですから」

努めて平然と答えた。千春はテーブルの隅を見つめたまま、なにも言わない。

「関係ないことないよ、るるさんをやな気分にしたことを謝ってるんだから、るるさんのことだよ」

「別に、嫌な気分になんて、なっていないから」

そんな私の声を無視して、そらさんは続けた。

「昨日ね、星くんを私の部屋に泊めたのはほんとう」

「聞いてませんから！」

「聞いて。星くんが寝ているベッドに下着で潜り込んだわ」

私と千春の体が同時にこわばった。

「……………それを私たちに聞かせてどうしようってんですか」

喉の奥がつまって、声がスムーズに出てこない。

「でね、私は星くんをうしろから抱きしめた」

聞きたくない。いろんな意味で聞きたくないよ。これ以上聞いたら涙がでそうだ。

「そしたらね、泣いていたんだよ」

「星くんが、ですか？」

「違うんだ。私がだよ。私が、泣いてたの。石川さんに聞いたと思うけど、去年、私が好きだった男の人がね、いなくなっちゃったんだ。それで、ずっと寂しくて、どうしようもなくて、毎日泣いて、で、どうでもいいやって。だれでもいいやって。抱きしめてもらえれば楽になれるかなって思って、女の子に慣れていなさそうな星くんを選んだ。だって、初めての女になれば少しは記憶に残るでしょ？ 私は私に触れた男が私のこと忘れるなんて許せないもん。だから、好きでもなんでもなかったけど、興味もなにもなかったけど、全然なんとも思っていなかったけど、星くんを誘惑した」

「……………」

「いっぱい、涙が出てきてとまらなくなつて、そしたらね、笑うわよ、星くんがこう言ったの」

「なんて？」

「少しはこういう期待もあった、って」

……笑えないんですけど。なんだそれ、男ってやっぱりみんなそうなのか。百年の恋も冷めそうだ。体が脱力する。

そらはそんな私の考えていることがわかっていているかのように、くすくすと笑って言う。

「大丈夫だよ、いい男だよ、星くんは。高校生のまだガキな男がよ、この私に背中を向けて、ぶるぶる震えながら説教したんだよ。年上の女の人ならおれのこと慰めてくれるかな、っていう期待があった。でも、違ったって。こんなの、全然、いいことじゃない。人は人を救えない。誰かの助けを求めようとしたおれが間違ってた。だって、このまま身をまかせても、明日になればまた現実が待っているだけ、お互いに嫌な思い出と自己嫌悪しかのこらないじゃないですか、って。だけど、私は今寂しいし、あなたも今寂しいでしょ、って言ったら、今ここでエッチなことしても、明日になればもっと寂しくなると思う、だって。他人に助けを求めても、結局自分がしつかりしてなきゃなんにもならない。そらはおれのことを救うことはできないし、おれもそらを救うことはできない。もっと苦しめることしかできない。だから、ごめんなさい。女性の家に泊まりに来た自分が馬鹿だった、って。耳まで真っ赤にしながら言うの。ふふ、おもしろかった。もっと泣いちゃったけどね」

そらはソファから離れる。

「だからね、安心して。星くんのファーストなんかは、何一つ盗んじやないから」

「別に、私のものじゃないですから」

「私には権利がないけど、あなたにはあると思うんだよ」

「なんですかそれ」

「だって、」

そらは艶やかな唇を半月状にして、それこそお月さまのような柔らかくて優しい笑顔で言った。

「私は星くんのこと、好きでも大事でもないけど、あなたは星くん

のことを好きで大事なんでしょ？ 見てればわかるもん。他人は他人を救うことは決してできないけどさ、」

そらさんは栗色の髪をかき上げる。

「大切に思っている人だけは例外。救えるし、救われる。昔の私がそうだったから」

よく見ると、そらさんの瞳には涙がたまっていた。

私は黙って、となりの千春の腕をぎゅうっと強く握った。

十七 今日はどうしても駄目なんだ

眠れない。

布団の上でごろごろと転がり、目を閉じてはいるものの、なぜか全然眠れなかった。時計の音だけがkachakachと耳障りに聞こえる。

布団にもぐりこんでからのくらの時間がたっただろうか。眠れないときには星くんとのおれやこれやの妄想をしたりするうちにいつのまにか眠っているものなんだけど、もちろん今日に限ってそんな気にはなれない。

車に乗り込む寸前、星くんはちらりと私を見たような気がした。

あの表情。

こまったような、動揺しているような、そんな表情。

家庭の問題を同級生に知られ、見られるっていうのが恥ずかしかったのかもしれない。気にしなくてもいいのに。

なぜなら――。なぜなら、あのとき、星くんだって私の一番恥ずかしかった現場に居合わせたんだから――。

「あー、もうだめだ。眠れない！」

私はあきらめて飛び起きる。

枕元の携帯電話を手に取り、時間を確認する。

午後十一時三十分。

はあ、とひとつため息をつく。

こんな風に一人で悶々と考え事をしていても、心は絶対に晴れない。

布団から抜け出るとやけに寒い。あと一月もしたら雪の降る季節になる。ぶるつと体が震えた。寒いのは苦手だ。寒いのは、大嫌いだ。寒いのは、寂しい。当たり前だけれどもこの部屋には私しかいなくて、私の体温しか温かいものはない。この部屋の寒さに私の体温はどんどん奪われていくような気がする。そのうち一人、この部屋で凍り付いて死んでしまいそうだ。

ちらりと廊下に出る引き戸を見る。

数年前まではこんな気分になるたびに弟の布団に潜り込んだものだった。今日はもう寝ているかな。あの子、一度寝ると起きないから、久しぶりに『夜這い』してやろうかしら。でも最近、本気でいやがるからなあ。それに、あの子にとつてもあんまり姉がべたべたしてくるのもよくない気もする。でもなあ。寒いしなあ。

私はそつと立ち上がると、そろりそろりと戸を開き、廊下に出ると弟の部屋の前に行く。戸に耳をつけると、弟のかわいらしいびきがかすかに聞こえてきた。

よし、弟よ、愛する姉のために人間カイロになっておくれ。

引き手に手をかけ、音がしないようにゆっくりと開け——ようとしたが、開かない。一センチほどひらいたところで何かがガチリ、と音を立てて引っかかる。

「ん、なんだこれ……」

隙間からのぞき込むと、引き手の高さの辺りになにか金属のようなものがある。

「これって……」

鍵？

……弟よ、いつのまにこんなものを取りつけたのだ。そんなに朝起きたときに姉が隣に寝ているのが嫌か。まあ、いつも「うぎゃああ！」と叫び声をあげて拒否反応を示していたような気はするが。

「……今度、いかがわしいエロ本とかないか調査してやる……」

思春期を迎えようとしている弟が暗黙にプライバシーを主張している態度に心の底から寂しくなつて、嘆息する。

あきらめて自分の部屋に戻り、再び布団に潜り込むが、とてもじゃないけれども眠れない。

私は思う、人は一人で眠れるようにはできていないんだ。だつて一人で横になつているとこんなに寂しいんだもん。誰かの心臓の音を聞きながら眠る心地よさや安心感に比べたら、一人で眠るつてのはまるで死後の真つ暗闇な世界にひとり投げ出された気分だ。死ん

だことないから死後の世界があるかどうかも知らないけれど。もしかしたら私は千春や美雪ちゃん以上に、すけべなのかも。これでもし、もし彼氏とかができたら――星くんときあえたりなんかしたら、全力で星くんの腕にぶら下がり続けるんじゃないかと不安になる。不安になつて、いやでもそんな都合良く星くんときあえるわけがない、きっと私はこのまま一生、さみしいさみしいと言いながら一人で生きていくんだ、とも思つて泣きそうになる。

駄目だ。ほんとにろくでもない考えばかりがぐるぐると頭の中をまわる。

私は携帯電話を手に取り、メールを打ち始めた。

『今から泊まりに行つていい？』

ちよつと非常識な時間だけれども。千春のお母さんには合い鍵まで渡されていつでも泊まりに来てでもいいって言われてるし。甘えすぎかな。甘えすぎだと思う。もしかしたら依存しちゃっているのかもしれない。でも、どうしても、甘えたい。だって、寂しいから。

私は携帯電話を握りしめて、千春の返事を待った。

日付はもう変わってしまった。

夜の街、夜の道。

街灯の明かりはかすかで心細い。離れたところにある幹線道路からの自動車の走る音もまばらで、街全体が眠りにについているのが感じられる。

なるべく広くて明るい道を通りたいが、そうすると警察に補導されるかもしれない。私が警察官だったら問答無用で補導する。なにせ、夜中の十二時過ぎに、セーラー服を着て通学鞆を持った女子高校生性がひとりで歩いているのだ。どう考えても怪しいし、危険だ。こんな格好なのは明日直接学校に行くつもりだから。いやあ、私も不良になっちゃったなあ、とひとり笑った。

台所のテーブルに弟の朝ご飯のおにぎりとメモをおいてきた。

メモの内容は『お前に閉め出されたから千春の家に行く』

母は昼にでかけたきり、帰ってきていない。いつものことだから気にもしない。明日の朝、一人で朝食を食べて一人で戸締まりをし、学校へ行く弟のことを考えると、胸が痛む。家族といえども結局は自分の都合が最優先。小さいころはそんな人間には絶対にならないと誓っていたのに、今の私は本当に最低だと思う。

住宅街の細い道路を歩いて行く。思った通り、肌寒い。夜空を見上げると、街の光に照らされたどんよりとした雲が見える。雨のにおいがした。ほどなく、降ってくるだろう。

田舎町とは言え、こんな夜中にひとりで夜道を歩くのは怖かった。今まで何度となく通った道なのに、昼と夜とでは雰囲気が全然違う。家々から漏れてくる光も既にある。冷たい風にさらされてさわさわと泣く、住宅に植えられた木々の葉ずれの音と、虫たちの歌声だけが聞こえてくる。街灯の光に私の影は長くのび、ずっとついてくるその影だけが私の随行者だ。背筋がぶるつと震えたのは寒さのせいだけではないだろう。

結局、千春からメールの返事はこなかった。しびれをきらして電話をかけてみたが、コール音がなるだけで出ない。美雪ちゃんにも電話してみたけどこっちは電源が入っていなかった。ほんとに駄目なときは『ごめんなさい。今日は駄目です』と返事してくるはずだし、寝てしまっていて気づいていないだけだろう。なら、忍び込むまで。中学生の頃にも同じようなことやったことあるし。というかその頃はそもそも携帯電話なんて持っていなかったから、事前に連絡することの方がまれだった。いつもこの道をこうして今と同じくおびえながら歩いたものだ。

街灯に照らされた小さい児童公園が見えてきた。その隣に千春の家がある。二階の千春の部屋には明かりが灯ともっていた。あんにやろう、電話にも出ずになにしているんだろう。きつと、エロ漫画でも読みながら眠りやがったに違いない。……まさか、エロ漫画を『使つて』いる最中に眠りこんだ、なんてことはないでしょうね。嫌よ、親友があられもない姿で右手をおかしなところにつつこんだまま寝

てる、なんてのを見るのは。

近づく、当然だけど一階は明かりもなく、真っ暗だ。ご両親と小学生の一番下の妹はもう眠っているんだろう。玄関から入るのはまずいかもしれない。公園の柵を乗り越えて裏口から入った方が階段に近い。

鉄棒とブランコ、それに砂場があるだけのこじんまりとした公園に入る。だれもない公園は見るだけでぞくりとするほど恐怖心をおおるものがある。街灯がスポットライトのようにブランコを照らし出している。よくよく目を凝らすとそこに座っている少女の幽霊の姿が見える、気がしてなるべく視線をブランコから外す。公園の前で車にはねられて死んだ女の子がいて、夜になるとその霊が血まみれで真っ赤に染まった服を着てブランコに乗っている――。そして、「ねえ、一緒に遊ぼうよ」と誘ってくる……。そんな噂が小さいころあった。幼いときにすり込まれた恐怖心つてもものは、成長しても脳みそのどこか片隅にしぶとく生き残るのだった。夜中の一人歩きはできても、こういう幽霊とかお化けとかそういうのは苦手なんだ。あれ、私ってば、か弱い女の子っぽくて少しかわいいかも。もう半ば葉を落とした桜の木向こう側あたり。その柵を乗り越えればもう千春の家の裏口だ。

私はゆっくりと桜の木に近づいていき――、

「ひゅっ！」

そこに、人影が見えた。

髪の毛の長い、少女の影。血で真っ赤に染まった服――。

心臓が跳ね上がった。飛び上がった心臓が口から出てくる心持ちがして、一瞬にして呼吸困難。酸素不足で頭がクラクラする。

反射的に逃げようとするが、足がガクガクして動かない。ま、ま、ずい、これは、漏らしそうなほど怖い……。膝の力がかくん、と抜けてその場にへたり込みそうになった。だけど目はその幽霊に釘付けになってしまって、視線をそらすことができない。逃げよう、とするけど腰から下の感覚がなくなつて動かせない。や、やばいやば

い、これ私漏らしてないだろうな。どさつ、と自分のお尻が地面につく音がした。ずいぶん重量感のある音だ、ダイエツトしなきゃいけないだろうか、じゃなくて今はそれどころではない。

その幽霊はふいにこちらに走り寄ってくるかのように身を沈め――沈めて、そのままその場に座り込んだ。

静けさが訪れた。

どこからか、虫たちが奏でる音色が聞こえてくる。

しばらく、その影を見つめ続ける。秋の風が私から体温を奪っていくほどに冷たい。その冷たさが私の頭も冷やしてくれたようで、だんだんと冷静になってきた。

ほんの数メートル先にいるその人物の来ている服は、血で真っ赤に染まったというよりも、なんだか見慣れたえんじ色をしている。左胸のあたりには白い名札のようなものが縫い付けられているようにも見える。これは、どうみても、私も中学時代に三年間着続けたあの学校指定の体操着……、そしてそれは私のかわいい親友がパジャマ代わりに着ているものでもあって、つまり、目の前のこの少女は、

「……千春？」

なんとか立ち上がり、その人物に近づいていく。ほんの一瞬だけ、厚い雲から月が顔をだしたようで、さあっと私たちを優しい光が包んだ。

そこにいたのは、やっぱり、千春だった。

「……ぷっ……」

顔を見合わせ、二人同時に笑い出す。どうやら、お互いにお互いを幽霊だと思ってびりまくっていたらしい。

「せんぱい……。どうして、ここに……？」

「泊めてもらおっかな――って思ってたさ。あんた、携帯にも出ないし。なにやってんの、こんなところで」

「ああ、そういえば携帯、リビングにおきっぱなしでした……。ちよっとまってください、今、なんか腰が抜けてたてないんですっ」

「だらしないわねえ」

「せんぱいだつていまそこでへたりこんでたくせにい。絶対に幽霊だと思つたでしょお」

「何を言ってるんだか。私はちゃんと、あんただつてわかつていたわよ。わかつた上で、ちよつと脅かしてやろうかなつて」

と言いながら、ふと不安になった。通学鞆で隠しつつ、右手でもぞもぞと探る。

よかつた、漏らしてはいないみたいだ。千春を幽霊と見間違えて粗相したりなんかしたら末代までの恥といつかもうお嫁に行けないちらりと千春の様子を窺うと、やつも手を下半身に当てて、「よかつたあ……」などと言っている。お前もか！

お互い気まずくなつて黙り込んでしまったけど、いつまでもこんな薄気味の悪い公園にいたくない。深呼吸して気持ちを落ち着かせると、千春に聞いた。

「で、こんな時間に外に出て何してたのよ。コンビニにでも行つてきたの？ その格好で？」

「えーと、いやあ、ははは……」

千春は横を向いて私と目を合わせようとしない。どうも、怪しい。「なんかあつたの」

「いや、別に、なにもないですけどお、えーと」

「いいから家に入れてよ。今日、泊まっていっていいでしょ？」

「え……うーん……」

歯切れが悪い。そりゃ、こんな夜中にいきなり連絡もなしでおしかける私の方が非常識なのだろうけど、なにか態度がいつもと違う。「なに、都合、悪いの？」

「ちよつと、今日はお客さんが来る予定で……」

「これから？ こんな時間に？」

おかしい。もう夜中の十二時をまわっているのよ？ 私以外にこんな迷惑な時間にくる人間なんて、いないはずだ。

そこに、千春の家の裏口が開き、人影が見えた。目をこらす必要

もないほど、その金髪ベリーショートは夜でも暗闇の中で目立つてすぐわかる。

「おい、千春、なにやってんだ。何か話し声がしたが、もう来たのか……？ ……あっ！」

いつもの通り、かわいらしいパジャマを来た美雪ちゃん^{いぶか}が訝しげな声を出してやってきて、私を見るなり、絶句した。

「なによ、美雪ちゃんまで。そりゃ、夜中に突然来ちゃって悪かったけど……。なに、ほんとに今からだれか来るの？」

おかしい。美雪ちゃんまで私と目を合わせない。嫌な予感がして後頭部がぴりぴりした。

「ねえ、千春、美雪ちゃん。今日、ちょっと泊めてほしいんだけど……。駄目？ 誰が来るの？」

「いや、それはだな、うーん、ちょっと、今日は駄目なんだ。これから大事なお客さんが来る予定でな……」

「誰よ」

「いや、それがまあ、るるの知らない人なんだが、はは、悪いけど、今日はどうしても駄目なんだ。あれか？ またるるの親父が暴れるのか？」

美雪ちゃんは実に困った顔をして私を見ている。んー、そんなに迷惑だったか。さすがにこの時間だし、迷惑には違いないだろうし。でも、やっぱり、なにかおかしいよ。

そのとき、私の背後からじやりつと砂を踏む音が聞こえた。

十八 逃げよう

なんとなく、振り向かないでもわかった気がした。顔を見なくてもそれがわかる。どう考えても、なにがどうなってもここにいるはずのない人だけれど、だけど、この四年間というもの、ずっとずっと渴望し続けた人の気配には、あまりにも敏感になりすぎて、その人が伝える空気みたいなものが見えなくても私には感じられる。

なぜここにいいのかはわからない。わからないけれど、私の背後に、ほんの数メートルのところに、その人はいるのだった。

千春と美雪ちゃんは顔を凍り付かせている。その理由は、なんとなく把握できた。まさかこの時間になつて私が突然訪問してくるとは思っていなかったのだろう。『このこと』が私にばれたら、まずいのだろう。そりゃ、まずいよ。『こんなこと』、私に黙ってするなんて……。

私は、ゆっくりと、振り向いた。

そこにはいつも通りの彼がたっていた。暗闇に溶けそうな学ラン姿。いつも通り、シャツがだらしなく出ている。いつも通りの、笑顔。いつも通りの――

「お、小島もいるのか。悪いな、夜中に急に。今晚は世話になるぞ」
星くんは小首をかしげて私に屈託のない笑みを見せた。

「なんで――」

「いやあ、参ったよ、殴り合いの喧嘩までしたのはいいけど、せつかく帰ってきたのにまさか今度は家を追い出されるとは思わなかった」

「なんで、星くんが……」

「まったく親父のやつ、本気で殴りやがって……。ちょっと、顔にあざができてしまった。助かったよ、今日はほんとに泊まるどころがなかったんだ」

「なんで星くんがここにいるの？」

星くんは『ん?』というように私の顔を見て、そして得心したような表情を見せた。

「ああ、小島はもしかしたら知らなかったのか? いやあ、親と結局喧嘩になって、家を文字通り蹴り出されたんだけど、今日はほんとに泊まるどころがなくてなあ。一昨日まで泊まってた友達のアパートはそいつの彼女に追い出されちゃったし。そこでたまたま美雪さんから電話があつてな、泊めてくれるっていうからさ」

昨日はそらさんの家に泊まり込んだんだもんね。それで、下着姿で迫られて、なんか格好いいこと言つて断つて、なのにもまた今度は自分が告白して振られた女の家泊まりに来たつてわけ。

ばつ々つ々つ々つつかじゃないの!?

なに考えてるの。星くん、考え足りなすぎだよ!

それに。それよりも。

私は、親友とその妹の顔をにらみつけた。

「あんたたちさ、何考えてるわけ?」

「えつとお、あの……」

「美雪ちゃん。星くん電話かけたつて、どうして?」

私は今どんな顔をしているだろうか。きつと見るに堪えないほどの醜く歪んだ怒りの表情だと思う。

「いや、ほら、昨日言つたさ、ストーカー女、いるだろう? 自分の彼氏のアパートから出て行け! って星先輩の前で大暴れしてしまつてなあ。その場にたまたま私も居合わせたものだから、あれからどうなったかは気になるところだろう?」

「それで? それがなんで星くんを家に泊めるつて話になるの?」

美雪ちゃんが口をひらきかけたときに、千春が割り込んできた。「だつて、どこにも泊まる場所がないつていうんだもん。うちはほら、よくせんぱいも泊まりにくるじゃないですかあ。そういうのに慣れてるし、こんな寒い季節に外で眠つたら死んじゃいますよお」「私が泊まりにくるのと男の人が泊まりにくるのとは違うでしょ」

「同じですよ、困っている人がいたら助けたいです」

なぜかは知らないけれど、私の顔から『ざん!』と音を立てて血の気が引いていくのを感じた。それとは逆に、体は熱くほてってくる。

「でもさ、それならさ、別に千春の家じゃなくてもいいじゃん？」

二十四時間営業の店もあるし」

「だってえ、星先輩、もうお金ほとんど残ってないっていうし」

「ならお金だけ貸してあげればいいじゃん」

「せんぱい、それっておかしくないですかあ？ お金だけ貸すなんて、冷たいじゃないですか」

「どう考えたって泊めるって発想の方がおかしいわよ」

「おかしくないです」

「おかしいわよ」

「おかしくないです!」

突然始まった口喧嘩に、星くんは驚いたのかおろおろして、仲裁に入る。

「ほら、二人ともやめろよ……。おれが迷惑かけたのは確かだし、謝るから」

「けど私たちは口論をやめない。少なくとも私はやめる気がなかった。だって、今千春が言ったことは、つまり、——私には受け入れがたい言葉だったからだ。」

「おつかいでしょ、仮にも男よ、しかもあんたに一回告白してる男よ!？」 なんて泊めようとかいう発想出てくるかなあ?」

「困ってる人なら関係ないです、そんなの」

「あんたほんと星くんと一晩過ごしたいだけなんじゃないの? なんてお金貸してハンバーガーショップとかネットカフェじゃ駄目なわけ?」

本気でそんなことを思っている訳じゃない。そうじゃなくて、千春、つまりあんたが言いたいことっていうのは……。

「じゃあせんぱい、言わせてもらいますけどお、」

やっぱり言わないで。

「せんぱいがお父さんに殴られたり、」

言わないで。ごめん。私がエキサイトしすぎたかもしれない。

「お母さんにいじめられたりしたときにい、」

千春、ごめん、私が悪かったから、それ以上はお願いだから言わないで。

「せんぱいにお金渡してその辺で朝まで時間つぶしてって言えばよかったんですかあ？」

「それとこれとは、違うでしょ、だって、星くんは男で……」

「でも同じ状況ですよ、るるせんぱいも星先輩も私にとっては同じ大事な先輩です」

同じなんだ。

「困ってたら同じように助けなきゃ変でしょお」

そう、私は助けられていたんだ。

「おんなじかわいそうな境遇なんだからあ、」

私はかわいそうだった。

「同情して、泊めてあげるのは、」

同情されていたんだ。かわいそうに、っていう同情。

「当然のことでしょお。るるせんぱいじゃなくても同じですよお」

つまるところ、私は同情されていたのだった。あらあらかわいそうね、と捨てられた子犬を拾うように、千春は私を拾ったのだ。私は千春にとつて特別な存在でもなんでもなくて、ただ同情されていただけだった。私はその同情を友情だと勘違いして、そんなことは全然思いもしなくて、今まで親友だと思い込んでいたのだった。そうではなかったのだ。私は家族に捨てられたかわいそうな犬で、千春は私を不憫^{ふびん}に思っ^て拾ったのだ。たとえそれが私ではなくても、哀れみの感情で星くんでもだれでも拾ったに違いないのだ。

私の両目から涙があふれ出てくる。

星くんを自分の家に泊めたら私がどう思つか、なんて千春は考えていなかった。だって、別に私という人間だけが特別じゃないから

困っている人なら助けるから。私じゃなくても良かった。

悲しさと寂しさと怒りの感情で私はパニックになった。

本当は、星くんのことはあきらめていた。好きな気持ちは本物で、顔を見るだけで胸が高鳴って、考えるだけで顔が赤くなる、その気持ちはたしかに私の中に実際にあるけれど、色仕掛けしたり、作戦たてたり、そんなことまでして千春のことを好きだっという星くんの気持ちを無理矢理私に向けさせるつもりは、なかった。

だって、星くんにとって私は特別な存在じゃないから。策を弄^{さう}してつきあえたとしても、星くんが私という人間そのものを好いてくれた結果だと思える自信はなかった。そんなの、意味ない。

私は、誰かの、特別になりたかった。千春の特別の親友でいたかった。私の恋を、千春が応援してくれた。千春が私のためにいろいろやってくれた。それが嬉しかった。きっと、私は千春にとって必要な人間なんだと思い込もうしていたのだった。

私は鞆をどさり、と地面に落とした。

両の拳を握りしめる。目の前の親友だと思っていた女の子を見た。

「迷惑だったんでしょ」

ぼつり、と言う。

「はあ？ なんですか、それ」

千春が私の涙に動揺したのが、震える声で聞き返してきた。

「おい、るる、あんまり変なことを言うな」

美雪ちゃんが声をかけるが、

「美雪ちゃんだって同罪じゃない」

と私は言い放ち、千春に向かって一步一步前へ進んでいった。

「あんたはさあ、私が中学でいじめでクラスの人に無視されてたとき、ずっと上級生の私のクラスに来てくれてたじゃん？ あれってどういう気持ちでやってたの？」

確か、その頃からだ。私のことをるるちゃん、じゃなくてせんぱい、と呼ぶようになったのは。

「あれはあ、ただせんぱいと話すのが楽しかったから」

「嘘よ、あんた自分のクラスにも友達いっぱいいたじゃん。わざわざ私の教室くる必要なかったじゃん」

「……それは……」

「かわいそうだと思うたから？ 同情したの？ いつも一人で寂しそうだったから、よしよしかわいがってあげるよって？」

「そういうんじゃないですよ！」

「私が父親に殴られて逃げてきたときもかわいそうだったよね」

「それは……まあ……」

「母親が男のところ遊びに行つてずっと帰つてこなくて寂しくて怖くて泊まりにきてもらったときは？」

「……せんぱい、今そんな話……」

「私が好きな人のことで泣いたときは？」

そう、この二人の前で泣いたこともあった。

「おい、るる、お前今日おかしいぞ。ちよつと落ち着け」

美雪ちゃんの言うとおりだった。私はおかしい。でも、今日だけおかしいわけじゃない。ずっとずっとおかしかった。家庭も、私自身も。それを自分が壊れてしまわないぎりぎりのところで、なんとか踏みとどまって毎日を生きてきたのだ。わかっているんだ。私が、悪い。まだ小学生の弟と二人、あの台風が吹き荒れてるみたいな家で生きてきた。私は強くならなければならなかった。でも、なれなかった。どうしてもなれなかった。

やさしいお母さんがほしかった。悩み事を相談できる姉、価値観を共有できる親友、私を守ってくれる、だれか。

全部、全部、千春にその役をおしつけた。

目の前の、ひとつ年下の、まだ高校一年生でやさしいお母さんとおもしろいお父さんと、強い妹を持つこの少女に、私の存在の価値を保証してもらいたかった。

自分には生きる価値があるって、そう思いたかった。

でも、千春はきつとそれが私ではなくても、小島るるではなくても助けの手を伸ばしてくれたに違いなかった。

わがままで、自分勝手に、自己中心的な感情だと理性ではわかっている。でも、この感情は抑えられない。

全部、嘘だった。

あの日の昼休みも。

あの日の放課後も。

あの日、部屋で一緒に泣いてくれたことも。

私が特別だったからじゃなくて、ただ単にかわいそうだったからなのだ。

私が恋をしている男の子、千春に恋をしている男の子を平気な顔で自分の家に泊めることができるなんて。

そらさんが言ってたじゃないか、年頃の男女が一晩一緒に過ごしたら何もないほうがおかしいって。なにもないのはわかっている、それについては千春も美雪ちゃんも星くんも信用している、でも普通なら、私の立場からみれば「何かあった」と考えるのが当然じゃないか。私にそう思われてもいい、とそう思ったのだ、千春は。

「もう、いいよ……」

気がついたら、そう呟いていた。

「今日は、もう帰る」

そう言って、踵きんすをかえす。うつむいて、千春の顔も美雪ちゃんの顔も、星くんの顔も見ずに、一目散に公園から出て行こうとした。「せんぱあい、ちよつとまってください、せんぱい、今日は疲れてるんですよ、せんぱいも泊まっていてくださいよ、ほら鞆、忘れてますよ、ちよつと待ってくださいよお。わけわかんない、意味わかんないですよお」

千春が追いかけてきて、私の肩に手を置いた。その手を乱暴に振り払う。その拍子に、私の右手が千春の顔に当たった。千春はむつとした顔をして、私の制服の袖を握り、ひっぱった。

「なにするんですか、とにかく今日は泊まっていてください!」「帰るってば!」

千春の手をふりほどこうとぶんぶん腕をふりまわす。柔道経験者

の千春の手は私の力くらいじゃ全然外すことができなくて、それがまた腹ただしくて、思わず、もう一方の手を振り上げた。

ばちん。

千春のほっぺたがとてもいい音をたてて、赤く染まった。

千春は信じられないという顔で、呆然と平手うちされた自分の頬を押さえた。そして握ったままの私の制服の袖をさらに強くぎゅうと握ると、

「なにするんですかあ！」

猛然と、私につかみかかってきた。

「なにつて叩いてやったのよ、うるさい、離して、離してよ！」

いつか星くんが千春に告白した夜と同じように、私たちはばちんばちんとたたき合った。あのときと違うのは、私の心の中の、手加減とか、遠慮とか、そういう私の心の中の枷みたいなものがなくなっていたことだった。あのときは確かにあった、相手を信頼した上でのじゃれ合いみたいな感覚が、まったくない。

もう、千春なんて、いない。

そう思った。

私はずっといない子で、親からも、クラスメートからも、千春からも、必要となんてされてなかったんだ。もちろん星くんだって私のことなんとも思っていない。

じゃあ私もいない。

なんにもいない。

あんたたちなんか、いなくてもいい。

世界の全部がひっくりかえってぐちゃぐちゃになってみんななくなってしまうばいのに。

私は右手の拳を痛くなるくらいに握りしめる。

目の前にはものすごい形相で、私の胸ぐらにつかみかかっている私の、世界で一番大切だった、一番大切だと思い込んでいた、女の子の顔。

その瞳は私をしつかりと見つめ、何事かを叫んでいるように見え

たけれど、声なんかもう聞こえてこなかった。すべてが遠くに感じられた。

右手を思いっきり、振り上げると、正確に目の前の少女の顔面にたたきつけた。

あれ。

私、なにやってんだろう。

これ、夢なんじゃないかな。

目の前の少女は声もあげずに真後ろにふっとんで行って、不格好に背中から地面へと倒れていった。

「おい！」

そばからもうひとりの少女の声がする。その少女は私に飛びかかってくる。

私はよくわからなくなったまま、その少女にもまた拳を向けた。

目の前の少女は私の拳をまるで魔法のようにするりとよけると、

両手で私の胸をどん、と押した。

体勢を崩してよろめく私に、今度はからだごとぶつかってくる。

視界の中で薄暗い景色がぐるりと回転して、次の瞬間には地面に顔をたたきつけられていた。

ほっぺたがじんじんと熱い。

私は地面をかきむしるようにしてもがくと、なんとかバランスをとって立ち上がる。

「やめろ、やめろってば」

男の人の声が聞こえる。この声は誰だっただろうか。

もう、なんでもいいや。

全部なくしちゃった。私が馬鹿で弱くてプライドだけは高くて価値のない人間だったから、今まで生きてきてやっと手に入れたと思ったもの、全部なくしちゃった。

頭が少し、くらくらとする。

もう一度、目の前の少女に飛びかかろうとして、たくましい腕に体ごと押さえつけられた。

ぽつり、と頬に冷たいものを感じる。最初は涙かと思っていたけれど、ぽつり、ぽつりと何度もそれは私の顔をぬらし、ああ、雨だと気づいた。

そのとき突然、玄関のドアが開く音が聞こえた。

そして、聞き慣れた声。

「ちよつと、あんたたち、夜中になに公園で騒いでいるの。喧嘩してるの？」

その場にいた私たち全員がぎくりとする。

さつき、私を突き倒した少女が舌打ちをしたのが聞こえた。

「やばい、星先輩のことは母さんには秘密なんだよな……」

私の体を押さえていた腕から力が抜ける。逆にその腕をつかむと、私は小さくその人に囁いた。

「逃げよう」

私たちは走り出す。

夜の住宅街を、星くんの腕をしっかりと握って、私は逃げ出したのだった。

雨はだんだんと強くなり、私たちの体をぬらす。その水滴はとも冷たくて、冷えた心はいっそう寒く感じた。

逃げ出したい。もう、こんな世界から逃げ出したい。

私は無我夢中で走った。

手に伝わる星くんの体温だけが、これが現実だということを私に教えてくれていた。

十九 私、星くんが好き

静かに、立て付けの悪い玄関の引き戸を開けた。

思った通り、母親の靴がない。まだ帰ってきていないようだ。

いつのまにか雨は土砂降りになっていて、私たちもすっかり全身びしょ濡れになってしまった。スカートが腿^{もも}にはりついて気持ちが悪

い。靴をそろえることもなく脱ぎ捨てる。暗くて星くんの顔はよく見えない。口をひらくのもおつくうで、私は黙って星くんのそでを握って階段をのぼり始めた。星くんも素直についてくる。古びた階段はぎしぎしと音をたてているはずだが、雨が轟音とともに降り続いていて私の耳には届かなかった。

私の部屋の中まで星くんをひっぱっていき、

「ここで、ちよつと待ってて」

とだけ言ってお風呂場にはバスタオルを取りに行く。ついでに棚をあさる。あった。まだ開封されていない父親の下着。それに、洗濯されてきれいにたたまれたパジャマ。

あとは、なにか温かい飲み物がほしいけれど、とりあえずは着替えが先だろう。

自分の部屋に戻る。電灯をつけるのを忘れていた。

星くんは真つ暗な部屋の入り口の近くでがたと震えながら立っていた。

「これ」

バスタオルを渡して部屋の蛍光灯をつける。

「ああ。ありがとう」

星くんはバスタオルを受け取り、顔や髪を拭き始める。

「これも。着替えて」

父親の服を渡す。

「ごめんだけど、ここで、着替えちゃって。……それとも、お風呂

沸かそうか？ 風邪引いちゃうよね？」

「はっは、大丈夫だよ、女子の家に押しかけてきて、風呂まではいるほど面の皮があつくないぞ、おれは」

星くんが押しかけてきたんじゃないかと、私がどさくさにまぎれて無理矢理引つ張り込んだんだけどね。こんなちよつとした一言にも星くんの優しさを感じた。

「ごめんね、まだヒーター出していないの。寒いと思うけど、我慢して。とにかく、ぬれた学生服脱いじやいなよ」

「あ、ああ。じゃあ遠慮なく……。お、小島、こっち見るなよ、おれの裸はお金とれるレベルだからな」

そんな軽口をたたく。きつとわざと明るく振る舞っているんだと思う。私のために。

星くんは学ランの上着を脱ぐと、思い出したように尋ねてきた。

「そつえば、ご家族は？」

「父親は多分出張のふりした不倫旅行で母親は多分知らない男のところ。小学生の弟が隣の部屋で寝てる」

こんな言い方しなくてもいいのに。両親の恥をさらして私は星くんに何を期待しているのだろうか。千春に母親代わりに庇護されていたのと同じように、星くんに私の父親代わりでもしてもらいたいのか。自己嫌悪に胸が痛む。人間は、なかなか成長できない。

「お、隣の部屋は弟さんか。じゃああまりうるさくすると悪いな」

星くんは両親のことには触れずにそう言った。水滴が落ちてくるほどぬれた学生服を片手に、

「悪いけど、ハンガーみたいなの、ないか？」

「ん、そこにあるよ。そのままそこに掛けていいから」

私は部屋の奥を指さしてそう言った。

「小島もびしょびしょじゃないか、着替えてきたらどうだ？ ほんとにカゼ、引くぞ」

「……ん、そうね……」

なんだか、めんどくさい。クローゼットの引き出しから下着を出

して、お風呂場に行って着替えてまた階段をのぼって……。 たったそれだけのことがとんでもなく面倒に思えた。

ふと、馬鹿な考えが頭をよぎる。

今日、ここで星くんに告白して、振られちゃおう。

そしたら、すつきりすると思う。親友も好きな人もみんな私から離れていって、また一人になってしまおう。

そうなってしまうえば、今までみたいにみつともなくあがくこともなくなつて、手に入ることのないものを手に入れようと苦しむこともなくなつて、ずうつと深い深い孤独な穴の底で膝を抱えて一人になれて、誰かのことでつらく思うことも悲しく思うこともなくなる。楽になれる、と思った。ありのままの私をありのままに全部星くんにひけらかして、それで、嫌ってもらおう。

そしたら人生、すごろくでいうところの『あがり』じゃん。ぜえんぶなくなつて、それで私の青春は終わり。ゴール地点だ。楽になれる。

私は無造作にクローゼットの引き出しをあける。隠すこともなく無造作にショーツとブラを取り出す。

「え……」

と、星くんは表情を凍りつかせ、すぐに後ろを向いた。

「こ、ここで着替えることはないだろう？　そ、そうだ、おれが外に……」

「いいよ、ここで着替えよ。めんどくさいし。大丈夫、星くんの裸は見ないから」

そう言つて私はセーラー服のファスナーをおろした。私が部屋の出入り口をふさぐような位置にいたので、星くんは逃げることもできない。昨日はそらさんで、今日は私か。ふつ、と笑いがこみ上げてきた。

「ほら、着替えよ？　私の方が早く着替え終わつたら、星くんの裸をじっくり観察しちゃうからね」

雨を吸って重くなつた上着を手早く脱ぎ去る。ハンガーは星くん

が使っているので、適当にたたんでカーペットの上に置く。スカートのホックを外し、すんと、とおろした。

背後からは衣擦れの音が聞こえる。星くんも着替え始めているようだ。ちらり、と後ろを見てみる。律儀にも部屋の隅っこで後ろを向いている。少しは見たいとは思わないのかな。思わないよね。私は千春じゃないし、私の裸見ても楽しくもないだろうし、興奮もしないだろう。なにしろあの完璧美人のそらさんの誘惑にすら説教で返した人なんだから。

あれ？　なんで私こんなに冷静なんだろう。色気もどきどきも全く感じない。星くんもそうなのかな。そうだよ。どうせ胸も小さいし。

ブラのホックを外す。いつだったか、千春とデパートに買いにいった魔法の品。外してしまうと、残るのはとっても貧相な残念な胸だ。Dカップで小さめなら、AAカップはダブルエーどうなんだろうな。この際、聞いてみるか。ここまで来たら、人生の恥はかき捨てた。

「ねえ。私さあ、上げ底のブラジャーしてたんだけど、ほ、ほんとはね、ほんとにAAなのね。牛井のどんぶりどころか、……揉むところもない、くらい、小さいんだけどさ。星くんは小さいのだと、嫌い？　大きくないと興奮しなかったりするもんなの？」

「……馬鹿なこと言っていないで、早く着替えるよ」

「やっぱり、小さいと駄目よね」

「小島、ほんとにお前、今日ちょっとおかしいぞ。おれも人のことは言えないけどな。……男はさ、女子を好きになるんであって胸に恋する訳じゃない。気にすることない」

ショーツも脱ぎ捨てる。タオルで体についた水滴を拭き取った。

「……小島、着替え、まだか？　おれは終わったぞ」

「いま素っ裸」

「……はやく、してくれ。あとそういうこと言っ
な」

破滅願望がそうさせたのだろうか。

私は、裸のまま、くるりと振り向いた。パジャマに着替えた星くんの背中が見える。ぞくり、と背筋に震えが走った。私みたいな女、破滅しちゃえ。足が、がくがく震える。

「ねえ、星くん」

気配で察したのか、星くんはごつん、と頭を壁にぶつけて、

「小島、小島はおれに軽蔑されるような女子じゃ、ないよな？ 馬鹿なこと言っでないで早く着ろ。それともおれを馬鹿にしてるのか？ からかってる？」

「……違うもん」

軽蔑、という言葉に胸が痛んだ。急に自分で自分が恥ずかしくなる。下着を身につけ、その上から部屋着にしているフリースを着る。ぬれた下着はバスタオルにくるんで端によせた。

「ほら、もう着替え終わったよ」

「ほんとか？」

「ほんと」

「振り向いても大丈夫か？」

「大丈夫だって」

星くんがゆっくりとこちらを向く。心なしか、頬が朱色に染まっている。あれ。私なんかの裸でも、少しは照れてくれたのだろうか。「うちのお母さんは昼頃まで帰ってこないし、まあゆっくり寝ていきなよ。寒いでしょ？ 私が使っているやつで悪いけどさ。多分、そんなに汚くはないはずだから、これ、使いなよ」

押し入れから毛布を出してわたす。星くんは寒かったのか、それにくるまって部屋の隅で壁によりかかるようにして座った。私はしきっぱなしの布団の上にぺたん、と座る。

「学生服、明日の朝までに少しは乾くと思う。今日は、もう、寝よ」
「小島、それ……」

星くんが自分のほつぺたを指さして言う。

「痛くないか？」

自分の頬を触ってみた。ちりり、と痛みが走る。部屋に転がって

いる手鏡で自分の顔を覗いてみた。

「ありやりや。えへへ、こんななんっちゃってたのか」

鏡の中の自分の顔は、そりやもうひどいものだった。バスタオルで拭いただけの髪の毛はぼさぼさ、さつき泣いたせいで目元は赤く腫れあがり、瞳には輝きもなく、唇はかさかさでひび割れている。顔色は血の気が引いていて真っ青になっていて、肌は不毛の砂漠でがさがさだ。

そして、右の頬は、かなり広い範囲ですりむいていた。目のすぐ下から顎のラインまで、皮膚がめくれ、ところどころから血が出ている。乾いた部分の血がどす黒い。ゾンビ映画に出てきそうだ。

「あー、こりや、ホラーね……。ごめんね、気持ち悪いよね、こんな顔」

「なに馬鹿言ってるんだ。とりあえず、消毒した方がいいぞ。ばい菌が入ったら大変だ」

「そうね……」

私はクローゼットから薬箱を取り出す。

中に入っているのは消毒液やら絆創膏やら。消毒液に脱脂綿を浸し、鏡をのぞき込んで傷口にそれを当てた。しみて、痛い。

「悪かったな……。おれの、せいで」

「星くんのせいじゃないよ。全部、私の責任。いままで棚上げにしてきたことがたまたま今爆発しちゃっただけだから」

「いや、おれが悪いんだ。子供みたいに駄々こねてまわりに迷惑かけてその結果がこれだもん。はっは、我ながら死にたくなるほど情けないよ。明日、葉村にはおれからも謝る。葉村や美雪さんと仲直りしてほしい」

「明日、私学校行かないもん」

「なんで？ 行けよ」

「いやよ。こんな顔じゃ行きたくない」

「……………そうか。ごめんな」

しばらく二人とも黙り込む。

傷口はそんなに深くないようだった。傷痕きずあとがのこってしまっただろうか。どうでもいい。いつそのこと、もっとぐちゃぐちゃになったっていい。

空気を変えようと思ったのか、星くんが口をひらく。

「小島は自分の部屋に救急箱があるんだな。結構、珍しいよな」

「親に、よく殴られるから」

「……………」

ああ、自己嫌悪。なんで私という人間はこんななんだろうか。

ありのままの自分？ 一皮むいちゃえば、本当の私なんて、馬鹿で、子供で、自分勝手に、他人に勝手に依存して迷惑かけて、醜くて、すけべで、かわいそうなくらいドジで、哀れになるくらい馬鹿で、馬鹿で、馬鹿で、馬鹿で、馬鹿だった。

世の中のほかの人たちはどうやってるんだろう。本当の自分が、こんなにもみつともないのって世界で私だけなのだろうか。みんなうまくやってるように見える。

脱脂綿をごみ箱に放り入れ、布団を頭からかぶった。

「……もう、寝よう。なんか、今日は疲れた……」

「ああ、そうだな、おれも疲れた」

星くんは毛布を体にまきつけ、もぞもぞと横になった。私は片手を伸ばし、蛍光灯の明かりを消す。部屋の中が暗くなる。外はまだ雨が降り続いている。雨はだんだんと激しくなるばかりで、その音は激しく屋根を叩く。まるで私たち二人がこの部屋に閉じ込められてしまったように感じた。

もう、何も考えたくない。考えるの、やだ。

このまま眠りについたまま、消えてなくなってしまうればいいのに。

布団にくるまって、私は目を閉じた。

ゆっくりと息を吸い、ゆっくりと吐きだす。

今日の出来事が頭の中をかきまわす。

千春は怪我をしていないだろうか。美雪ちゃんはさすがに強かつ

たなあ。その後、お母さんになんて言い訳しただろうか。千春との喧嘩ですっかり忘れていたけど、星くんは家族とどんな話をしたんだろう。

まだ、雨は強く降り続けている。

雨が窓を叩く音をただひたすら聞いていた。

どのくらいの時間がたっただろうか。

十分？ 二十分？

私は暗闇の中、目を開ける。

眠れない。眠れるわけがない。

耳を澄ます。雨が他の物音をすべてかき消してしまつて星くんの気配は感じられない。もう寝ちゃったのだろうか。知り合いの女の子の部屋でそんなに早く寝つけるものかな。星くんはここ数日間、気の休まる暇もなかったはず。あげくの果てにこんな汚い部屋に連れてこられて、眠れても心は休まらないだろうな。

「ねえ、星くん」

呼びかけてみる。返事はない。雨の音がすごい。もう少し、大きな声を出す。

「ねえ、星くん、もう、寝ちゃった？」

「……起きてるよ」

星くんの声。

「寒いね」

「もう十一月だからな」

「私寒いよ」

「言つとくけど、小島の布団より、おれの毛布の方が薄いんだぞ」

「じゃあ、星くんも寒い？」

「少しな」

「私の布団、わけてあげるよ」

私は貝殻を背負ったヤドカリのように布団をかぶったまま、もぞもぞと四つん這いで星くんの声のする方向へにじりよる。

壁際にうつぶせになって、貸してあげた枕を抱いて寝ている星く

んの背中影が見えた。そうか。星くんはうつぶせになって寝るタイプなのか。好きな人の癖を発見するのは、うれしい。そのまま近寄り、布団ごと星くんを背中から抱きしめるようにして体をくっつけた。星くんの体がびくりとはねた。

「ほら、これであつたかいでしょ」

「……そうだな」

星くんが緊張しているのがわかる。後ろから手を伸ばして、星くんの手を握る。振り払うこともなく、星くんは優しく私の手を握り返してくれる。

左の耳を、星くんの背中にぴったりと当てる。

星くんの、体温が伝わって、温かい。

「心臓の音、聞こえる」

「生きてるからな」

そう、生きている。星くんは、間違いなく、ここにいる。

「星くんの心臓、すごく早いよ。ドクドクいってる」

「緊張してるからな」

「昨日、そらさんにも同じことされたでしょ」

「ああ。あん時もどきどきした。死ぬかと思った」

「今は昨日ほどじゃないでしょ」

「昨日よりももっとどきどきしてるよ」

「私なのに？」

「小島だつて女の子だろう」

どうしてだかわからないけれど、思わず「ふふふ」と笑い声をあげてしまった。

「じゃあ、私でも少しはエッチな気分になるの？ 私、千春じゃないよ」

「……ならないことは、ないぞ。一応男だ、おれは。わかってるか？」

「わかってるよ」

きゅ、と握った手に力をいれた。

星くんは私の貧相な体でも興奮してくれるんだろうか。好きでもなんでもない女でも？

「ね、星くん。私が実はすごくエッチな女だってこと、知ってた？」

「小島は実は自分のことを大事にできる女子だってこと、知ってるぞ」

「買いかぶりだよ。でも、ありがとう。」

「星くん、女の子が自分からこんなことしてるのに、なにもしないの？」

「なにもってなんだよ」

「エッチなこと」

「しない」

「どうして？」

「……………」

沈黙。私は星くんの鼓動を聞き続ける。ドクドクドクドク。星くんの心臓が壊れちゃうんじゃないかと心配になるくらいのペースだ。

「なあ、小島」

しばらくして星くんが低い声で呟いた。

「なに？」

「小島が思っているよりも、小島はいい女だぞ」

「ありがと」

嘘でも嬉しい。

また少しの間黙りこむ。

「おれも馬鹿だよな」

星くんが溜息まじりに言った。

「一人で勝手にパニックになって家出して、それで周りの友達みんなに迷惑かけて」

「そんなこと……ないよ」

「石川さんにさ、闘えって言われたけど、結局逃げ出しちゃったぜ、おれ」

「星くんは逃げてないよ」

「逃げてるよ。そうじゃなかったら今ここでこうしていい。おれってどれだけ情けない男なんだ。がちゃがちゃ周りをひっかきまわして。小島は自分にがっかりすることって、あるか？」

「あるよ。例えば、今とか」

「はっは。ほんとに……おれは、おれがこんなに弱い人間だなんて考えたこともなかったのに。ちよつと問題が起こったらこれだよ。なんだか、もうみんなに合わす顔がないな。……このまま、母親について九州に行っちゃうのもいいと思えてきた」

駄目よ。そんなの、嫌だ。だって、

「星くんと会えなくなると、寂しい。それに、あきらめて今九州行っちゃったら、それこそ逃げだよ」

「別に、おれがいなくなっただって、大したことないよ。半年もすれば小島だっておれの顔も名前も忘れちゃうだろう」

星くんの声は、少し震えていた。もしかしたら、星くんも私と同じなのかもしれない。誰にも必要とされていないって思ってる。自分なんか、消えてしまえって。もし転校するようなことがあったら、それが本当になってしまう。私の前から、消えてしまう。

やだよ。

やだ。

「ねえ、星くん、覚えてるかなあ。中学二年生の時さあ、夜中に橋の下駐車場でばったり会ったことあったじゃん」

「……ああ。そんなこともあったな」

「あのときさ、私があそこだなにしてたか知ってる？」

「……いや。変な雰囲気だなとは思ってたけどな」

中学二年生の秋。私はあの日、夜中に家を飛び出したのだった。学校ではささいなことでクラスメートに無視されていて、家に帰っても家族はバラバラ、父親と母親が大声で怒鳴り合う声、まだ幼い弟の泣き声、学校でも家の中でも居場所をなくして、世界は色彩を失い、すべてが真っ暗に思えた。

私はふらふらと家を出て、行く場所も見つからず、ただ歩いた。

制服を着ていたと思う。紺色のブレザーとチェックのスカート。そんな格好で、真夜中の市内をただ歩きまわった。よくもまあ補導されなかったものだ。

何も考えず、考えられず、ひたすら歩いた。市内を流れる川の堤防沿いに、ひとつ、ふたつと灯りが消えていく町並みを見ながら、目的地もないのに歩き続けた。

気がつくのと、いつのまにか繁華街にいた。光に誘われる昆虫のように、明るい方へと足が向いたらしい。

これからどうするのかなんてわからなかった。家には帰りたくなかった。かといってほかに行くところもない。

人の顔が見えるところに行きたくて、目に付いたコンビニに入った。財布はもっていたけれど、中学生のことだ、千円くらいしか持っていなかった。買いたいものも別になかったから、雑誌のコーナーで興味もない本を手に取りぱらぱらとめくった。一時間もそこにいたのだろうか。店員が私を怪訝な顔けげんで見ていた。中学生が制服で歩く時間ではなかった。コンビニを出て、どこに行けというのだろう。ここにるのが一番安全なように思えた。でも、ずっとここにいるとどこかに通報されるかも、とも思った。

ふと、手にしていた雑誌の広告欄を見た。そこには電話番号が書かれていた。何度か口の中で暗唱してその番号を覚えた。

そのままコンビニを出て、またふらふらと歩いた。シャッターが降りている郵便局のそばに、公衆電話があった。なにも考えてなかった。真っ白な頭のまま、硬貨を入れ、さつき覚えた番号をプッシュした。

知らない男の声が聞こえた。いろいろと私のことを聞いてきた。年齢と、身長と、体重。家出中だ、と私は言った。ホテルに泊まらせてあげる、と男が言った。郵便局から十分ほど歩くと川に出る、そこに架かっている橋の下に駐車場がある。一時間後に迎えに行く、と男は私に言い、おこずかいもあげる、と付け加えた。

私は街灯の光も届かない橋の下の駐車場で、何の感情ももたずに

立っていた。これからどうなるかなんて考えていなかった。それを考えるだけの余裕も経験もなかった。

「馬鹿だよ。ほんとに知らなかったのよ、なんとなく、悪いことに巻き込まれるんだろ？な、っていうイメージがあっただけ」

「……………」

星くんは何も言わず、ただ私の話を聞いている。今は動悸^{きん}もおさまり、星くんの心臓はまるで私を落ち着かせようとしているかのようにつつくりと動いている。

「ねえ、思い出したくもないことだしさ、今まで聞いたことなかったんだけど、あの時星くんあんなところで何してたの？」

「………… 秘密だ。それは言えない」

橋の下でぼうつと立っている中学生の私の目の前に、だれかがやってきた。最初は、電話の男だと思った。でも、遠くの街灯に照らされて姿を見せたその人は、大人の男ではなかった。まだ今ほど背の高くない、幼い顔立ちを残した、にきびだらけの、成長途中の男の子。

星くんだった。

顔だけ知ってる程度でしかない、委員会活動で何度か言葉を交わしたことがあるというだけのクラスメート。

「小島、だよな？　そこで何をしているんだ？」

と中学生の星くんは言った。

「待ち合わせ」

と私は答えた。

ほんの数秒、見つめあった。

「誰とだ？」

と星くんが聞いた。

「知らない。今日初めて会う人」

と私は答えた。

次の瞬間、星くんは私の手首に手を伸ばした。痛くて声を出しそうになるほど強く握った。そしてひきずるように私をその場所から

連れ去ったのだった。

「すごく痛かったんだよ。もうほんと、無理やり引っ張って行ったよね」

「はっは、自分ではわからなかっただろうけど、小島の顔、ひどかったぜ。目に霞かすみがかかっているというかさ、催眠術にかかっているというか、意識がないというか、そんな感じだった。やばい、って思ってた。これはもう、悪いことに巻き込まれてるんだ、って思いこんだんだ。で、思わずああやって小島を拉致らっちっちゃった」

「それで正解。あの時、星くんがきてくれなかったら、私はきつと……… どうなってただろうね。考えただけでも、ぞつとするわ。」

——ある意味、あれは自殺だったのかも。魂たましいの自殺っていうかね」

星くんは、そんなどん底から力づくで私を救いだしてくれたのだ。中学生の星くんは、私をぐいぐいと振り返りもせず引っ張って行き、

「小島の家はどこ？」

「教えたくない」

「家まで送るからさ」

「帰りたくない」

星くんは立ち止まり、そこで初めて振り返った。そして、今では考えられないけれど、とても冷たくて硬い表情で、こう言ったのだ。

「じゃあこの手は絶対に離さない」

「それでも、家には帰りたくないよ……」

「親戚の家とか、おじいちゃんとか、おばあちゃんとかは？」

「近くにはいないの……」

「じゃあ、友達の家とか。とにかく、おれが安心できるところ。そこまで送る。じゃなければ朝学校が始まるまでこの手を離さない」

私は根負けし、友人の家の場所を星くんに伝えたのだった。小学生の頃に何度もお泊まり会をしていて、家族みんなと仲良かった友人の家。つまり、千春の家。

「あの頃はね、千春もまだ私のことるちゃん、って呼んでたのよ。女の子同士だし、そっちの方が自然だよ。千春の家は温かくてさー、あ、温度じゃなくて、人がね。千春も美雪ちゃんもお母さんもお父さんもとて温かいんだ。でさ、次の日から、昼休みとか放課後になると、千春のやつわざわざ私のクラスまでおしゃべりにくるようになったの。星くんは知ってたかなあ。あの頃、私と話してくれる女子って一人もいなかったんだよ。でさ、千春馬鹿だからさ、るるちゃんが後輩にタメ口きかれてるところを同級生に見せられないうって、わざとらしく敬語つかいはじめてさ、あいつ、幽霊部員だったけどあの頃まだ柔道部所属だったし、しかも女子に人気のある美雪ちゃんが妹でしょ、最初はクラスの子からシカトするのやめてくれて、そのうちだんだん、他の人も話してくれるようになった……。……星ちゃんと千春がいなかったら、私、たぶん、いまごろ、壊れちゃってたと思う」

「そうか。じゃああの時のおれは間違ってたんだな。その話を聞いて、初めてあの時の自分を嫌な奴だと思わなくて済むようになった」

「ありがとうね、星くん」

「実は、遠くから見たときは幽霊かなにかだと思ったんだけどな」
「ひどいなあ」

私たちは体をくつつけたまま、くすくす笑う。

「ねえ、星くんって普通の男の子？」

「自分では普通だと思ってたんだけどな、最近までは」

「昨日は下着姿のそらさんでしょ、今日は一応、まあ、女はある私と今こうやってくつついてるし。なんでなにもしないの？」

「だって、昨日のそらさんも、今日の小島も、……さっき小島も言ってたじゃないか。魂の、なんとかって。そんなの、いやだからな。女子が自暴自棄なのにつけこんで、ほら、なんていうかチヨメチヨメするのはおれの主義に反する」

……チヨメチヨメって！ いまどき、チヨメチヨメって！ しか

もいま超シリアスな声で、すっごい真面目に、その上ちよつと照れながらチヨメチヨメって言った！ 新吾？ 山城新吾なの？ あんたいくつよ？

思わず、くつくつ、と笑ってしまった。それをどう思ったのか、星くんも笑いながら、

「だからさ、小島が元気になつてから、改めて、そうだな、バーの格好で私を食べてぴょん、って言ってくれたらその時は据え膳食べるぞ。ついでに葉村も呼んでくれると嬉しい」

「……考えておくわ。そのコスプレ衣装はもちろん星くんが買ってくれるのよね？」

「うーん、バイト代もう使い切ったしなあ……。もつと安上がりに、そうだな、やっぱり裸エプロンで、台所で料理してるところでさ、テーブルの上におれを寝かせてあなたも料理しちゃうわよ、っていうのも」

「ちょ、ちよつと待って、ごめん、それはついていけない」

そうは言っても、星くんの冗談がいつもよりもおかしく感じられて、しゃっくりみたいない笑いが出てしまう。

「ぷっ、くく、わ、私が料理するの？ 星くんを？ 女体盛り……じゃなくて、男体盛りしてもいいの？」

「おう、いいぞ、好きなだけおれに盛り付けてくれ。きれいにしてくれよな。乳首は薔薇でかざってくれ」

「ね、生け花プレイって知ってる？」

「なんだそれ」

「あのね、男の人の、お、お尻の穴でね、生け花を……」

怖いもの見たさで美雪ちゃんに借りた漫画にそんなのがあった。やさしく、してね……」

星くんは裏声でそう言う。つい、くすくすと笑ってしまった。つられて星くんも笑う。

二人で身を寄せ合い、体を震わせ、笑い続ける。左手で星くんの背中の辺りをぎゅっと握りしめる。

星くんは私の手を離すと、仰向けに姿勢を変える。腕枕してくれないかな、と思ったが、そこまでサービスはしてくれなかった。ひとつの布団を共有して、ふたり、並んで天井を見る。

「高校生っていうのは、ほんと、自由がないよね」

ぽつり、と星くんが呟く。

「そうね。ほんと、なんにもできない。親の都合、家の都合、学校の都合、いろんなものにがんじがらめにされてるわりには自分でできることってなんにもないよね」

「ああ。それでもじたばたじたばた暴れてさ。今のおれみたいに周りに迷惑ばかりかけてしまう」

「私もそうだわ。それなのにもがけばもがくほど、状況は悪くなっていく気がするよ。蟻地獄みたい」

「でもさ、今やっと、それが悪くないって思えた。それでも、こうしておれのことを考えてくれている友人がいる。小島も、葉村も、美雪さんも、店長も、そらさんも、石川さんだってそうだし、おれを泊めてくれてたあいつもおれの親友だ。ほら、この間、石川さんが言ってただろう？ 逃げて勝つより、闘って負けろって。おれたちはまだそれが許されるんだと思う。家族から逃げることなんかできないんだし、正面からぶつかってあがくだけあがいて、それで負けたとしても、負けじゃないと思う。そもそも、家族相手に勝ち負けなんてなかったのかもしれないしな」

「……そうかもね。私も、もつとあがいてみるかな」

「で、うまくいかなかったらまたこうやってお互いに馬鹿みたいな話して、元気もらって、また立ち上がればいい」

「うん」

いつの間にか、雨は止んでいたようだった。カーテンの隙間から見える外の世界が、ほのかに明るくなり始めている。

「星くん」

自然に、口が動いた。

「私、星くんが好き」

言えた。言ってしまったら、胸のつつかえがとれたように軽くなつたのを感じた。

「ああ。そう言ってもらえるのは嬉しいぞ。ありがとな」

「世界で一番星くんが好きだよ。あ、弟が一番かな。でも星くんだな。私はほんとに星くんのことが好きだよ」

星くんは天井を見つめたまま、静かに答えた。

「おれは今も葉村が好きだ」

「うん」

私はその答えをびっくりするくらい抵抗なく受け入れることができた。うん、そうだよ。千春の良さをわかってくれるくらい、星くんはいい男だもん。そんな星くんが好きなんだ。

星くんはふ、と笑って、

「おれの場合は一番と二番が父さんと母さんで、次が葉村で、小島は五番目か。順番つけるもんでもないけどな」

「順番つけるなんてちよつと失礼だよ……あれ。私が五番目なんだ。四番目は？」

「小島は知らないやつだよ。アパートに泊めてくれてたやつ。付き合いは短いけれど、親友だと思う」

「BLなの？」

「あいつとなら、そうなくてもいいくらい……ではないな。今想像したら無理だった」

ふふふ、と二人で笑い合う。

「星くん、ごめん。前言撤回。私もやつぱり千春が一番だ」

「ああ。そうだと思ったよ。……百合なのか？」

「うん、百合だよ」

「はっは、そりゃいい。それなら——明日、いやもう今日か。ちゃんと仲直りしたところをおれに見せてくれよな」

「うん」

そうだ。朝一番に千春の家に行こう。そして、ちゃんと謝るんだ。親友のいない人生なんて、これ以上味気ないものはない。そっか。

星くんはまだ千春のことが好きか。千春も星くんのこと好きになっちゃう、なんて展開もあるのかな。いいや。小細工抜きで、恋を楽しめばいい。それにしても、私は星くんの五番目か。六十億人も人間がいるのに、そのうちの五番目なら、凄いよね。今だけは、それで満足しておこう。くふふ、と笑みが浮かんだ。

それから私たちは、延々とくだらないおしゃべりをした。どちらかというと私が一方的に喋っていたような気もする。カーテン越しでも朝日のまぶしさがわかるくらいの時間まで喋り続けて、話しのする私の部屋の戸を弟が開けてしまい、彫像のようにかちんこちに固まってしまった弟を前にふたりで顔を真っ赤にして弁明するという事件もあったけど、それは今話すことではないだろう。

状況はなにも変わらず、何も良くなってはいなかったけれど、なぜか、私の目に映る世界は今までよりも明るく見えた。うまくいかなくてもいい。やれるだけのことをやろう。そう思った。

まずは、親のそれぞれの恋人にでも挨拶に行つてやろうか。

親友がいて、片思いの男の子がいる。

そんな乙女は、無敵なんだから。

エピソード

私は、バイクのタンデムシートに座っていた。バイクはもの凄いスピードを出し、国道四〇二号線を風のように疾走する。私は振り落とされないようにしがみつただけで精いっぱいだった。

そんな私のことなんてまったく考えてないかのようにライダーはアクセルをひねり続ける。私は恐怖で心臓がきゅっと縮むのを感じる。ただただライダーの腕を信じて、その細い腰を折れるくらい力を込めて抱きしめる。

排気音と振動が私から思考能力をどんどん奪っていく。気を失ったら、道路に全身を叩きつけられるだろう。このスピードだと、間違いなく無事ではすまない。私の足もと数十センチのところに、命の境界線がある。道路のアスファルトは容赦なく私から命を奪うに違いない。気が、遠くなる。意識が、途切れそうになった。もう、だめだ――。

そう思った瞬間、バイクは減速を始めた。海岸に面した駐車場へと入って行く。

「どう？ バイクって、いいものでしょ？」

海が良く見える場所にバイクを止めたそらさんが、フルフェイスのヘルメットを脱ぎながら満面の笑みでそういった。そらさんの柔らかなで美しくカールした髪の毛が、沈みかけの太陽の光でぴかぴかと輝いていた。

私はというと、ハーフタイプのヘルメットを脱ぐとすぐにその場に座り込み、臨界点近くまで速くなった心臓の鼓動を抑えるために深呼吸を繰り返していた。

「このスリルがたまらないんだよ」

そらさんがにこにこ笑って言う。私はそらさんをぎらり、と睨みつけた。

「私、決めました。もう一生、バイクには乗りません」

「あれえ。るるさんって、案外根性ないのね。そんなんじゃ、星くんが免許とつても一緒に乗れないよ？」

「……………自動車の免許とつてもらいます」

「彼女でもない女の子のために、子供のころからの夢をあきらめるとは思えないなあ」

そらさんは意地悪く笑ってそう言う。くそ、その笑顔すらかわいらしいのがむかつく。

とにかく、今は息を整えないと。

「で、星くんはこれからどうなるのか、なにか聞いた？」

そらさんはいつまでたつてもしやがみこんでいる私に呆れたような顔をしてそう言った。

「どうもこうも、まだ何も聞いてません」

「あら。だって、今日の朝まで同じ部屋で一緒に寝ていたんでしょ？ そのくらいわかるはずだよ」

「だから、これから家族と話し合いするって時に、急に店長から電話がかかってきたんじゃないですか」

そうなのだ。今日の朝まで、私は星くんと一緒にいた。星くんは家に帰る、と言って生乾きの学ランを着て出て行った。それから、千春の家に行つて謝らなくちゃ、と思つて、思ったけど寝不足だったので少し横になったらそのまま熟睡してしまっていたのだった。

目を覚ましたのは午後三時、店長からの電話。私の通学鞆を取りにこい、という内容だった。そういえばあそこの公園に忘れて行つたままだった。なぜ店長がもっているのかというと、どうも、千春も学校をさぼって、その上バイト先にかけこんで延々と昨日の出来事を店長に愚痴っていたらしい。しかも、美雪ちゃんまで学校をさぼってついてきていたという。何を考えているのか、迷惑なことだ。で、店長と話をしているうちに、いつの間にか当事者みんなで海に行こう、ということになって、店は石川さんにまかせ、じゃんけんに負けた私がバイクの後ろに乗ることになったのだった。

私たちに遅れること数分、駐車場にぼろぼろの軽自動車が入って

きた。運転しているのは店長だ。もつといい車買えばいいのに。そらさんのバイクの隣に車をとめる。中から、星くんと千春と美雪ちゃんが伸びをしながら出てきた。

「おお。海だあ！」

星くんが叫ぶ。日はすでに傾いて、水平線のすぐ上に真っ赤な姿を見せていた。風が強く、波が高い。十一月の日本海はロマンチックな気分には浸らせてくれないほど、荒れていた。

「この場所、私好きなんだよ。いろいろ思い出があつてね」

そらさんは目を細めて沈みゆく太陽を見つめ、ふいとまわれ右、車に寄りかかって缶コーヒを飲んでいる店長の方へと歩いて行った。

星くんは一メートルほどの高さの防波堤にひよいと飛び乗ると、そこであぐらを組んで海を眺める。私はそのそばで防波堤に腕を預けてやはりぼんやりと水平線を見つめた。そのまま、星くんに話しかける。

「ねえ星くん、今日はお母さんと話せたの？」

「少しだけね」

「なんとかなりそう？」

「はっは、わかんないよ、まだ。ただ、言いたいことはこれからちゃんとやんと言っし、できることがあればなんでもするし、喧嘩して喧嘩して、あがいてあがいて、それでも……どうしても父さんと母さんが仲直りできないっていうのなら、……その時は受け入れるしかないな」

「うん」

「家族だからな」

「うん」

そして私たちは黙りこむ。水平線にゆっくりと日が沈んでいくのを二人で眺める。会話がなくても、こうしているだけでなんとなく居心地がいい。星くんもそう思ってくれてると感じた。

気がつくと、私の両隣に千春と美雪ちゃんがいた。

私たちは、荒れる波の音に耳を傾け、太陽が海の向こう側へ隠れて行くのを見続ける。

「せんぱい……」

千春が私に話しかけた。千春の顔は殴られた痕があざになっていて、唇にはまだ痛々しく血が滲んでいた。ずきん、と胸が痛む。痛い。こんなにかわいい女の子に、こんなに素晴らしい親友の顔に、傷をつけたのは私なのだ。

「千春、ごめん」

私は千春に向き直って、素直に頭を下げた。

「私が悪かった。全部、私の思い込みと自分勝手と、頭の悪さと、子供っぽさと、とにかく、私が悪かった。ごめん。ごめんなさい。美雪ちゃんも、ごめん」

千春は一瞬驚いた顔を見せ、それは心底驚いた表情らしく、

「そんな、悪かったのはあたしですよ。だって、るせんぱいに黙って、星先輩を……、」

千春はちらりと星くん視線を投げた。

「……うちに泊めようとしたんですから。どう見ても約束違反ですもん。あたしが悪かったんです。殴られて当然のこと、しちゃったんですから」

千春も私に頭を下げる。美雪ちゃんは私の正面にくと、なんといきなり土下座した。

「るる、すまん！ 千春の言うとおりだ。私たちが悪かった。その上、あんまり急なことで、つい技を使ってしまった。私は柔道家として失格だ。申し訳なかった！」

私はあわてて美雪ちゃんの前に跪いた。ひざまづ顔を上げさせる。

「いいのよ、私が悪かったんだから。私から千春に殴りかかったんだし」

「傷は、大丈夫なのか……？」

「大丈夫よ、こんなんじゃ、私のしたことに比べたら全然甘いくらいだわ」

私は美雪ちゃんの手をとって立ち上がる。私たちは三人、見つめ合う。私も含めて三人とも、顔にほっとした表情を浮かべる。

良かった。ちゃんと、謝れた。謝ることさえできたら、私たちは仲直りできるんだ。だって、親友だもん。

三人同時に、くすりと笑った。

突然、空から何かが降ってきた。といっても星くんが堤防から飛び降りただけだ。

星くんは直立不動、私たち三人の顔をひとりずつしっかり見ながら、

「小島、葉村、美雪さん。今回のことはすべて、おれの責任だ。おれのカキつばさが全部招いたことだ。おれのせいで、三人の友情にひびをいれてしまった。ごめん！」

そしてきつちり九〇度、腰を曲げて最敬礼。私たちは同時に顔を見合わせ、にこりと笑った。

「星くん、気にしないで。星くんは悪くないよ」

「星先輩、あやまらないくださいよ。あたしたちが勝手に喧嘩しただけですしい」

「星先輩、そんな謝ることはないです。私たちの未熟さが招いたトラブルなんですから」

三人同時にしゃべったから星くんには聞き取れなかったかもしれない。今度は四人で顔を見合わせて笑った。視界の端に、店長がにやにやしながら私たちを眺めているのが見えた。くそ。私もはやく大人になってやる。どうでもいいけどさっきまで店長が口をつけていたはずの缶コーヒー、なんでそらさんが飲んでいの？ やっぱりこの二人、なんかあやしい雰囲気とする。

私たち四人は堤防の上に座っていた。右から星くん、私、千春、美雪ちゃん。太陽が真っ赤に燃えながら海の方こうに沈んでいく。四人とも、それぞれの思いを胸にそれを見つめているのだろう。

「せんばあい、その傷、痕が残らないといいですね」

緋色ひいろの半円から目を離さずに千春が言った。

「私のことより自分の心配しなさいよ。……それ、ごめんね。痛くなかった？ 千春こそ、痕が残っちゃったら私どうしたらいいか……」

「どうしたらいいかって、簡単ですよ。せんぱいが……るるちゃん、責任とつてあたしのお嫁に來ればいいんです」

「なによ、逆じゃないの、私が旦那であんたが嫁でしょ」

「うーん、どっちでもいいや。るるちゃんはあたしの嫁で旦那あそう言つて千春が私の腕に抱きついてきた。温かい。千春の体温は私の心までじんわりとぽかぽかにしてくれた。」

「これからも、私たちの友情は続いて行くだろ。なにがあっても、ずっとずっと。」

と、綺麗に締めようと思つたのに、突然星くんが話しかけてきた。
「小島。あのさあ、昨日話しそびれたんだけど、なんであの時、あの橋の下の駐車場におれがいたか」

「ん？ ああ、そういえば、秘密だとか言つてたね。どうしてなの？」

星くんの顔が赤いのは、……これは、夕日のせいじゃない。本当に顔を真っ赤にして、星くんは話し始めた。

「実はさ、あそこの駐車場のところ、よくエロ本が捨ててあつたんだ」

「へ？」

思わず間抜けな声が出る。

「何十冊もあつたんだ、よりどりみど。爆乳貧乳凌辱SMなんでもあり。おれも中学生だったし、自分じゃ買えないし、親が寝靜まるのを待つてさ。たまにこっそり夜中に家を抜けだして見に行つてたんだ。あの日もさ、我慢できなくなつてエロ本を見に行った。そしたら、エロ本があるはずの場所に同級生の女の子がものすごい形相で立っているんだもん。びっくりしたぞ」

「ぷっ」

思わず、嘔き出した。

「そ、そしたら、わ、私ってば、エロ本のおかげで助かったってこと？」

「……まあ、そうなるなあ」

「は、白馬の王子様だと思ったのに、エ、エロ本が目当てだったなんて、ぷっ、私ってば、私ってばほんとに……」

笑いが止まらない。体がひくひく痙攣する。

「ひっ、ひっ、ひっ、ひっ……あはっ、あっはははははははは！」

お腹の底から笑うなんて、いつ以来だろう。

ぽかんとしている千春と美雪ちゃんをよそに、私はひたすら笑い続けたのだった。

了

後書き

前回で完結なのですが、小説投稿時に完結処理するのをわすれてしまったので、蛇足の後書きです。

拙い作品にもかかわらず、ここまで読んでくださった方、ありがとうございました。

できれば感想・評価などいただけると嬉しいです。

初めて最後までかき上げた長編小説なので、ある程度の思い入れもあつたりするので……。

何人の人に最後まで読んでいただけたんだろう……（笑）

普段は東方の（すけべえな）SSなどを書いていますので、18歳以上でそういうことに嫌悪感を抱かない方は是非そちらもお読みいただければさいわいです。

ノクターンノベルズの方で同じペンネームでかいてますのでよろしくです。

それではここまでお読みいただき、本当に本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9828p/>

AAカップはへこたれないッ！

2011年2月1日06時10分発行